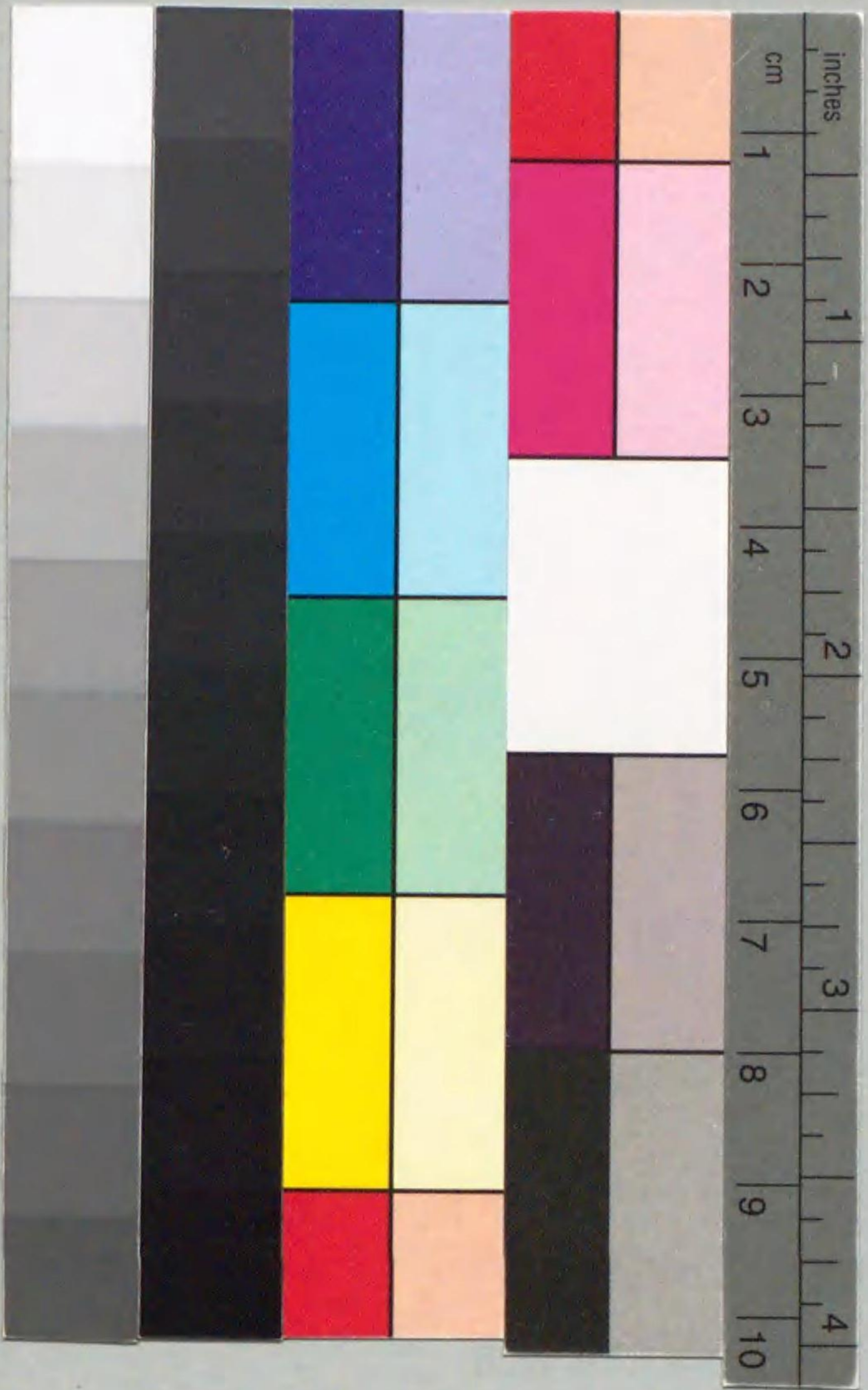
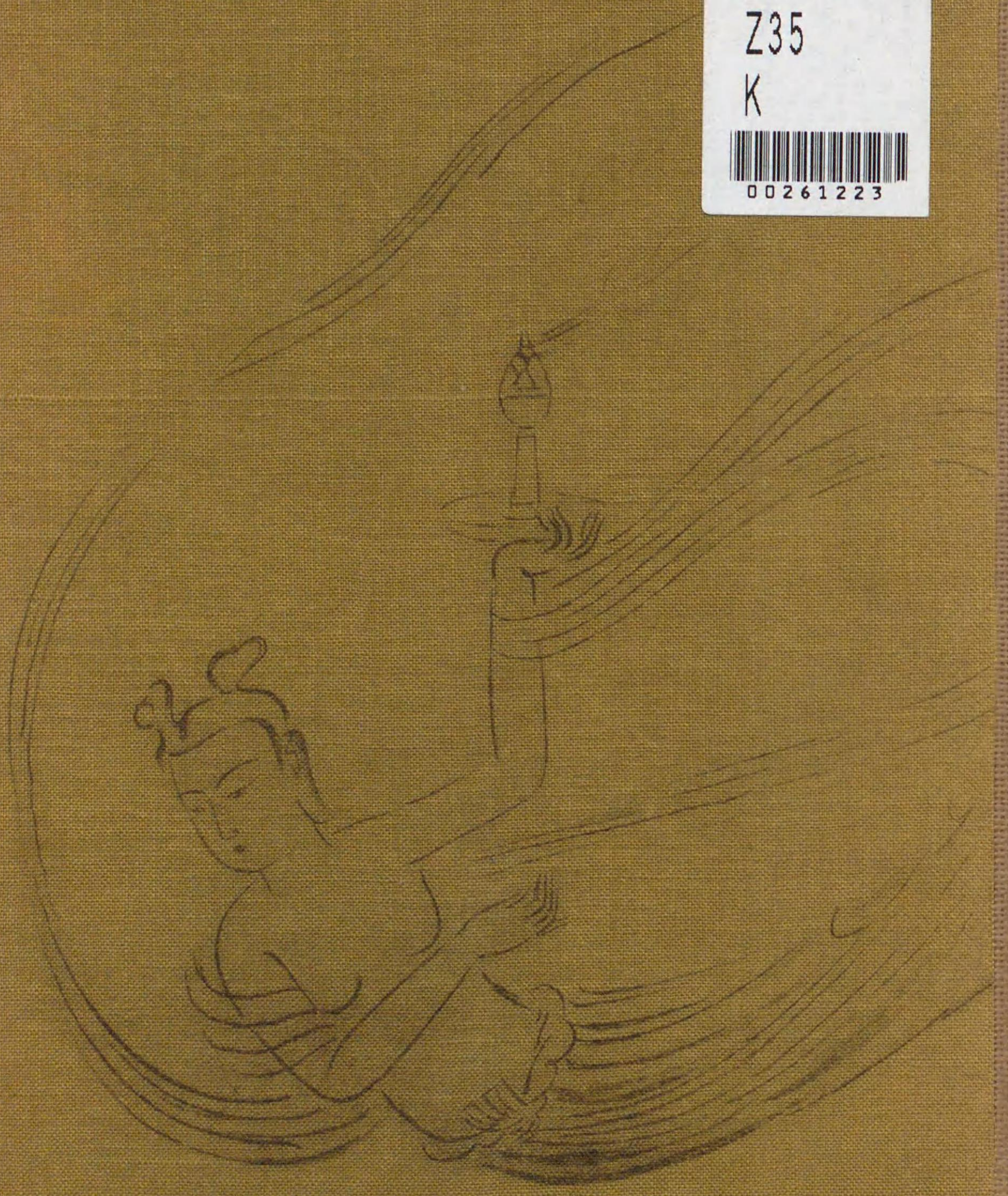
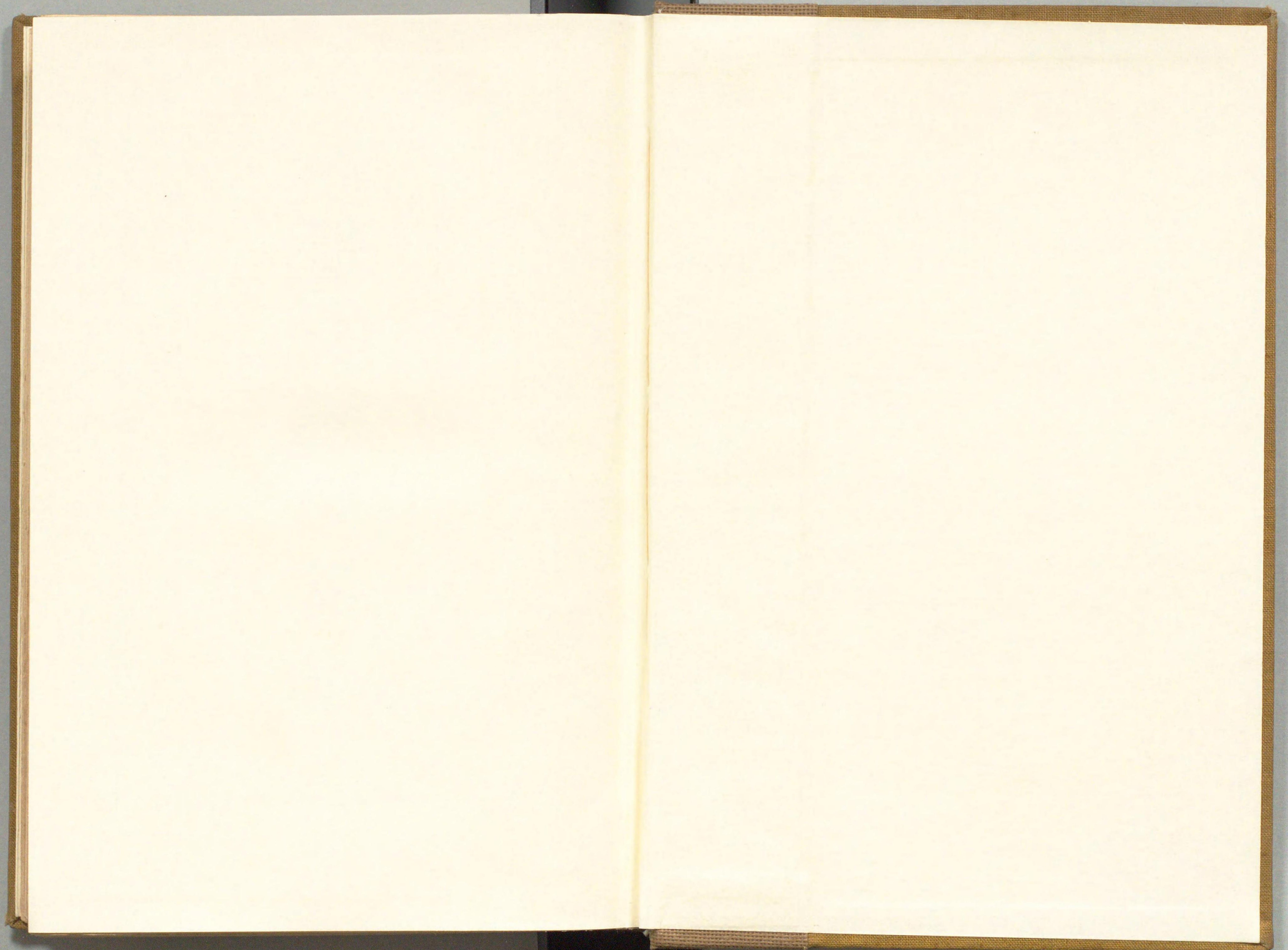


914.5  
Z35  
K







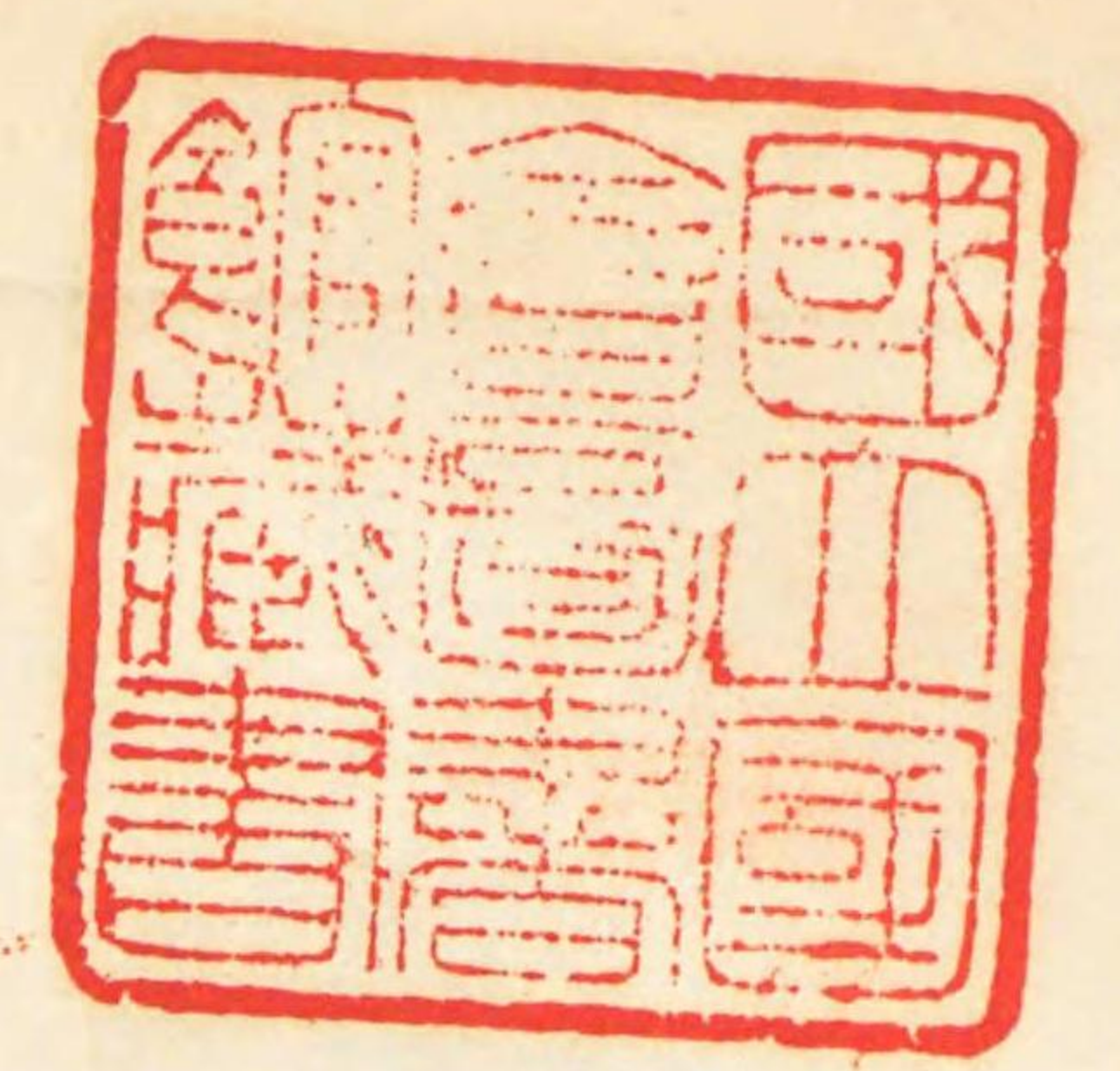


2L-80

隨筆文學選集  
第四



914.5  
Z35  
K



261223

隨筆文學選集 第四卷

目次

織錦舍隨筆	一
臺筵小牘	一五九
役者論語	一八五
鮫皮精鑿錄	二七一
燧袋圖	三二三
溫古堯彙	三四九
新刻百錢譜	三八九

目次



目次

寛至天見聞隨筆.....	四〇七
馱舌或問.....	四三九
金魚そだて草.....	四六一





「織錦舎隨筆」に就いて

和歌、國學に關しての隨筆である。本書は井上頼園博士の自寫本で、現に無窮會藏本の美濃判薄葉本によつたのである。

著者村田春海は、字を士觀、通稱を平四郎と云ひ、織錦齋はその號で、加茂眞淵に従ひ皇學を修め、著書が頗る多い。文化八年二月歿、年六十六。

織錦舎隨筆目錄

卷之上

- 一 ちひさき水鳥
- 一 書をくしむならはし
- 一 書の名
- 一 こまつふり
- 一 文字をはぶくならはし
- 一 あされ
- 一 歟がたといひ威といふ詞
- 一 元白が詩筆
- 一 からやまとの歌のけぢめ
- 一 とらに刁の字を用ひたる

- 一 とほさき
- 一 あつきやき
- 一 露草
- 一 四位五位の袍の色
- 一 橘千蔭が歌
- 一 あはれといふ詞の註釋
- 一 妻の事をのみさして妻子といへる
- 一 麻の葉に毒ある
- 一 とみに
- 一 名高き人のうせたる



- 一 蜘蛛のい
- 一 聖武天皇の願文
- 一 土佐日記の異本
- 一 海量が物がたり
- 一 南のほし
- 一 七夕といふ文字をたなばたとよみならへる
- 一 忍もぢずりのもぢのこと
- 一 東の都といふ詞同附録
- 一 戸令應分條考
- 一 三夕の歌
- 一 長恨歌の繪
- 一 ひたけ
- 一 古今集の序に人麻呂おほき三の位といへる

- 一 歌といふ文字を歌とかきならへる
- 一 仁和の帝の陵の塔
- 一 高瀬が庭のおくつき
- 一 むろざきの花
- 一 神代の年數
- 一 しのぶ草
- 一 髮梳の小櫛
- 一 太宰帥
- 一 令法
- 一 禁色
- 一 ふるとし

- 一 道風佐理行成の筆の跡
- 一 近き世に文よくかきたる人
- 一 榮花物語の事
- 一 くもりたる月のおもしろき
- 一 みあれ
- 一 蓬壺
- 一 内官
- 一 かきひたしの汁
- 一 螺鈿
- 一 扇に物かく
- 一 なまくさき香をさる
- 一 伊勢物語新義の大凡

卷之下

一家集の辨

- 一 文つくるに心得あり
- 一 苗字を賜る定め
- 一 かきり
- 一 屏風
- 一 やらぬ
- 一 みこしをか
- 一 道理さとき者多くは道理を盡さす
- 一 にきみ
- 一 桐の木に物かく
- 一 打碑の法

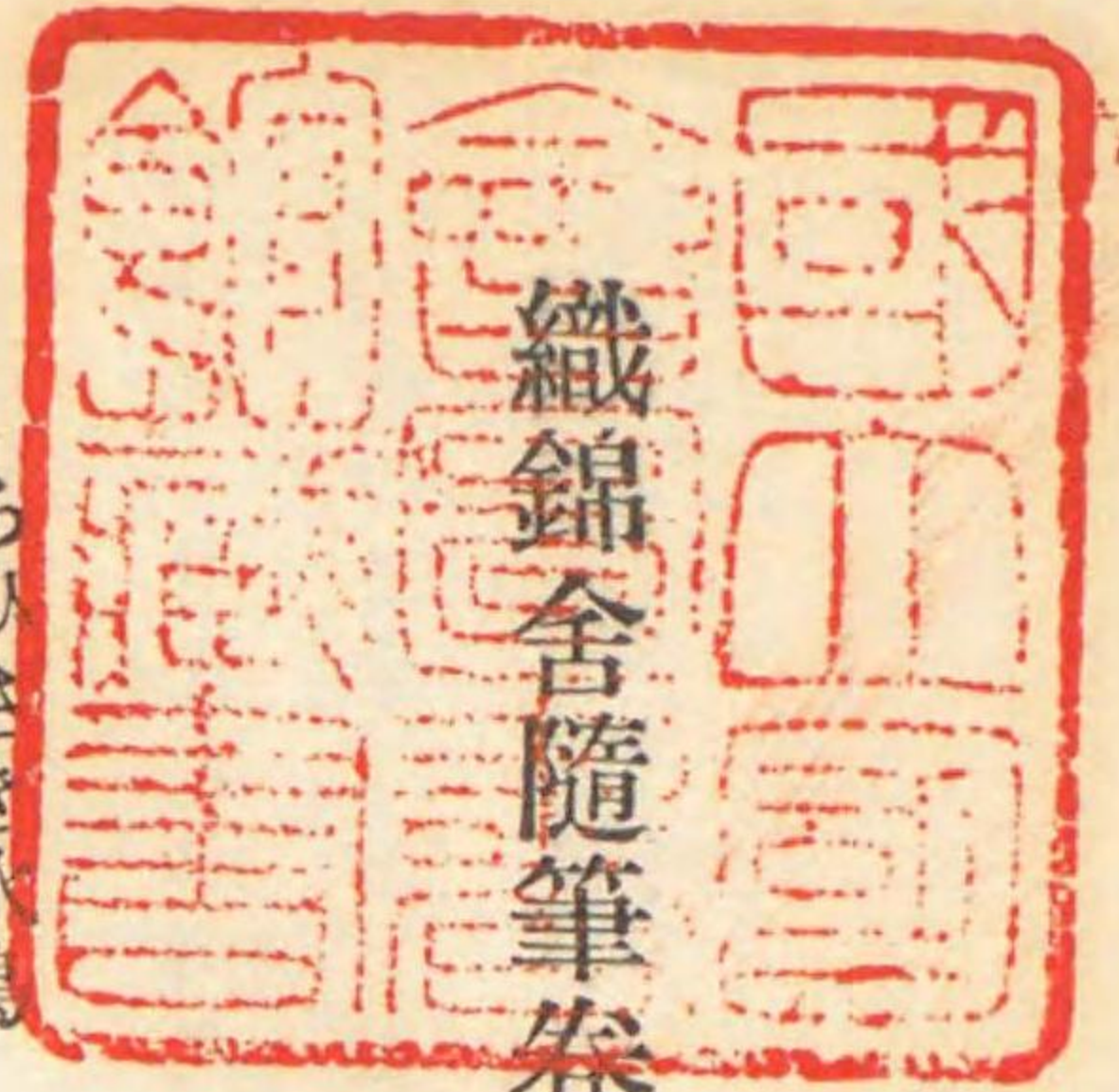


- 一 宇合稱呼考
- 一 寶曆六年葛節別業會の歌
- 一 歌にやまといふことを冠せたる
- 一 美草
- 一 三山歌
- 一 和學大概
- 一 大養徳國
- 一 ツハへの假字
- 一 多々良米
- 一 つちはり
- 一 たまうてのたまうける
- 一 駿河植木
- 一 をかめ湊
- 一 舟路のすさひ
- 一 天字讀法考
- 一 莫囂圓隣
- 一 柴のほへる妹とある歌
- 一 火之夜藝速男神
- 一 大分青馬
- 一 まさかたか
- 一 ふかすみ
- 一 つかうまつる
- 一 ねんごろぬもころ
- 一 明阿法師墓
- 一 うつほ物語のつて

- 一 木耐
- 一 みのゝ家つとの難
- 一 町田清興の物語
- 一 木村長門守書札
- 一 上林下若
- 一 ことはのしな
- 一 金魚袋

織錦舎隨筆目錄終





織錦舎隨筆卷之上

ちひさき水鳥

村田春海

寛政六年の夏下總の國銚子浦に遊びけるにその浦人寺井節之がいひけるは、八とせばかり先つ年の秋この川口へめなれぬ鳥あまたむれ來りぬ其形はまたく鴨のやうにて羽のいろあひも鴨にことなることなく首あをきもまだらなるもありて、足はすこし長きかたにて大きさは雀などよりはちひさし、波の上にあまたうきわたるを人々とらへ來て或は池にはなちあるひは水舟などにいれおきてもてあそびものとせり、さて廿日ばかり有つるにひと日雨つよう降て風はげしく吹ければ、いづれの家なるもいづち行けん皆なくなりぬ年老たる人などにたづねけるに昔よりかゝる鳥の來けんことはいひもつたへずとなんかたりける

とほさき

下總國海上のあたりにて山松をきるとき千本が中に一木ふた木ばかりを残しおくをとほさきとい

ふ、それは山の神に手むくるなりとぞ又里人の門松ぬき捨たる跡に梢をみじかくきりて立ておくをもとよりとほさきといふといへり冠辭考に遠江の國の詞に木の最末をとほさきといひ越前土佐などにてもしかいふよしみえたりさるはいづこにてもいふ詞にて古歌にとふさたて足柄山に舟木きりなどあるは此とほさきの事なる事疑ひなし

書をゝしむならはし

古の書の今につたはらざるは中頃より世のみだれうちつゞきて寫しつたふる人はなくて、さる頃火にやけ失ぬるが多きなるべし、しかはあれど猶かつゝ寫しつたへたるもなきにはあらぬど中ごろよりひとつのわろき習はしありて、ひめかくしてたやすく人にみする事をなさゞりけるより亡ひ失ぬるもあまたありぬべし、今いにしへの書の残れるにむかし人のおく書あるをみるに或はこの本他見あるべからず或は可秘々々などしるさゞるはなし、そもゝ書は廣く世にもつたへ後の人のしるべともなすべき物にこそ有なれいたくひめかくして人にみする事をきらふよしやはあらん、中頃より、なべてかゝるひがごゝろへの人のみありけるは、いまよりおもへばいとむげなげかはしきわざにこそ有けれ、古よりつたはれる書を只我のみ獨の寶とのみおもひたらんはあ



さましく賤しき心とやいはまし

書はとほき古よりもつたはり又今よりはるかなる世の末にも長くつたふべき物なるをわづか百年にたらぬ命のうちに暫これを我ものとおもふともつひに身うせなん後その子むま子などのおなじ心ならねばこそあらめ其道このまざらん人ならむにはいたづらに文殿のうちに朽はて又はあらぬ人の手にも落ぬべしされば書をたくはへおきて子むまこにつたへんとするはやくなきわざなり、たゞ書は私の物ならずと心得おきて公にひろく傳へて世にたえせざらん事をおもふべき事にこそ奈良の興福寺に傳はりたる書どもは内典の類のみならずからやまとの書どもの世にめづらかなるがあまたありといへりさるを其寺の法師ばらのならはしにて深くひめかくして人に見する事をえせずとなん是はいとおしむべきわざなり、むかし鳳潭といへるは世にすぐれたる法師にてことにかの寺のいやしきやとわれ人となりて晝は人めをばかりよなくいをもねずてひそかにそのひめ置ける書どもをよみて、からうじて香法師記芳法師記といふものを寫とりて其後板にゑりて世にはつたへたりとぞ此書の世に出たるはこの法師のいさをしとなんいふなる。仁和寺には古き書どもあまた傳はりたれど宮の御おきてにて人にみする事をゆるしたまはず丹波雅忠が鑿心方とい

へる書は世にたえてなかりしを寛政のはじめのころ東にて廣くもとめさせ給へるにかの寺御くらに其書ありときこしめして宮にこひたまひてこなたにかりとり給ひてくすし多紀のなにがしにおほせてうつさしめたまひぬはじめ東よりこひ給へる時ふかくいなみ給へりしかば諸司代よりあまたゝび使ゆきかひてからうじてゆるさせ給へりとなん此ときの諸司代は太田の侍従となん聞えし

あつきやき

信濃國水内郡飯山にて年毎に正月十五日にさへの神のおんへやきといふ事あり これを又は道陸神のぞ、さへの神は道祖佐陪の加美とあり和名抄にもありて古きおんはやきとも云と 詞なりおんへは御戸の義ならんか是も古語ののこれるなり 年の初の門松しめ繩を廣き所に多く集めてさへの神の家を作りてそをやくとなん其時村人のうちに年高き人をえらびて身をきよめしめて其さへの神の家をやける火をもてかへりてあつきやきといふ事をなさしむ其人を火の土といふ、さてあつきやきは粟ひえ稻むぎをはじめとして一年の内田畑の作りものゝみのりみのらざるをうらなふなり、其うらなふさまは金の皿をその火の中にいりて其中へ豆二ツづゝ入るゝになん吉ならんには小豆をどりめぐりてやけず凶ならんにはたゞちにやけぬとぞ又その火を十二に分ちおきて灰になり行く色をみて一年の月ごとのはれくもりをうらなふ事あり、灰の色黒き月は雨おほく



白きは雨すくなしとなん、黒川盛隆が物語に南部にても大豆をやきて十二月の天氣をしる事あり  
白き黒きは右の如くにて其豆やくるに音あつてにゆるやうなるは風吹ざるなりといふとぞ盛隆は  
いにしへの書にも委しく歌もよくよめる人にて世に南部の君につかうまつれる人なり

書の名

書に名づくるに大和ことのはもてつけんはさらなれど、又賤しげなるもあり、かく文字の意もて  
つくるもおのづからやすらかに聞ゆるはあしからず、岷江入楚勢語臆斷などはあまりにからめき  
たる雜記、古器考などはこともなくてよろし、又さゝめこと、河社、うひまなびなどつけたるは  
をかしきを濱の眞砂秋のねざめ、詞の玉の緒、玉の小葉などいふは雅なるやうにて雅ならず大か  
たの物しり人このけぢめをよく心得ぬはいかにぞや

露草

つき草を露草ともいふは後の世にいふ詞なりと世の人おもへどさはあらず、はやくよりいへる名  
なりけり空穂物語嵯峨院中露草して遠山をすれりとみえ又祭主輔親卿家集に左馬のそうかねすけ  
つかさえて後露草うつしおこすとて、

手につみてみづから染し花なれど年はふれどもいろもかはらず  
かへし、

わが宿の垣根の草に咲ましる花のいろこそうすくみえけれ

又俊頼朝臣の散木集に露草の咲たるに風の吹けるをみて、

いかばかりあたに散るらん秋風のはげしき野邊の露草の花

また夫木抄に西行法師、

移り行事をはしらすことの葉の名さへあたなる露草の花

又和泉式部家集にうへのきぬをはりきりていとほしきこといひて、

露草にそめぬ衣のいかなればうつしごゝろもなくなしつらん

また今昔物語九左京大夫付異名語、いまはむかし村上の天皇の御代に舊家の御子にて左京大夫と  
いふ人有けり云々、色は露草の花をぬりたるやうに青白にて、眼皮は黒くて鼻あざやかに高くて  
色すこし赤かりけり云々、

古はなでしこにのみありて古今集より後にはとこなつともなでしことも常にいへりこの月草も萬



葉集にはつき草とのみあれど露草といふ名もすではやくよりありて、詞はわろからず二つながら歌などによまむに難なるべし歌によりては露草といひて詞のとりあわせよき事もありぬべきを今の歌人の露草といふ名は歌によまぬ言葉也とのみおもへるは古歌にひろくあたらぬよりさはおもふなり

## こまつふり

和名抄に辨色立成云獨樂有孔者也和名古末都玖利とあるを或人のいへるはまるき事をつぶらといへばこの玖の字はかならず夫の字の誤れるならん獨樂は形の丸きものなれば蝸牛を加太豆夫利といふ豆不利とおなじ語なるべしといへりと源の躬弦いへりげに此説はいはれたり大鏡に行成卿の事をいへる所に御門をさなくおはしまして人々にあそびものまゐらせよとおほせられければ云々、此殿はこまつぶりにむかごの緒をつけて奉りたまへりければ、あやしものものさまやこはなにぞとはせ給ひければしかくとなんまうす、まはして御らんじおはしませ、けうあるものなど申されければ南殿に出させ給ひてまはさせたまひていと廣きものうちに残らずかへるべきあるけばいみじうけうぜさせ給ひてこれのみ常に御らんぜあそばせ給へばことものはとめられ

にけりとあるなど、またくこの獨樂の事とみゆ、また散木集隱題の所に、こまつふりといふを題にて、はるの野にこまつふりつむあわ雪をとよめる歌もあり

## 四位五位の袍のいろ

いにしへは四位は深緋衣五位は淺緋衣をきる事としを四位の紫をきる事となりたるは正暦の頃よりと世の人みないへりさるは小右記に正暦三年九月一日明順真人叙四位尤袍以三位袍送四位如何、然而遣之其報云近代三四位袍其色一同又最初着用如此衣云々仍所驚示也爲奇不少と有によりて正暦の頃よりとはいふえされど今おもふにこれよりさきはやく四位は紫をきたりける事とみゆ大和物語に、野大貳純友がさはぎの時うての使にさゝれて少將にて下りける、公にもつかうまつり四位にもなりぬべき年にあたりければ、む月のかゝるたうはりの事いとゆかしうおぼえけれど京より下る人もおさくきこえず或人にとへど四位になりたりともいふ、或人はさもあらずともいふ、さだかなる事いかにできかむとおもふほどに京のたよりあるに近江守公忠の君の文をなんもて來りたる、いとゆかしううれしうであけてみればよろずの事もかきもていきて月日などかきておくに



玉筥ふたとせあはぬ君が身をあけながらやはあらんとおもひし  
是をよみてかぎりなくなしくてなんなげきける四位にならぬよし詞にはなくてたゞかくなんあ  
りけるとみえ、又後撰集に好古の返しの歌とて、

あけながら年ふる事は玉くしげ身のいたづらになればなりけり

と云ふ歌もみゆ、これによれば天曆の時四位はすでに紫をきける事なり好古の此ころの使にさゝ  
れたるは天曆三年なれば正曆三年よりは五十一年前なりけり古の紫は紫子にて染たるを中頃より  
後のは五倍子と鐵漿にて染けるなり紫の袍をふしかねにて染めたるよしは薩戒記などに見ゆ、い  
にしへの緋は茜草にて染たるを中頃より後に赤き袍といへるは蘇芳にて染たるなるべし飭抄に延  
尉外記史等の袍を赤色といへるは蘇芳染と見ゆ又四位以上の袍を椽袍といへることもあり椽は奴  
婢のきるいろなるよし令に見えたれどかのふしかねにて染たるが其色椽に似たればやがて椽の袍  
とはいふなるべし

中比よりの世に四位五位おなじ色をきたりける時もありと見ゆ飭抄に四位以上椽五位有蘇芳氣六  
位縁延尉佐大夫外記史大夫尉等赤色近代四位五位無差別不知故實云々、續世繼にある人の申され

けるはつるばみの衣は王の四位のいろにてたゞ人の四位と王五位とはくるあけをき、たゞ人の五  
位のあけの夜にてうるはしくは有べきを今の人こゝろおよすげて四位は王の衣になり五位は四位  
の衣をきるなるべし、けびぬし上官などはうるはしうて猶あけを改めざるべしとぞ見えたりける  
とあり、今昔物語などに赤き袍きたる人を見て檢非違使なりとておそれあへるよしをしるせる事  
あるも常の五位は赤袍をきざりければなるべし續世繼に王の四位と五位との袍のいろことなるよ  
しをしるせるはいづれの時の定めにか慥にしりがたし諸王の服色の事は令に二位以下五位以上淺  
紫衣と見え日本紀略に弘仁九年の制に諸王二位以下五位以上及諸臣二位三位者依令條淺紫今改着  
中紫などは見ゆれど王の五位四位の服にわかちあるはいまだ考得ず

文字をはぶくならはし

物しるすにいたく文字をはぶきてしるすことありこはそのはじめはいと事しげき人のあはつけき  
ふしにたゞかりそめのこゝろへになしつるわざなりけんを心のどけて物こまやかにしるさるべ  
き人もなべてさるならはしをまねぶ事となりたるは心ゆかぬわざなり記録などの類ひにその年  
の十二年九月廿四日などあるべきを十二九廿四などかけるあり年月日の文字をくはへかゝむには



いかばかりのいとまをかついやす事とてかくまでははぶくらん、うちみるにも月日何れとたどられてとみにはわかちがたくてよみがたしあまりにものうきわざなりとやいはまし又源氏物語などの註に花散里を花散、末摘花を末摘、頭中將を頭とばかり馬頭を馬とのみかきけるなどいと有まじきいひなしなり又歌集の裏書などの萬葉を萬、後撰を後、拾遺を拾、金葉を金、新古今を新、風雅を風、六帖を六などあるもいとまぎらはし、萬は萬代集後は後葉集拾は拾玉集など金は金玉集新は新葉集風は風葉集など六は六家集などいふものあるをや、すべてあまりにものをはぶきていはんは賤しげに聞ゆるものなりいにしへのみやびこのまん人はかゝることに心をつけて詞正しくて有ぬべし

橋千蔭が歌

妙法院宮は當今の御いろせの御子におはしますなるが、から大和のみやびことをこのませたまひて品いやしききはにてもその名きこえたる人々をはゆかしがらせ給ひて歌人の中には伴蒿蹤小澤蘆庵など常にめしあつめさせ給へりまた橋千蔭が名だかゝる事をはるかにきこしめして寛政の十とせの春一條右大臣東に下り給ふときその御供にてまゐれる大舍人頭岡本保考におほせごとたま

はりて千蔭がよめる歌の中に山居閑居などの題なるを奉らせ給ふ其歌は墨ながしの色紙十枚を賜はりつるに書て又おほせごとたまはりつるかしくまりを長歌につらねて奉りけりその歌は

山居子日

吾山のふる巢をいづるうぐひすもけふをはつねとおどろかしけり

山家皆梅花

都にて霞と見しは山ざとをつゝめるうめのにほひなりけり

山家卯花

うの花は咲にけらしなまれにとふみやこの人の袖とみるまで

閑庭橋

立花のはなちるころは我やどのこけ路に人の跡もみえけり

月の夜山里をとふ

やまざとの月にとひきておほかたの秋のあはれのかぎりをぞみし

山里に日ぐらしの聲をきゝて



杓人の斧のひゞきは絶てしもなほ日ぐらしの聲ぞのこれる

山里に住て雪の降りたるをみる

花見むと入にしものを降りつもる雪も世にぬみよしのにおく

山里に椎ひろふ

けさみれば吾るる山の木枯に落椎ひろふ里のあげまき

草庵深鎖白雲間

よのつねのひえを外山にすむ庵はたゞしら雪にとぎれにけり

山家

山里のおのづからなる花になれもみぢにあきて我世へなまし

かしこきおほせごとによりて歌奉れりける時よみはべりける長歌みじかうた

ゆく水のすみだ河原の下つ瀬にすむなる鳥のみそらゆくつばさなければおのが名の都こひつゝ新玉の年をあまたにすぐし來ぬいでやむかへし鳥がなくあづまのはてのひなにして其國ぶりをうたへりしためしければとむさし野のあら野の末にかりつめしことの葉草のいかなればあまつ雲の

あなたまできこえあげけんしづたまきいやしき身をも捨まさぬおほせかしくみ逃水のにげかくるべきよしなくてほりかねのゐの深くしもおもひめぐらしふつこゑによるとはすれどおのが身の老のさかさへくはればわなゝかれぬる水ぐきのおぼつかなきもこつみよるみぎはになれて玉かつく淵だにしらぬすさびをばいかゞはせまししかはあれどかゝる御世にしながらへて此ひとふしにあひにける我身のさちぞなにゝたぐへむ

かゝる世もあればある世にすみだ河なからふる身をなにかこちけん

この歌どもを宮よろこばせ給ひて人々にも見せさせ給ひければ蘆庵などふかくめでたりとなむ

あされ

物語文にあされといふ詞あるは古き源氏の註などにされは左禮なりとあるはいとことはりなし、又師説にあはあまえ、されは酒麗の字音なるべしとあるもおだしからず、あまえをあとのみはぶきいふべうもなし、今考ふるに新撰字鏡に醜は魚肉爛也豆久佐之又阿佐禮太利と見え又古き博士家の訓讀に肉のあされたるなど有るぞこの詞のなるべき土佐日記にしほ海のほとりにてあされあへりとかけるも、あされは魚肉などのそなはれたるをいふ詞なれば魚肉の鹽をくはふればあさ



れぬ物なるを、人は鹽ある海のほとりにても、あされあへりとたはむれかけるなり、舟路なれど  
うまのはなむけといひ、ひともしもしらぬものしか足は十もじにふみてぞあそぶなど、かけるた  
ぐひのいひなしなり、もしあされにさるころをふくまずばたゞ海のほとりとのみこそいふべ  
れ、しほ海とはことはるまじ、さて魚の肉のそこなはるゝをあされといふは詞の本にて人のゑひ  
しれてうちみだれたるをもやがてあされたりといふならん、又されとのみいふも、あされのあを  
はぶけるにて、されくつがへるされたる口つきされたる竹垣などいふみなおなじ詞なるべし

## あはれといふ詞の註釋

本居宣長が説にあはれといふ詞は、あゝと、はれとの二つをあはせいへる詞なりとあるは本と末  
とをとりたがへたるわざなり、あゝといふ詞は古書には見えぬ詞にて中頃の博士の訓讀に嗚呼の  
字などを讀るにのみ見えたる詞なるをおもふに、あゝはあはれを略して訓讀に便なるやうに唱へ  
たる詞なるべし、すべて儒者の訓讀にのみ有て歌文などになき詞にはさるたぐひ多し、又はれと  
いふ詞は、今の世の俗言なるが上に、かたへの方言にてさる詞をいはぬ國も多し、いかで古歌の  
證とはなすべきはもじは古語のつたはりたるにて、あはれといふと同じ意の詞ならんものならば

古もやがてあはれのを略したるにてもあらんか、とにもかくにも二つながら古書に見えぬ詞を  
集めて、そをあはれといふ詞の本なりといふは、すゑをとりて本をおすなれば、いみじくうきた  
るわざなりかし、あはれといふはいと古き世の詞なれば其詞の本はとほでもありなんものを

## 鍬形といひ威といふ詞

鍬形はくわむがたをはぶける詞なりと伊勢貞丈の説に見えたりけるも、烏芋の葉のさましたれば  
さもあらんか、さらば鍬形とかくは假名だがへり、又威といふ事も絲もても章もてもすればその  
本は緒通といふことをはぶきていへるならんか、さらばこれも威と書きては假名だがへり

## 妻の事をのみさしてさいしといへる

はゞきゞの巻になつかしきさいしをうちたのまんよと有を、宣長が玉小櫛にさいしは妻子にてこ  
ゝはたゞ妻の事をいへり、古今集の歌に世の中をいとふ山路の草木とや云々とよめるも卯花は木  
なるを草木といへるとおなじ類のことなりといへり、こはひがごととなり、字音の語に歌の詞を例  
にひけるはいとよしなし、このさいしといふことは唐の世の俗語なるを、こゝにもいひならへる  
なり、杜子美か新婚別の詩に結髪爲妻子席不暖君牀暮婚晨各別無乃太匆忙とあり注に結髪而爲君



婦とも通篇皆新婚元意ともいへり又後の世にいたりて水滸傳などにも妻の事をのみ妻子といへること多くあり

## 元白が詩筆

文德實錄に適得元白詩筆奏上とあるを宣長が玉かつまに詩筆は古本にもかくあれど元白といひ帝甚耽悦云々とあるなどをおもふに詩集を寫し誤れるならんかといへりこは詩筆は詩文といふに同じことなる事をしらで誤字なりとおもへるなり樂天が文集自記に詩筆大小凡三千八百四十首と見え老學庵筆記に南朝詞人謂文爲筆唐人仍之亦稱杜詩韓詩とも見えたりすべて六國史の文には唐の世の文辭を學びてうつしてかける文字多くあり唐の世の文辭のうへなどよく見しらぬ人のその世に目なれぬ文字のつかひざまなどあるを見てみだりに誤字なりとおもひてあらためんはいとおこなるわざにこそ又日本紀に卷申戢戈愷悌還といひ古事記序に愷悌歸於華夏などあるを見て愷悌は和樂の義なるをかくつかひたるは古の人の字義を誤たるならんといふ人あれどそはかへりて誤なり爾雅に愷悌發也とありて注に發は發行也とも見え毛詩に齊子愷悌とあるを孔穎達が正義によりてさて愷悌の意をまかねて愷悌還とはかゝれたるなるべし、これも唐の世の文辭によくかうやう

につかひたる事のあるをうつしまなばれたるものと見ゆ、かゝるたぐひの事なほあまたあり、國史をよむ人こゝろすべし、六國史の文辭はつたなくは見ゆれど、字義などを誤用ひたる事はをさく見えず、今の世の博士の文字はいと巧には見ゆれど、委しくみれば文字のつかひやうなど唐の手ぶりにたがひたる事もおほきぞかし

## 麻の葉に毒ある

上野の岡の北に谷中といふ里ありその里に西光寺といふ寺ありけりある時その寺の内ものゝおとひしめきていとさはがしかりければ、近きあたりの人ゆきてうかゞひしけるに、住持のひじりをはじめ若ほうしども下部などにいたるまで、みなうつしこゝろもなく立はしりて、佛の御帳など引きり經文引やりなどしてさらぬ調度ども、皆うちこぼちつゝたゞくるひにくるへば、こはいかなる故ぞといへどことふる人もなしかくして里人ども四人五人つらねゆきてまもりおれどさらにせむよしもなれば日暮ぬれば皆かへりぬ、さてその夜もよとゝもに物こぼつおときこえけるが、あくる日のひる過る程になりてやみにけり、かくて里人ども又ゆきて見けるに、寺のうちにあるもの皆こぼちて其人々はこゝかしこにたふれふしておきもあへず血などはきたるもあり、ひぢり



のかかたはらによりて御心やつきたるといひしに、からうじてかしらもたげたれば、きのふよりのことどもかたりいでとがめけるに、いでわれもさこそおもひあたりはべるなれよしなき事によりてみな人うつし心を失ひ侍るになん、きのふ物くはんとし侍りしにいひかしく男の子のいひ侍るは、しりへの御園に麻おほくおひ立て侍り、かの若葉こそいとあぢはひよきものには侍れ、江戸の人はくひはべらぬにや、田舎人はめで侍る物になんといひはべりしかば、調ぜさせてこゝろみ侍るに、いとまよく覺へければ、誰もあくまでまうほりつるに、やがて氣あがりて物はらたゞしくおぼへ侍り、夫より後はものもおぼえ侍らずなんありし、さるは麻の葉にゑひてくるひ侍るにこそあらめといへり、かゝれば麻の葉はおほくくらへば人の心のみだす物にこそ有けれ、此ものは醫書にもしかいへることありこは寛政十二年の夏このごろしかゞの事ありしとてその里人の來りてかたりけるなり

## から大和の歌のけぢめ

からも大和も歌はまたく同じものにて大かたは其おもむきことなることなし委しくはばから歌はとひろくとゝのほりてすがたもさまゞなり大和歌は事せばくしてかれにくらぶればたはぬ

ふしおほしこは國がらのしかるにやおのづからなる事なればあながちにうらやむべきことにもあらずまたしひてまねぶべきやうもなし古事記日本紀に載たる歌どもはかしこの古歌謡のたぐひなりかしこにては三百篇楚詞などいふをことの本なりとすめれどこの國には此ふたつにたぐへむものは見えす萬葉にのせたる國ぶりの歌をかしこの三百篇のたぐひなりといふ人あれどそはおしあてにそこにたくらべておもふにて似たるものにはあらぬをしらぬなり漢魏の古詩などいふらんだぐひも此國にはなしたゞ萬葉にのりたる長歌こそ唐の歌行によく似たる物なれ藤原奈良のころの人はやがてかしの歌行を見てまねびうつしたりと覺ゆるふしもおほく見ゆ短歌は五七言の絶句にて七言には少したはぬばかりのものなり五七言の律詩はたぐふべきものさらになし神樂催馬樂はさながら樂府の詩のさましたる所あり又世々のすがたをもてかれとこれとをくらべいはば萬葉の歌は初唐と盛唐をかさねたるおもむきあり古今集の歌は盛唐より中唐にてたるべし後撰拾遺もこれに同じ後拾遺詞花金葉などは中唐にて晩唐もまじれり新古今はまたく晩唐のおもむきなるものは歌にはなし、そはいかにといふに宋詩は氣を主としたるものなるに歌は情をのみいひて氣を主とするおもむきの事はたえてなければ頓阿法師などの新古今のすがたなどにはよらで、ひと



ふし清らにやすらかなるさまをねがへるは、元詩のたぐひなりともいひて又ちかき頃の人の、いにしへぶりなりとてよむ歌を見るに、其よきは明詩に似たりとやいはん、わろきはさらにあげつるふにもたえず、からはから、大和はやまとにてかれにならふべきものにはあらねど歌よまむ人は、から歌のおもむきをもよくあぢはひしらん事こそあらまほしけれかれを見て心のさとりをまさんとのなきにしもあらずかし、詩を論じたる書はさまざまあれど滄浪詩話などは論正しくて大和うたの上にもおもひあはせらるゝ事あり、この詩話をちかき世の錢滄益などいへるはいたくにくみそしりたれど王士正といふなるはいとよしとてとれり、今よりおもふにこの詩話の論はうごくまじき論なり、大和歌にこゝろよせん人もよくあぢはひて和歌のうへにおもひくらべ見ばたすけあるわざならまし

とみに

とみといふ詞は師説に土佐日記に、とにゝともいへるをおもふに頓字の音なるべしといはれたり此説によるべし宣長が玉あられに、とみにといふ詞はつかひやうの有詞にて、とみにも來ぬ、とみにもいでこすなどはいへども、とみに來つ、とみにいで來つなどはつかひたることなし此わき

まへ爲べきなりといへるはことを委しくせんとかへりておもひまどへるなり、もと頓字の音なればとみにもきつともいはむに難なるべし枕草子にとみにもものもとむるに見出たるうれしきものといふ條又たゞいまめせばとみにてうへゝまゐるぞうちとくまじきものといふ條などあるは宣長はいかでわすれけん

とらに刁の字を用ひたる

古寫の本に寅の字を刁とかける事ありこは寅の字の頭をのみ略してかき來れるなるべし、かく文字をはぶきてかく事はいにしへ多くありし事なりこの寅寅同音の字なれば唐の世などには通じ用ひたるを、こゝにも習へるものならん、寅寅二字疑古通とは字典にも見えたり

名高き人のうせたる

享和のはじめの年世に名高き人みたりうせぬ都にて相國寺の大典禪師二月八日 年八十三 小澤蘆庵 七月十日七十 伊勢國にて本居宣長九月二十九日 年七十三 皆ことはりのよはひなりといへどかゝる人々のあらずなりゆくはをしむにもあまりあるわざになん

蜘蛛のい

くものいは伊の假字なるを爲の假字なりとして圍の字音なるべしといふ人のあるはたがへり和泉



式部家集に

軒端たに見えずなり行我宿はくものいたまぞあれはてにける

また一本には

軒端たに見えずするける我やどはくものいたこそあれはてにける  
ともあり又同集に

玉のを、見にはかなきさゝかにのいかでしはしもかきかよははや

金葉集に大江公資の歌に

篠すゝきうははにすかくさゝかにのいかさまにせば人なひきなん

かくいたまいかでいかさまなどいひかけたるにて伊の假字なる事しるしさて和泉式部が歌にくものいかきともよめりいとまたくすといふにおなじこれをいともしともいふ事はいかなる事にかいまだ考得ず

歌といふ文字を哥と書きならへる

今の世に歌といふ文字を哥ともかく事はやゝはやき世に人の筆の跡などにも見えたり、こは昔よ

り文字をはぶきてかく事のおほくあれば、これもさる習はしにやとおもひしに、さにあらで哥歌通はして用ふる字と見えたり近頃もろこし舟のもて來つたへたる香祖筆記といふ書にも願鄰初日沈約宋書凡歌字皆作哥字予嘗官廣陵千一士大夫家見趙松雪家書凡哥字皆作歌字蓋古通用也とありかゝればむかしはたがひに通はし用たる文字なりけんかし、さるはみかどの人も唐宋の世になどよりうつしまねびたりとみゆ

聖武天皇の願文

豊後國岡の君の家士羽倉惟得レきたりていへらくこの頃わが國人のこゝに來れるが物語に寛政の八年の五月豊後の國佐伯の里に水高く出てよろづの物家なども流れたるに船藏のあるがもとにちさき箱のいとふるきひとつながれよりたる内にひとひらの紙にかきたるものあり、ひらき見れば聖武天皇の願文になん有ける、その手のさまもうるはしう紙のふるきありさま其時のものなるに疑ひなし、千年にあまりたるものゝいづこにかくれて今かゝるなりにあらはれ出にけんとかやしきわざなり其願文は今その里の大日寺といふ寺にをさめてありとぞ、さて其うつしなりとて見せしを見るに、菩薩戒弟子皇帝沙彌勝滿稽首十方三世諸佛法僧去天平十三年歲次辛巳春二月十四日朕



發願稱廣爲蒼生遍求景福天下諸國各敬造金光明四天王護國之僧寺并寫金光明最勝王經十部住僧廿人施封五十戸水田十町又於其寺造七重塔一區別寫金字金光明最勝王經一部安置塔中又造法華滅罪之尼寺并寫妙法華蓮經十部住尼十人水田十町所冀聖法之盛與天地而永流擁護之恩被幽明而恒滿天地神祇共相和順恒將福慶永護國家開闢已降先帝尊靈長幸珠林同遊寶刹又願太上天皇大皇后藤原氏皇太子已下親王及大臣等同資此福俱到彼岸藤原氏先後太政大臣及皇先妣從一位橘氏太夫人之靈識恒奉先帝而陪遊淨土長願後代而常衛聖朝乃自古已來至於今日身爲大臣竭忠奉國者及見在子孫俱因此福各繼前範堅守君臣之禮長紹父祖之名廣紛群生通該庶品同辭愛綱共出塵籠者今以天平勝寶五年正月十五日莊嚴已畢仍置塔中伏願乾坤致福愚君拙臣改替此願神明効罰とありこはまさしくその國の國分寺のものになむ

## 仁和の帝の陵の塔

都仁和寺の西の方なる田の中に仁和の帝のみさゝぎのものなりとて石の塔ありしを千宗易ひきうつしておのが茶室の庭にするてその下の處に穴をうがちて火ともすべくなして灯籠にかへて用ひたりとぞ其後富人ありてかひとりたりといふをいかなる人のまたとりつたへたるにか今は江戸

の麻布の里に天源寺の内にありその塔九層にてかたち世にめなれぬさまにてふるびたる事げにも千とせへたるものとぞ此塔此寺にある事はすべて大業功記などいふふみにもしるせり、そのかみ宗易つみなはれしは其とがのがれがたき事こそありつらめどおもふに此塔引うつしたる一事にても其人やすらかに身をへざらん事はしるかりき、はかなきすさみにふけりて物をもてあそぶあまりにかゝるおふけなきわざをばなしはてたるはうたである事ならずや、さはいへ今は其家世々にさかえまたかれが書けるものなどあれば高きいやしき人もめでくつがへりてにしきあやによそひてかけ物につくりなどして寶とすめるは身の後のさいはひのありとこそいはめ、身につみありてけがしき名さへ傳へたる人もいみじき才藝ありし人はその才藝のかたにひかれてすゑの世に其名のうせぬためしも有習ひなれど、かの宗易がしけるわざは才藝などいふばかりの事にもあらぬたはむれわざなるをやしづかなる庵などかきはらひて庭に草木石などよしありてしなして松のなみ音たてゝおもふ友などまで來たらんは茶點してすゝめなど我ものみなどせんはいと心ゆくわざにて文人歌よみなどのもてあそばんいとつきくしうこそおぼゆれ、さるを一文宇もしらでなにのみやびたるこゝろもなきをのこの、たゞこれを大事とかまへて立居ふるまひ露ばかりもあとにご



るべしと心にかけて儀式官のおほやけにつかふるおもちに似たるはいとかたはらいたきわざなり、又調度などもむかしの人はこそぎてうるはしからぬかたをこのめるはゆゑなきにあらぬど、今はこがねをつみて其あたひをあらそふばかりなるを人ごとにいどみあへるはうたてにぞおぼゆる、いにしへの名高き人の筆の跡上手のかけるゑなどは其あたひのいみじうたかゝらんもとがなかるべしきたなげなるすゑうつは物などのふるびそなはれたるを世になき寶なりとおもへるは何事ぞや、されど家居の作りざま調度のかたちなどには此わざこのめる人のしでたるにおかしきふしなきにしもあらず、そはいにしへのみやびさまにはあらねど世にうづもれて事たらはぬわび人などのもてあそばんにはかへりてつきくしきもありぬべし又あまりにこゝろをいれてつくりなしたるには品おくりていとほしきもおほかりきちかき頃茶湯このめる人の虎關禪師の手もたりとてほこりあへるあり同じすき人ともいひつたへてさばかりめづらかなるは世に得がたしとてめでいふ人ありければたよりをもとめてゆきてみしに、げにも文字のさまこゝろたかう筆すみてみゆるはかの禪師の手なる事疑ひなしさておのがことさらに見むととへるをあるじよるこびてこは我家の第一たからにぞ侍りけれ、されどわれは文才にうとく侍りてよくも得よみはべら

す君のまで來給へるこそさいはひなれ是よくよみて給はれといへば、よみて見るに、何のものとほきこともあらぬ詩の詞とみゆれど、とみに句のわかちがたかりければ、くりかへしみるに、もとは七言四韻の詩なるを下のかた紙のやれて行ごとに二字一字うせたるなりけりさて此くだりにかゝる文字ありつらん次にはこの文字などいひておしはかりに其こゝろをときてきかせければ、あるじ、此文字よみ得たるをばよるこびつれどおのれにみせしより其物のそこなはれ物なる事をしりてその後さのみ人にほこる事得せずなりにきとなん、此事をかたりつたへて人のわらひぐさにぞなしける

土佐日記の異本

野道生といふ人の土佐日記附註にといふものあり、道生は 今見えず凡例に疑しき事は羅山先生にとひてしるすといへり又その跋の末に萬治四年二月と 其本に廿四日新司馬のはなむけしとあり此新司を諸本皆講師とありされどこの本の新司のかたまさりぬべし、新司とは新任の國の官をさしていふなればこゝによくかなひたり、附註の凡例に爲相卿のかゝれたる本をもて標とすといへれば爲相卿の本にかくありしにや

高瀬が庭のおくつき



肥後國細川の君の家士關根剛彦のかたらくくま本の山崎といふ所に高瀬文平といふ人の家あり享和のはじめの年その庭に井ほらんとしけるに大きな石擲出たり蓋をひらきてみれば朱もてうづみたり其朱をかきはらひたるに人のねたるその音ホマましく残りてうなじに玉まどひてあり、その玉はまがりたるとくだなるとの二種をひとつづゝはさみてならべつなぎたるさまにて糸は失せてなし、又そのふしたる人の足のもとに人のかうべ多くありきとなん剛彦正しく見たりといへり、又この三つのかうべは殉死などしける人の頭をあはせはうぶりけるにやといへり、又その玉の色は青き白きうすにびなる事ホマ有しとぞ世にまが玉といひてくにくにてさまぐの玉を古塚のうちよりほり出る事常にありみなおなじたぐひなりかのうながせる玉のみすまるといへるは此ものこそ

## 海量がものがたり

近江國の僧海量といへるが來りてかたりけるは古今集にあふみより朝たち來ればうねの野にたづぞなくなるあけぬこの夜は、とあるはおほみをあふみと書誤りたるなるべし近江國伊香郡に大箕村といふありそこに大箕山寒山寺とて眞言宗の寺ありこの寺の近きあたりに木本宿といふ所あり

てこゝより南のかたにうね村といふ村ありされば大箕村より朝立來ればとよめるにてうね村はやがてうね野なるべしといへりこれ實ならんか猶その國人にひろくとふべし又この寒山寺のやまのいたゞきに池ありて其池より水ながれいでて麓の大箕村のあたりにては大きな川となれりとぞ外に源あるにはあらで其池よりわきいづる水なりといへり又海量よし野の飯飼村の本善寺といふ寺に久しく在りし事ありて其寺らかきほとりをば、こゝかしことみたるに此村に水分神社あり鳥居の額に水分神としるせりこの飯飼村はよし野川の南の岸よりてあり宣長が菅笠日記にこもり明神を水分神社とあるならんといへるはたがへりといへり、また本善寺にありしは春のころにてよしのの花をば日々に見侍りつれば

みよしののよしのゝ櫻たれかみる

咲そむるよりちりはつるまで

といふ歌をよみ侍りしとかたりき又あふみよりあたりにては雪のあはにふるといふ事ありとさきに村田泰足がいひ侍りしが、まことにさることありやと問しかば海量いへらく近江にてはさはいはねどちかき國にていふ事に侍りわれは美濃國廣瀬の山中にてさいふ事を聞きはべりぬ雪のふり



にてこほりたる上に又あらたに降たる雪のいまだもとの雪ととぢあはぬ程に北風にさそはれてしづれ落つることあり、そはあたゝかなるけにさそはるゝにはあらずこをあはとぞいふなる又そよともいふとぞ

さきに泰足がかたりけるは越前と近江の境に椿居村中の河内村などいふ所あり山多き所なり、ひととせ其あたりに宿りしに出あひの家の上に大木どもあまたおひしげりたるをこはなどきらざると問つれば所の人の曰く冬にいたりて雪あはにふる時この木どもなければ家をうづめそのふ事あればきらであるなりといへり、あはにふるとはいかなる事ぞといへば雪のおほくふる事を、こゝにてはしかいふといへり、萬葉にふる雪はあはになふりそと有はまたくこれと同じ詞とみゆ、こは古言のおのづからに傳はりしなるべし、安幡を淡字の意とするも左幡の誤とするもみなひがことなるべしといへり泰足も近江の國の人なり

むろざきの花

今の世にむろざきの花とて時ならぬ花をさかす事あり梅を神無月にさかせ八重櫻を正月に咲するたぐひよろづの花どもをすべて時に先だちてさかすめり、さるはおのづからむろの中に入れて

さまざまにあたゝむるわざありてなす事となんいふなる、またなすび瓜などのたぐひも時ならではやく出来る事のあるはおなじたぐひのわざにて作り出たる事となんいふ、こはいつの頃よりはじまりたる事にか古き書などには見えぬ事なりされどはやくよりありし事なるもしりがたし、もろこしにはふるく其ためしありとなん、清の王士正が帶經堂詩話今京師臘月賣牡丹梅花緋挑探春諸花皆貯暖室以火烘之所謂堂花又名唐花是也案漢召信臣傳信臣爲少府大官園裡冬生葱韭菜茄覆以屋廡晝夜燻蘊火待溫氣乃生唐人詩內園分得溫湯水二月中旬已進瓜蓋漢唐以來皆然といへり又おなじ人の香祖筆記に宋時武林馬陸藏花之法紙糊密屋鑿地作坎覆竹置花其上糞土以牛糞黃然後置沸湯于坎中候湯氣薰蒸則扇之經宿則花放今京師園丁亦然予嘗以各月寄諸盆花約明年花樹不敗則酬其直唯桂花不能如舊西湖志餘謂桂必清涼而後放法當置石洞岩竇間暑氣不到處鼓以涼颺乃開今與桃樹牡丹之屬同置暖室地窖宜其不殖也此亦格物者所當知ともいへり

南のほし

今の世の繪師の福祿壽とてかしら長くたけみじかき翁のかたちをかくは南極老人星也是を壽星ともいふ明の丘澹が壽星の圖に題したる詩に南極之上有老人星光芒燦煜昭示壽徵誰哉好奇古貌此壽



者相身披織女絹手握太乙杖軀幹何其短頭顱如許長靈臺無乃小局促天庭胡用高軒昂神人自與凡人別  
顏如丹霞髮如雪誰知天上人也有老時節嗚呼氣結爲星亦解耄人生那得長年小我觀壽星圖爲作壽星圖  
爲作壽星詞奉以祝眉壽千百歲爲期五緯星祥天宇清五嶽效靈地道寧中黃一氣分五德幼形五老表壽徵  
仙風道骨煙霞袂大人廻與塵凡異五總靈龜千歲塵七籤雲笈九天烹豈非受命大羅天駕風馭氣來人寰永  
錫吾皇千萬年またかしらながからで巾をきたるが鹿鶴などのかたはらになれたるかたをばこれを  
壽老人といひてこと今この畫師はおもへどもおなじ壽星也もろこしにもかくやうにかけるも  
ありと見ゆ元の張天英が題南極老人像といへる詩に老人爾何來年貌一何古身披五雲衣相半歩瑤園  
自言南極星乘風來帝所冉々青鬚眉玉顏如處女仙鹿御之行仙禽導之舞忻然願相從授以長生語但恐塵  
世中歲月不我與何當駕鸞輪與子共高舉この二つの詩は題畫詩類といふ書にのせたりちかきころあ  
る田舎人のもとより福祿壽の手に卷ものもたる畫をおこらせてこれに歌よめとこひければかの二  
の詩によりてふるきすがたの長歌ひとつをつくりてかきつけてやりけるその歌は、天なるや南の  
ほしの、くしみたまいつの世よりか、この世にしもありいまして、いひしらぬ神の姿を、うつそ  
みの人に見ゆらん、かしこしとまさめに見れば、たなばたのいほはたたて、おるきぬきぬの身にま

づはして、玉の緒のながかしらに、ましらがの雪かきたりて、千代ふべき神のをしへの、世の  
人につたへむために、あまつふみ御手にとらせり、そのふみを見むよしもかも、神ごとをきくよ  
しもかも、こひのみてたちをろがみあふげもろ人

## 神代の年數

神代紀に天皇謂諸兄及子等曰昔我天神高彥皇彥靈尊大日靈尊舉此豐葦原瑞穗國而授我天祖彥火瓊  
杵尊於是火瓊々杵尊關天關披雲路駐仙蹕以戻止云々自天祖降跡以逮于今一百七十九萬二千四百  
七十餘歲云々とあり此年數いと妄誕なるやうにて疑はしきぞよくおもへばこは史をしらざる時に  
こゝろありてかくはしるされたる物とみゆ神代の事蹟はたゞ人口にのみいひ傳へ來れることにて  
實は其まこといつはりをつまびらかにいふべき事ならず、しかれども皇統の本づく所をしるさる  
ゝにおぼめかしいふべき事ならねばかゝる年數をかりにまうけいひてその事蹟をたしかにいひな  
されたるものなり、さてその年數をまうけいひてみだりにいひて幾ばくともいふべきならねば周  
易の无妄の卦爻によりて妄なる事なしといふ意をふくめてさてえもいはず遠き事にいひなされた  
るものなり、この年數を无妄の卦也といふは一百と七十と九萬との三つは陽數にて乾の卦也二千



と四百は陰數にて七十は陽數なれば震の卦也さるは震下乾上は無妄の卦なるをあらすやかゝる心もなくばたゞおほよそに百七十九萬餘年とか二百萬年にちかしかいひてありぬべきをかくこまかに年數を擧げられたるはさるこゝろをふくまれたる事疑ひなし又かゝる年數を實に昔しよりいひ傳ふべきよしもなければ神武の御詞に托してことさらにまうけられたる事もあきらけし  
新井君美朝臣の説に神武天皇を以て本朝人王の始として國史に見えたる所を據とするにわづかに周の末世にあたればあなたにてはそれより先きに殷夏なほ夫より先に三皇五帝などいくらもありて泰山に封禪の君七十二代の中管仲の聞およばれたるは十代孔子はそれよりすこしおほくきゝしり給へりと史記封禪書に見えたり異邦にても太古の事は聖賢もしろしめされぬいくらもありとみゆ、これをもてみれば神武より以前の日本の代いかほどか聞も及ばぬありつらんその證には國史に見えたるに能登近江遠江その外の國々より地中より鐸をほり出したる事あり 其鐸は高さ三尺徑一尺ありきなどいへることい くともみゆ これはとにかくに人のたくみて作れる物なるに神代より以來さやうのものを此國に用ひたる事は聞えず、されど又神代にそれらうつはものをよく考へみれば二三百年も遠き代のやうに書きなされたるにて實は周の末世秦の始などにあたるべし畢竟皇統を立てられむとて夫より先

の事は神代々々といひ消してまぎらはしたるにやあらんといはれたり、これは暗推なることのものやうなれどみる所ありていはれたる事になむ

今和學のともがらに神代の事蹟は神代よりの正しき傳へなれば露も疑ふことなく信ぜよとをしへる人あり基督教を信する人はかたくその説をまもりてうたがふ事なし此ころさる學する人のおのがむぐらふをとひ來りけるに神武紀に見えたる神代の年數はしかくのごとわりなるべしとておのが説をいひきかせければ其人いたくはらだちてのたまふ事はから心にこそ侍るなれ大和だましひもたらん人はさる説はきくもうるさしといひければさらばわぬしは神代の事蹟はみなまことの事にて少しもうたがふべき事はなしとおほすにやととひしかば、その人こそはやりかにて神典の上の事はいかでかうたがひはべらんといひしかば、おのれいへらくさらばわぬしにとふ事あり神代紀に于時天地之中生一物狀如葦牙便化爲神號國常立尊とありこの神とあるはすなはち人の事にてこれは天地ひらけはじまりて人といふものゝはじめていで來たるをいへるなり、しかるをそのはじめて人のいできたるときあしかびの形のごとに先おひ出たりといふ事は、人といふものゝいまだなからんあ世に誰か見てさはいへるにか、いとくうきたることにこそ侍るなれ是をおほかた



にいにしへの傳へなりとしてうきおきなんにはさても有ぬべし正しき神代よりの傳へなりといはんにはまづ此一事にてもことわりたしかならぬ事にははべらずやといひしかば其人こたふるに詞なくてやみぬ、されど神代の事蹟は正史に載られたることなれば、今あながちに疑ひてもどかんとあしかるべき又これをかたくなに信ぜんもをこなるべし莊周がいへる言に六合のほかは存して論ぜずといへり今神代の事蹟も存して論ぜずしてありぬべき事になん

七夕といふ文字をたなばたとよみ習へる

七夕の文字をたなばたとよむ事は中頃よりの事にて轉じ來れる詞なりこれは七夕の事を其はじめは棚機のおふ日棚ばたのおふ夜といひたるをそれを略して棚機の日棚ばたの夜とのみいへるをまた略して棚ばたとのみいふ事とはなりたるより七夕の文字を棚ばたとよむ事とはなれるなり、たなばたのおふ日を略してたなばたの日といへる事は榮花物語初花の卷に見えたり今歌の題に七夕雲七夕雨など有をたなばたの雲たなばたの雨とよみ來れるは誤にはあらざるなり、たゞ歌の詞にたなばたとあるを七夕とかく事は七夕の事をたなばたといふよりうつりたる誤なり七夕の文字をたなばたとよむことわりはあれど織女の事をさして七夕といふべきよしなければなり

七夕の文字をたなばたとよむ事は飛鳥をあすか春日をかすがとよむたぐひならむかといふ人あれどこれは事のおもむきを似<sup>本</sup>たる事なれどしからず、まづ飛鳥をあすか春日をかすがなどよむは古書の上にこそさるたぐひの事は見ゆれ中頃よりの事にいかでさることはあらん又織女の事を七夕とかくは飛鳥春日のたぐひなりともいふべけれど七日の夕の事を七夕とかきてたなばたとよむをば何とかいはん何の鳥ともなくたゞとぶ鳥の事をたぐちに飛鳥と書所の名ならでたゞ春日の日の事をたぐちに春日とかきてそれをあすかすがとよむべき事はなきにて同じたぐひのならぬをしるべし、かにかくに織女の事を七夕とかくは後の世の誤なる事<sup>本</sup>を疑ひなきをや

しのぶもぢずりのもぢのこと

しのぶもぢずりといふ詞古今集戀四<sup>河原左大臣</sup>陸奥のしのぶもぢずり云々といふ歌にはじめて見え伊勢物語にしのぶのみだれとよめるも即右の歌に本づきたるにてもぢずりはみだれたるものゆゑにしかよめるなり、さてもぢずり<sup>の</sup>はもぢといふ詞は枕草子に山藍にてすりもとろかしたる水干はかま云々狭衣に我心しどろもどろになりけり云々などあるもとろかしといへる事もしどろもどろといへるも皆もちれみだれたる意にて同じ詞なり



聲切韻云缺雷由反又音戾漢語抄缺毛連鑽也 和名毛連とあるにてモシの假字ならずしてもちの假字なる事明也チとトと通音なればモトといふもモチいとふも同語なる事 とありて缺を和名抄にもちといへるは説文に鑽所以穿也とも有てもぢりて穴をうがつ器ゆへにもぢとは名付たるものなるべしこれは詞の義少しことなるやうなれども落る所同じ詞なり

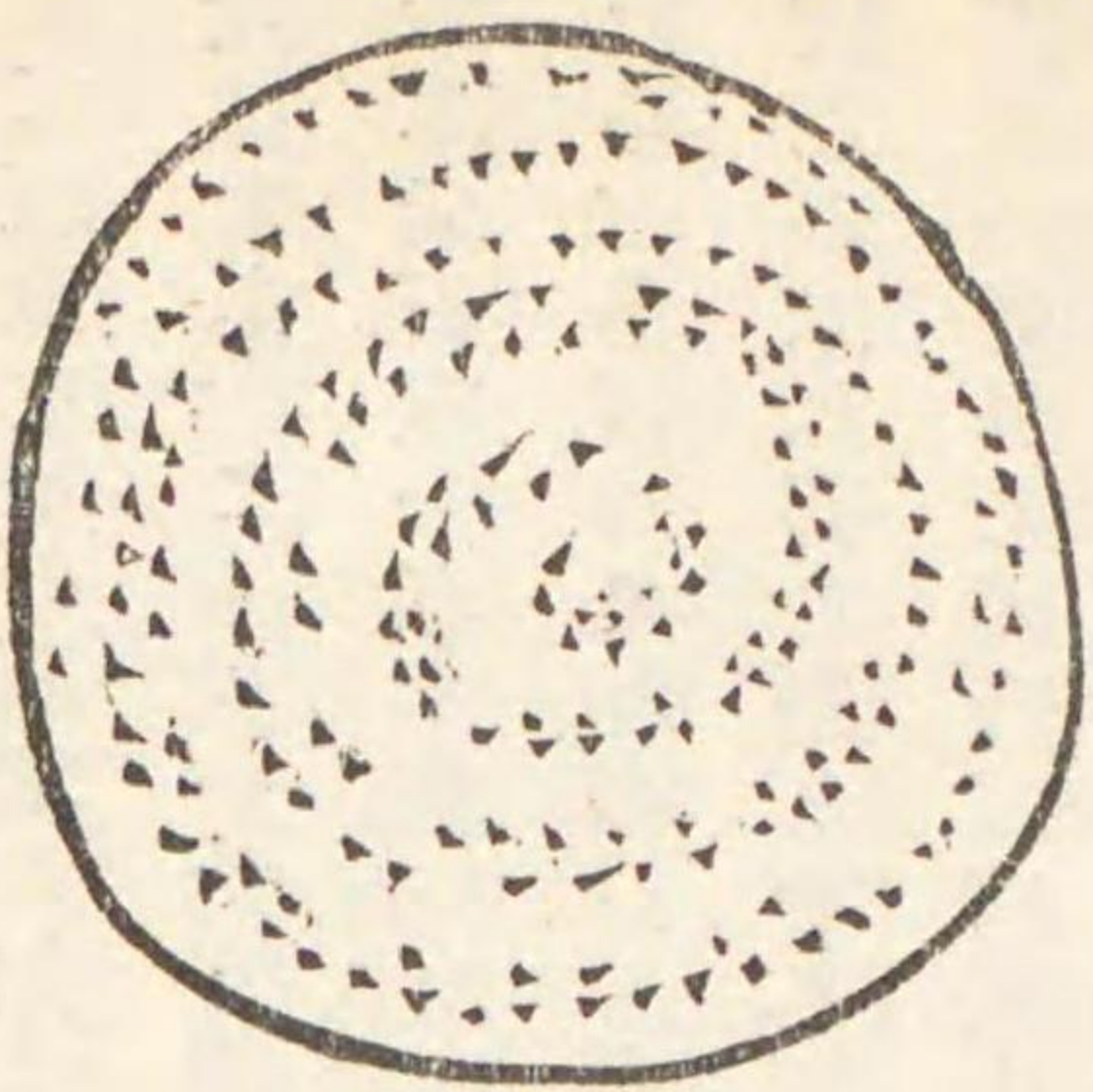
もぢずりを戻り摺れる事とすることは古き注などの説も皆おなじ但古き説に髪をみだしたるやうにすりたるなりといひ石に戻の紋あるをすりたるなりなど有は心得がたしいにしへ陸奥より摺たる布を出せしをしのぶすりといひけるがそのさまもどろかしみだればもぢすりといふ名は有べし一條禪閣は狩衣の紋にしのぶ草をすりたるなりといひ加茂眞淵も忍ぶ草を紋にすりたるならんといへりしかれども慥かなる證はなし唯もんみだれたるやうに摺りたる事は明らかならんまは今の世に其物なければ慥にはしりがたき事なり袖中抄に遍正寺の簾のへりにしのぶすりを用ひたる事を載せたれど其紋しのぶ草なりしといふ事はなし陸奥の信夫郡より出るなりといふ事はやくよりいふ事なればこれはさもあるべし

○しのぶ草

今の世の人しだの葉の形したる草を 本 しのぶ草といへどそは山にのみあるものにて、いにしへ人のいへるとあはねば誤なる事いとしるし、さて其誤なるをしりて石章の如くにてちひさき草を 本 しのぶ草ならんと云説ありそは何を證としていふぞとおもへば和名抄に垣衣を之乃布とあるによりて垣衣をその石章の如くにてちひさき草の事とおしはかりにおもひていへるにて別に正しき説はなし、こも又いたく誤れり、和名抄苔類に屋遊蘇敬本草註云屋遊 和名夜乃倍乃古介 屋瓦上青苔也石衣本草云石衣一名石髮 和名知比佐木古介 垣衣本草云垣衣一名烏韭 和名之乃布久佐 とありこは皆一類の物なればかくならべあげたり和名抄に苔の類にはたゞ此數種のみを擧て石章の類は前に草の部に出せり、さればしのぶは苔の類とせし事明らかなり又童蒙抄にしのぶ草は垣衣と書く苔類也ともあり本草綱目苔類の集解に別録曰垣衣生古垣墻陰或屋上恭曰此即古墻北陰青苔衣也其生石上者名昔邪一名烏韭生屋上者名屋遊形并また烏韭の條下に時珍曰烏韭與垣衣相同別爲一類藏器曰生大石及木間陰處青翠茸々者似苔而非苔也大明曰此即石衣也長者可四五寸とあり青苔衣とあるにてその形状をおもふべし、すべてもろこし人の何衣と名づけたるものは苔の一つらにはひまとへるものを云と見えたり石章のさましたる物は衣とは名づくべからずさて和名抄に屋遊石衣垣衣烏韭とひとつに



擧たるはこの網目の説どもにも皆同じ類にいへるとよく合へりされども垣衣は石の上などにはゆる青き苔の類なる物にてそれを和名しのぶ草といふなる事しるし、さていにしへ人の歌のさま板間垣根などに常にはゆる物にいへればよくかなへり、かの石草の如き草もたまく古き木の枝幹などにもはゆれど板間垣根などに常に有ものにあらず又しのぶもぢずりといへるも、しのぶは何の



しのぶ草は形はかくの如き物としるべし

さてややおひのびてたけ長きも有べし

寛政六年六月考へしるす

あやめもなきものなればすりもどろかしたるさまを、たとへていへるものとみゆ、世の物産の學をなす人はいにしへの人のいへるしのぶはいかなる、とも考へしらでたど石草の如き草也といふ説にのみよりてしのぶはさる物とおもひ定めて垣衣といふ文字をあてたるを誤也とおもへるは

かへりて誤なり又和名本草に烏葦を志乃夫と訓せりこれも垣衣一名烏葦とあれど一ツ物とせしなり綱目に烏葦を垣衣と別に出して同じ類にて少し異なる物とせり委しくいふ時はさるわかちも有べけれど垣衣一名烏葦ともあれば我いにしへには烏葦も垣衣も一ツ物とこゝろえて和名本草にはしか訓せし物なり和名抄には和名と漢名との違へる物もまゝあれど此しのぶ草は違はざりし事明らかし

東の都といふ詞

此江戸をさして東都と文字に書るは都會都邑などいふ字義によりて博士の輩の書をめたる事にて二百年ばかりこなた書なれたり扱これを大和ことの葉にあづまのみやこといふ事は縣居の翁の文にはじめてかゝれたり、おのれ是をおだしからずおもひてむかし翁にとひしかば、げにもみやこととは宮所の義なればみさとの外をさしていはんはいかゞなれど今は世の上中下の人おしなべて東都としも文字に書なれたれば殊更に我より改むべき事とも覺えずかゝる名目の類は世に従ふ事も有習ひなれば暫世に書なれたる文字を訓のまゝにのみてあらんもとがなかるべし文をあやなす上には江戸とのみいひてはよからぬいきほひもありといはれきこれいとうきたる事のやうなれど詞



を轉じ用たるには昔よりかゝる例なきにしもあらず古の歌に目知の宮などいへるはかならず天つ日嗣しろしめす事をいへるにて天皇にかぎりて申奉るべき事なるを奈良の宮の御時にいたりては此日知の詞を聖字の義<sup>本</sup>後歌のひじりなどいふ事も專いふ事となれり詞の義を正す時は意たがへど文字のかたにつきていはんにはとがなきに似たり、みやこといふ詞もこの例によりて世のならはしに従ひてもあらんか

附録

今の世の大名の四位以上の人を四品以上と唱ふ是は文の上にてもしかひて有べし古きかな文に四位を四品といへる事もこれかれみえ又日本後紀の文に五位を五品といへる事もあり親王に品といひ諸王諸臣に位といふは定りたる事なれど又かゝるいひなしも古くあり

髮梳の小櫛

舊訓にツゲノヲクシと訓たるを髮梳の二字ツゲとよむ事の心得がたきによりて師説には此をクシゲノヲグシとよむべしといはれたり、されど髮梳の二字をクシゲノヲグシとよまむ事猶こゝろゆかず春海今考ふるに乃は之の誤ならん後人乃と之と同じ事と心得て書違へたるものならんか、さ

らば髮梳之小櫛は義を以て書きたる文字にて舊訓の如くツゲノヲクシと訓をあたれりとせむか、さるゆへはツゲノ櫛はかゝる<sup>本ノマ</sup>ならす髮を梳る料の物にてさし櫛とは別なりサシクシはうるはしくかざりたる物なれば玉櫛などもいへるにてツゲノ櫛ならぬ事明らかなりされば髮梳之小櫛といへば黄楊の櫛にかぎるべければ舊訓の如くツゲノヲグシと訓む事疑なきやうなり、たゞ之を乃と誤れるより疑はしくなれるものなり田中道膺が説に髮梳の字をユスルカミとよむべしといへるはいたく違へり髮をユスルといふ事は有まじき事也是は冠辭考にウチヨスル駿河をユスルカミといふこゝろにいひつゞけたるなりと解れたるによりたるならめどユスルカミといふ事古書に見えず髮をユスルといふ事はことほりも聞えぬ事にて此説は受られぬ事なりされば髮梳の字をユスルとよまむことはり更にあるまじき事也此ゆするといふ詞は鬢を搔き上る時に泔坏の水にて櫛をウチユスリて、其うるほひたる櫛にて髮をかきなづるよりいふ詞なり櫛をユスルための水を入る物なれば其器をユスルツキといふなり中世の物語文にもユスルマキルなどあるはユスルツキの事を即略していへる詞にて又轉じて鬢などとりつくるふ事の名目ともなれるなり是は萬葉などに有べき詞ならずユスルノオグシと訓てはノの詞穩ならずユスルと云事を體の語にいひなすも轉じたる後の







姉妹も出家しては分を承けざるかの疑あれば、本注に  
 その由をくわしくことわれるなり、以上均分の法なり、  
 寡妻妾無男子者承夫分 これは又嫡庶の分法をい  
 へる也寡妻妾は上の兄弟  
 亡者といへる兄弟の妻妾也、父の分を承べき男子なければ、其代りに夫の分を妻妾承るなり是は夫の兄弟に  
 存在せるものありて嫡妻の分法にて分つことなり、下若夫兄弟皆亡と云へるにて、こは夫の兄弟存  
 在したる者ありて嫡庶の法にて分つ時のことなるに、こは上文より云つた文にはあらず、新に端を  
 起したるなり、凡此條は兄弟の嫡庶の分法と又均分の法とをならべいひ、さて寡妻妾の嫡庶の分法を承るこ  
 とと又均分の法を承ることとをならべいへる、此條文義隱晦なるやうなれど甚文法正しくして條理あり能其  
 文理を尋ねて讀べきこと也、上文の義解に嫡庶の分法をいへる時に、下文に云寡妻妾云々亦同此法也といへる  
 は、よくせずは思ひ誤りて疑ふ、女分同上 四字本注也、寡妻妾に女あれば上文の如く其  
 人有べし、必迷ふことなけれ 女半分を承るを云以上嫡庶の分法をいへり 若夫兄弟皆亡各  
 同一子之分有男等也 此若夫以下十七字を新刻に本注になしたるは甚誤也女分同上にては嫡庶の分法をい  
 ひて是より均分の法をいへる文也、下文の謂在夫家守志者の七字は、此十七字の爲  
 に注したる本注也夫兄弟皆亡とは己が夫兄弟も皆亡たるを云、兄弟の内一人存在すれば嫡庶の法 謂在夫家  
 守志者 七字本注也、寡妻妾の家に在て志を守る者のみ此分  
 法のことあることをいへる以上均分の法を云 若欲同財共居及亡人存日處分證據灼然者  
 不用此令 此若欲以下は一條の上をくゝりて云へる也、寡妻妾にのみかぎりにて云ことには非ず、兄弟にても  
 財を分たすして同居せんと願ふものは其まゝになす也、又亡人云々に財主の存日には分ことなれ  
 ども死後にいたりては財主の存せる日に處分せしことしたる證據無ければ、其如くにはなしがたし、  
 もし又たしかなる證據あらばいかやうに分財をなすとも、それは財主の存日になしおきたるまゝになるべ  
 ければ此令の分法にかゝ  
 わることなかれとなり  
 太宰帥

日本紀天智八年春正月庚辰朔戊子以蘇我赤兄拜筑紫率 これより先六年紀に筑紫  
 都督府といふことなり 持統三年閏八月丁

丑以淨廣肆河内王爲筑紫太宰帥同八年九月以淨廣肆三野王拜筑紫太宰率續日本紀大寶二年八月以  
 正三位石上朝臣麻呂爲太宰帥和銅元年三月粟田朝臣真人爲太宰帥、韻會入聲質韻率字法朔律切一  
 日領也廣韻將也云云古作率通作帥同韻帥字注毛氏曰凡稱主兵者爲將帥則去聲言領兵帥則入聲 職  
 抄述解帥は去聲入聲の二聲あれども率は入聲にて去聲によむ例なしと云 字典率字注廣韻所律切集韻會正  
 るは甚誤也、帥と通して所類切になつともあり下に字典を引たるに詳也 韻朔律切然音蟀通韻表的也後漢何武傳刺史古之方伯連一方表率也正韻同帥詩抑風旄丘序方伯連率  
 之職註率所類反史紀建元以來方候者年表率與帥同帥字註唐韻所律切集韻正韻朔律切並辛蟀又廣  
 韻集韻韻會正韻然所類切蟀去聲廣韻將帥也

三夕の歌

新古今集にならべあげられたるをいかなるをこの人の三夕の歌とはいひはじめむ年比おのれと  
 千陰と自寛とにこの三つの歌をかゝする人多かり三夕といふ名もいとしく覺ゆれどおほくはや  
 むごとなきあたりよりもとめ給ふなればさのみいなむべくもあらであまたものしにけり後見人  
 のこれをこのみてかけりとおもはんははづかしきわざなり、いとみやびかならずおほゆるをや  
 この三つの歌どもいづれもよからぬ歌也西行法師の心なき身にもといへるはあまり卑下するに過



ぎたり、鳴たつ澤のあはれをしらむ事はいかばかり心ありてたけき事なりとおもへるにか心なき身にもなどいはんは深きゆゑよし有事にこそいひ出べけれ、寂蓮法師のそのいろとしもとあるはおもしろきやうなるいひざまなれど眞木たつ山なりとてさびしきそのいろならず、さびしきが其色ならずともいふべからず、またさびしきに其色とさすべきものもあるまじくや花にても紅葉にても雪にても月にてもをりにふれてさびしくも又花やかにもおもはるべき事なり、定家卿の歌は難すべきふしなし、あはれともさびしともいはざる所二夕の歌にはまさりぬべし、これを或人の花も紅葉もなにはがた浦のとまやの秋の夕暮、とあらたむべしといへるはわらふべし、さてはいみじきえせ歌とこそなりぬべけれ、花も紅葉もなにはといひかけたる、ことにいやしきこそきこゆれ

令法

飛驒の山中にりやうふといふ木あり、其若葉をつみて飯にまぜかしぎて夫をりやうふめしといひて常にくらふといへり葉は茶の葉に似て大きくやはらかにて三四月の頃白きこまかなる花さくといへり此りやうふといふは令法の轉じたるならんかこれはたつもりなるべし此りやうふの木のこと

は館のたかはたといふ人飛驒の國よりかへり來てかたりしなり

長恨歌の繪

(此所に長恨歌の繪とあるべきを原本に落せしものなるべし令法とは全く別條なりけれ目次にも書き加へたり)

花鳥餘情に長恨歌の繪は亭子院の御時かゝせ給へるよし見へ侍れど其繪とてすゑの世につたはりたることも侍らずしかるを通憲法師法名西唐書唐歴楊妃外傳などいふ書をかながへてあたらしく繪にかきしをぞ今の世には長恨歌の繪とは申傳へはべる是は平治の亂の有べき事をかゝして後白河院に御心をつけ申さんためにおもひくはだて侍るとぞ、あのごとく安祿山がやうなる信頼がふるまひ例すくなかりけることなりその繪は平治元年十一月十五日に寶蓮花院に施入しはべるとて信西一紙を書そへて遣したるよし舊記にも載はべるなりとあり、かの法師の平治のみだれあらん事をかねて知たるも又繪をもて帝をさとし奉らむとおもひまうけたるもいとみじきわざになむ

禁色

いにしへゆるし色は其品ならぬ人はきまじき事なれど貴人などの給はりたるはきる事も有しならん源氏橋姫の卷に薫中納言の宇治の八宮の御もとの殿居人かの御ぬきすてのえんにいみじきかり



の御ぞどもえならぬしろきあやの御ぞの、なよ〜といひしらすにほへるをうつしまで、身をはたえかへぬものなれば、似つかはしからぬ袖のかを人ごとにとがめられぬ。でら(此三字今補之)るゝなん中〜ところせかりける、心にまかせて身をやすくもふるまはれず、いとむくつけきまで人のおどろくにほひをうつしなひてばやとおもへど所せき人の御うつりがにてえもすすぎすてぬぞあまりなるやとあり、この殿居人など綾をきべき品の人にはあらずと薰中納言はかの給はりたればやがて常にきたるなり、今の世にも武家にて用ひらるゝしらのしめなどいふは四品以上ならではきぬ事なるを大名の家士など其主のたまはればやがてきる類なるべし榮花物語初花の巻に皇后宮の女房の禁色を着たるやうなる事あり

ひたゝけ

ひたゝけはひたすらたけたる意又よたけといふ詞あるも世にたけたる意なるべし、やんごとなき人の事を御身のほどのよたけさなど源氏に見えたり、又萬葉たけ本そとも長の意か、そかはおごそかのそかなるべし榮花物語望月巻に御おくりもひたゝけてあゆませ給ふ

ふるとし

ふるとしといふ事は春よりいふ詞なれば年の内にありてよまむ歌に其年をさしてふるとしといふべからず、しかるを師頼卿の歌に、よしの山つもれる雪のきえゆくはまたふるとしに春やたつらむ、又俊頼朝臣、あわ雪もまたふる年にたなひけばころまとはする霞とぞみる、などよまれたるはひがことなり、

さて永久四年百首に冬の題の内に舊年立春とあげられたるもとよりひがことなり冬の題ならんには年内立春とこそいふべけれ、月詣集に範光、をしめともけふ暮はつるふる年の明ればなとて身にかへるらん、頼輔、かきくもりまた白雪のふる年に春とはいはではるは來にけり、是もふるといふ 宇あやまれりたゞ暮はつる年のとこそいはめ永縁僧都の歌に、きのふまで雪ふる年本と見えしは今朝は氷を春風ぞふく、かくやうによまんこそかなひぬべけれ又後の世に逍遙院實隆公、いそのかみまたふるとしのしめのうちにいかなる春をこして來つらん、又基綱卿、くはゝれる月の數のみ積りきてけふふるとしに春やたつらん、などよまれたるは、すでに古歌に多くあればかくよむべき例と定めてよまれしなるべけれどかにかくにことほりなき事になむ

古今集の序に人麿おほき三の位といへる



人麿を正三位といへるをいぶかしみて世にさまざまの説どもあれど、もと人麿は萬葉にのみ見えて國史にも其人を載られず、萬葉に其みまかれるを死と書きたるにて六位以下の人なりしこと明らかなるにつきて、東麿の古今序考に三の位とあるは後人の加筆ならむと疑はれたるなどことわりさることなれど、今おもふにこれは後人の加筆にもあらざるべし延喜天曆の頃はすべて古の傳うしなはれたる事も多ければ、さしもの貫之ぬしも世にいひ傳たる雜説によりて、おほき三の位とはいはれしにて、古を深く考へざりしなるべし詞林采葉に石見國風土記を引て云々とあり、こはまさしく延喜の風土記なるべし、風土記には世にいひ傳たる雜説の國史などとは異なる事も多く載たるものなり、貫之ぬしかならず此風土記などの類の雜説によられたるにこそ有べけれ

## 道風朝臣佐理の大貳行成大納言の筆の跡

今の世にいにしへのよき手といへば、かならず道風佐理の大貳行成大納言をむねとたふとみいへり、もとより此三人はそのかみにも此道に名高き人々、其名のきこえたる事國史記録などにあまた見えたれど、今は其名をいふ人もなく又其あとつたはれるものゝ一ふしだになきは、いか

なるゆえならん、たゞ弘法大師のみは其名のかしましきまで聞えたれど、その筆の跡も寫しつたへたる本ども世に多くあり、今の世に傳れるを見るに大師の筆のことにすぐれたりと見ゆるは東寺に傳へたる傳教大師におくれる書物などは、いとたぐひなくぞおぼゆる、又ちかきころ常陸國人の大師のかゝれたる因明抄といふものを江戸にもて來てよきあたひを得てうらせしを見しに、いひしらずめでたかりき、これは伊勢の國人のかひとりてもてかへりしとぞきつる、此二くさを見てしも其名高きにはまことによしありとぞおぼえし、是をもろこしの人になづらへいはんに、唐の世の人その名高きすぐれたるあたりにもぞくらべつべけれ、此外に寫したる本どもかれこれあれど、げにまことの跡なりともみゆるも折々あやしげなる文字どものまじれるは大師の筆とてままことの筋をかき得たるならねば猶あらぬ心地す、又鳥のかたちなどに書したる類などあるはいと心ゆかず、揚庵がかけるもの<sup>本ノマ</sup>にみしある類なるや又後の人のにせて書る物と覺ゆるも多し大師の筆の跡なりとていろはをうつしつたへたる本どもさまざまあれど皆まことの物とは見え、いろはは大師の作られたりといふ事興教大師などいひ江談抄などにもみゆればそれによりて後の人の偽かきてしれ人をあざむけるにこそあらめ



文つくるにこゝろえあり

文かく事は用廣きわざにてよろづ何さまの事もふみに載せたる後の世にも傳べきものなれど、おろそかになすべからず、もし其かきさまつたなき時は、このこゝろを盡す事かたし、かゝれば心あらむ人はよく文のかくやうを學びてあるべき事なるを、今の世の人はたゞ月花をあはれみ花をもてあそぶなどはかなき心やりぐさとのみおもへる人の多かるは、たがへり、この頃閑居筆録といふものを得たるに文の事しるせるにいと心ゆく論あり、かの都に名高かりし伊藤の翁が東涯よはひの末にかゝれたる物とぞいふなる、其書にいへらく古人爲如病家作書請鑿窮人寫帖貸錢唯恐其意之不達而聽者之不察何暇奇崛其句瑠續其詞以求勝哉古久難澁遠難屬讀者非當時故爲聲牙之語以窮人也如殷盤周詁一代大號令敷告天下者想當時府史胥從之賤鄉黨閭里之正皆能開曉不待講解但年也已遠言語日新傳至後世遂致難請加之訛缺亦不可無猶古碑廢印久歷星霜剝缺不完有自然古氣後世爲文中無許大見識強作文章本非得已而不可者故設奇語險句以欲追蹤古人猶新置器皿故剝磨其形以古器也夫爲文而欲使人難曉不知所爲文者將何所用哉亦不過一技焉耳といへり、これよく文つくる心得をさとせり、さはいへどから文の事はわがよくしらぬ事なればいはい、近き頃の人の和文を

つくるを見るにみだりに人の耳とほき古言をつゞりて人をおどろかさんとする人多し、もと文のつたなきもたくみなるもさとびたるもみやびたるも詞の古きあたらしきによるにはあらず、そは詞の用ひざま其趣を得たるとおもむきをえざると其人の心のさとりあきらかなるとくらきとにあり、ことのいひさまいやしからず心よくとほりてとゝのほり正しきをよき文とはいふになむ

詩有趣則可作、無趣則不可作也、無趣而強作則無味文、不多讀書則不可作也、無識則亦不可作也、不多讀書而作文則失乎淺易、無識而作文則陳言套語不過踏襲古人之作耳

上手の作れる文はたけたる鶉飼の鶉をつかふが如し、鶉の數あまたなれども手細みだれずして心のゆかざるかたなし、下手の作れる文は目しひたる人の大路を行くが如し、行ことたゞ一筋なれど、ともすれば横ざまにはしりてあらぬちまたに迷ひゆく事あり、上手はかならずいふべき事をばもらさず、はぶきていはざる所にはかならずことわり明らかなる故あり、下手ははぶきて有べき事をも多くいひて、かへりていはではえあるまじき事を忘る、上手の文はよそごとをいひ、中たえたるやうなるも、心よくつゞけり、下手の文はいひつゞくる事たしかなるやうなるも、をはりとほらず、上手のみじかく云とりたるは心ふくみて味あり、下手のみじかくいへるは心あらは



なるに過ぎてことたらず

ちかき世に文よく書きたる人

賀茂の翁の前にありて契沖法師東萬呂宿禰など、ひとときは其世にすぐれたり、翁の後にありては都人に富士谷成章あり、江戸の人に村深庵あり、成章はから學もかしこく歌もよくよめりし人也、深庵は歌の名高かりしかどいふなる口づきとも見え得ざりしを文かくかたは得たる人なり

苗字を賜はる定め

今の世に平民に苗字をといふものゆるしなくては稱する事を得ず、これはいにしへ賤民に姓をゆるすことの有しよりうつろひ來りしものなるべし、戸令放家人奴婢爲良及家人といふ條の集解に、穴云未除附之間稱良云々但未負姓名之間尙號賤耳又不申上給姓之由也、貞云放家人奴婢爲良日其姓所司可定更不可奏者私案官處分可開也臨時事故令行事主姓隨部字申送所司耳など云事あり

○榮花物語の事

改觀抄追考榮花物語第三十つるのはやしの卷の終に云、つきくのありさまともかたく有べし見聞給ふらむ人も書つけ給へかしと此詞跋に似て萬壽五年二月までを記して赤染衛門はこの卷に

て筆を絶けるなるべし、第三十一殿上花見卷は萬壽五年と長元二年と三年の記をもらして長元三年よりかきはじめしとみゆ、赤染此卷にいたりてもつゞけてかゝば年記さだかなるべき事也、さるを此卷より出羽介の歌初めて出たれば、もしくは以下十卷は出羽介のつゞけかけるにや、されど赤染衛門は猶も長久のころまでながらへありしとみゆる事有り後拾遺集かく匡房朝臣うまれてはべりけるに、うぶぎぬぬはせてつかはすとよめる赤染衛門、雲の上のぼらむまでもみてしかな鶴の毛ころもとしふとならば、おなじ七夜によみてはべりける、千代をいのる心のうちのすゝしさはたえせぬ家の風にそありける

かきり

馬内侍集中關白おはせんとたまひてまへわたりのかぎりをらせ過給ひぬれば

こち風にこのみしるくて橘の

たのめし事のすきぬめるかな

たち花のかぎりといふかぎりの詞源氏横笛にふたあゐの直衣のかぎりきてといふ事あり、同じ詞なるべし、東風をこち風とよめる事此歌などはじまりにやなほふるくもあるこちのちは風の事



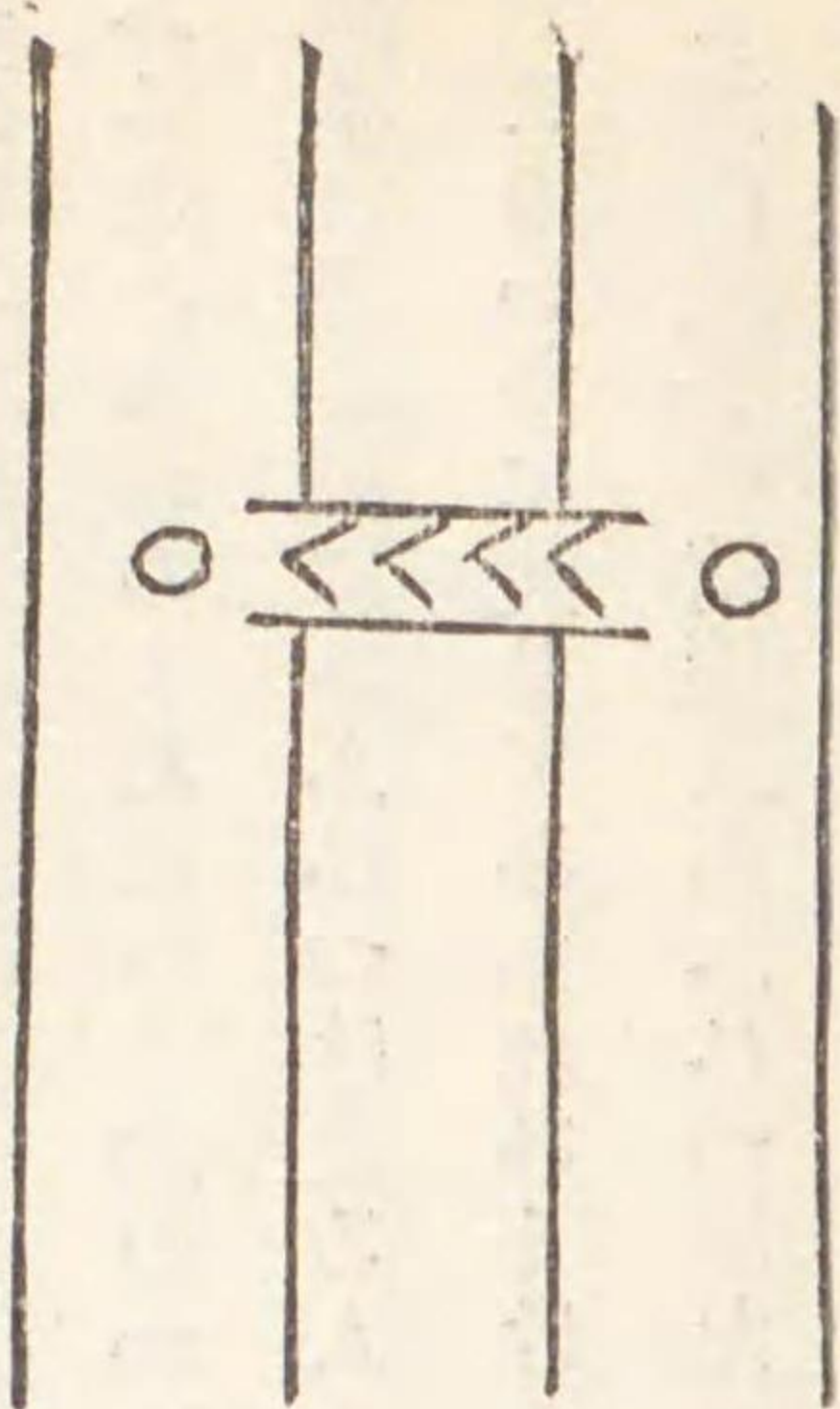
なればこち風とはいふべからずといふはかへりて誤なり、あらしのしも風の事なるに、あらしの風ともいへり、おなじ類なり、たち花のかぎりはたち花のみを折りて過たまひてとはせたまはぬなり歌も其ころなり直衣のかぎりは直衣のみをきてなり

くもりたる月のおもしろき

顯輔、秋風にたなびく雲の云々、契沖云一天はれたる夜の月をいはずしてかゝる所をもとめていふがをかしきなり、俊頼、村雲や月のくまをははらふらむはれ行たびにてりまさるかな、風雅、後鳥羽院、薄雲のたよふ空の月影はさやけきよりもあはれなりけり、同集清輔、ひたすらいとひもはてじむら雲のはれまぞ月はてりまさりける

屏風

屏風に錢形の屏風、絲つなぎの屏風、紙つなぎの屏風あり絲つなぎは雅亮裝束抄に見えたり、錢形は類聚雜要に見ゆ紙つなぎは今の世の屏風なりこれもよほど古くありしより官家の人のいひつたへたるよし西村出羽守正邦いへり、何ぞ元書に出たるか可考あじろ屏風も絲つなぎのよし此ごとくなしたる堂上にて有こと山本清溪いへり



かくの如くびやうをふちにうち  
三所ほどにありと也

みあれ

公事根源集解云祭を神生と云て別雷命生ます日也と云實は申の日が神生にて酉日は神生を祝ふ儀なるべし、俊成歌、よそながら今日の日吉の祭にもかものみあれはあふ日なりけり(御あれ木、みしでかけて神山のすそのみあれはあふ日なりけり)

五社百首

此みあれを神生に別雷命の生ます日也と云説何に出たる説にか可考  
貫之集車にのれる人賀茂にまうづ



人も皆かつらかざしてちはやふる神のみあれにあふひ也けり

順集賀茂の祭さるの日みあれひくとて

わかひかんみあれにつけていのることなるく鈴もまつきこゆ也

中務集四月みあれひく

神をのみのりおきては打むれて立かへりなむかもの川なみ

一宮紀伊集みあれの日人のもとより

ちはやふる荒人神にことよせつけふのあふひをひかさらめやは

夫木抄西行みあれ

思ふことみあれのしめにひく鈴のかなはぬはよしなかしとぞ思ふ

長秋詠草加茂の社にあふひつけたる人まゐりたる所

神代よりいかに契りてみあれひくけふはあふひをかざしそめけむ

月詣集加茂社祭神館儀式あふひつけたる人の参詣したるに

けふみればかものみあれにあふひ草人のかみにぞかけてける哉

堀川百首葵、顯季

むかしよりけふのみあれにあふひ草かけてぞたのむ神のしるしに

仲實

神山のそのゝあふひをくさりつゝけふのみあれにかざしつる哉

師時

かけまくもかたじけなきは千早振神のみあれにあふひなりけり

やらぬ

秋風抄、保季「いりやらでなををしむ月のやすらひにほのくあくる山のはぞうき」

新拾遺、俊成「山櫻さきやらぬまに春ことにまたてぞみける山のはの月」

續千載、源兼氏「さのみやはまださきやらぬはなゆるゑに見まくほしさの山ちくらさん」此類はい

と多くあり

草庵集「ほかよりかちりこそやらぬ櫻花あらしは山の名のみなりけり」同「ちりやらぬ此ひとも

とに花なくばたどいたづらに春やのこらん」此二首の類は宣長わろしといへり、猶古歌にも此類



あるか可考

堀川後度常陸「みねつよき花に心のとまりつゝゆきもやられぬ志賀の山越」

蓬壺

盛衰記に養和元年二月六日八條殿も焼ぬ此所をば八條殿の蓬壺とぞ申ける、蓬壺とはよもぎがつぼと書て、入道殿蓬を愛して坪の内をふたつしつらひ蓬をうゑ朝夕これを見給へども猶あきたらずぞおほしける

御こしをか

新六、爲家「みゆきせしふるき北野のみこしをかあはれむかしはさぞな戀しき」裏書いふ御輿岡の事後撰に御こしをかきてと云々、又みこしをかにてとある本もあり、これにつきて異儀はべり、みこしをとこといふなり行幸の御輿岡に供奉するをみこしをとこといふ、一義はみこし岡は北野行幸の時獻餉する所なりと云、後撰歌六帖に岡の部に入隨新撰六帖岡部爲家卿詠之邑の義治定か以上名所歌枕異本にあり

内官

左傳昭三年不腆先君之適注謂少姜以備内官焜耀寡人之望則又無祿早世云々

又曰内官不及同姓社曰謂嬪御也○六典十二官妃夫の類を云

道理さとき者は道理を盡さず(原本頃名なし、今便利の爲に之を説く)

碎玉話に秀忠公近習の人を召て事の次でに道理さとき者多は道理を盡さず是其才智に馳て事の根元をよく不察の誤なり是より外は有べからずと思事をも人に問ひ自省る時は此のさはりかしこの患あり汝等常に此理をおもはゞ事を行ふに過少かるべし、武士の自ら決斷して人口を不憚は各別の義ぞと仰らる、觀世左近は謠に名を得たる者後剃髮して安林と云、謠に三病あり聲のよき、覺のつよき、拍子のきゝたる此三事そなはれるもの多分謠に不成して止むと人に教ゆ又この何の道にも有べきことなり

かきひたしの汁 榮花物語後四卷

台記に柿浸といふ事ほしがきを酒にひたしたる物なるべし

にきみ

和名抄瘞「にきみ」榮花物語根合の卷に御にきみの事おもらせ給はねば



二禁と書り腫物の名也、玉海續世繼など其外の書にも見えたる事あり、或人大小便閉ならんと  
 いへるは二禁の字によりていふなり、新撰字鏡癩、和名抄瘰、唐韵云 昨禾反和 小癩也又云癩  
 病源論云癩癧 音子結反字亦 血結聚所生也字典瘰、說文小腫也、玉篇癩也、博雅瘰癧也、韓非  
 瘰者痛飲藥者苦又 子結反 音節癩也瘡也又癧、廣韵癩也正字通瘍類與癩疽別瘍之小者爲癧又瘍音  
 湯、說文頭創也、曲禮耳有瘍則浴、周禮天官瘍醫注瘍創癩也

螺鈿

いにしへは蚌にて造もの也按に說文鈿金革也正韵陷蚌曰螺鈿、又按に通鑑陳紀云上性儉素私宴用  
 瓦器蚌盤、注云蚌盤者髹器以蚌爲飾今謂之螺鈿、近來舶渡及琉球にて造作する者は錦具 即夜 白具及石  
 決明などを用ふ蚌にて造る物罕也 左氏 介譜

桐の木にものかく

桐の木にものかくに酒をひけばにじます

扇にものかく

扇にものかくにとの粉を少しちらしてはきたてかけば墨をよくくくる

石摺古筆などに雙鉤にとる紙はうすやうの裏により木の實の油少し引て櫻の木の上にて表のかた  
 より猪の牙にてすりて用ふ

右三條東江いへり

東江姓は源名は鱗字は文龍俗名  
牛田文次郎といふ東江は號なり

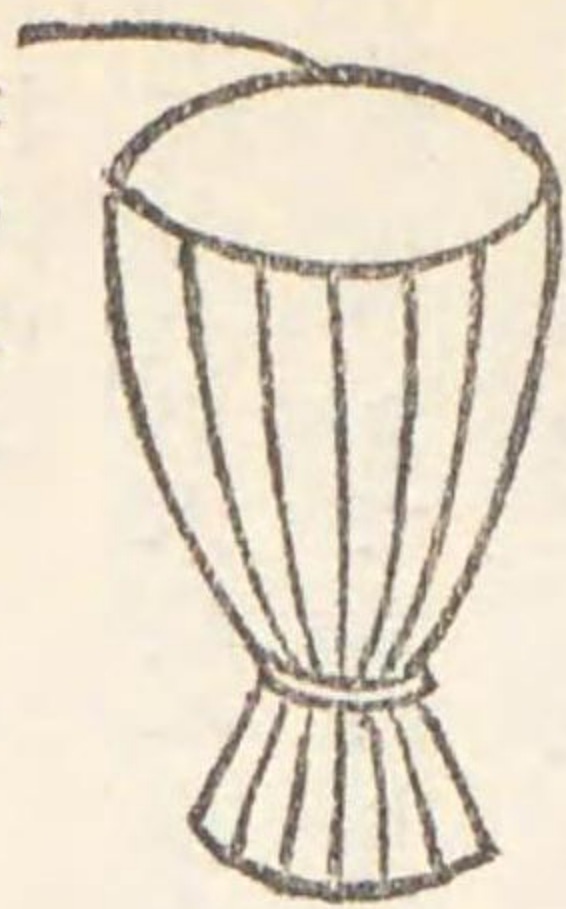
打碑の法

最初板の上を木綿へ少し油をつけてぬぐひ、さて紙へ水をうすく引、水引きたる方を板につけて  
 はるなり、さてふのりをはけにつけて其上をむらなくひき、いとうすききれをあてゝはけにて上  
 よりうちまた其きれをとりてたゞちにもうちいかにもよく文字を打いるゝなり、さてなまゝに  
 干たる時玉壹つに筆にて墨をつけいまひとつの玉と打合てうつなりこれを蟬翅摺蟬翼摺などいふ  
 なり、墨はあまり濃からぬを少しづゝつけて幾度もうつがよろし、此法にて打たる唐本に、い  
 とうすきもあり又烏金摺のごとく濃きもあり、うすくなさんには墨をうすくすり、少しづゝつ  
 けてうす墨を幾度もうつし、濃くなさんにも墨を少しづゝ幾度も打べし、すべて急になさんとす  
 れば字のうち墨いりてあしゝさて前にいへるふのりは茶碗に水二杯ほどならば、ふのり二寸三步  
 四歩 ガカ ほど入てよく煎じて、すいのにてこして用るなり、はけは毛つよきがよし、はけわるき時は



字いりがたし、玉は大さわたり二寸内外ほどなる二ツ用るなり、うちにまつき板を入其上にわたをおき其上をあぶら紙にてつゝみ、さて地の糸のめのあらしき木綿にて上をつゝみ、それに墨をつくるなり、其木綿のめにむらあればわろし地をえらむべし、一度用ひたる玉をかさねて用ゐる時は、はじめはたゞ水にばかり少し筆にてしめしてうつべし、それにて墨のつきかたまれるがとくるなり、さて其後墨をつけて用べし、さて又紙はこうらい唐紙白紙などをよしとす、すべてうすくつよき紙よろし、紙のほしやう蟬翅はなまび烏金はよくかはかすなり、烏金摺になさんには、ふのりを用る所を水にかはを用るなり、さてよくかはきたる上に

玉ノ形



墨付所

てわたをまろくなし、それに墨の濃をつけて手にもちて字の横よりするなり、又もめにわたをつゝみてもよしと、すりあげたる時甚少し蠟をきれにつゝみて一通りの紙の上をなづるなり、又すりたる後にかびを出さんにはすりあげていまだかはかさぬうちに蠟を少しぬるなり、かびを出すは蟬翅にても同じ、また唐本に烏金をたてにすりたるも有、これ手ぎわよくなれば墨をいるゝ事なり水にかはは随分よきにかはをうすくとくなり

こは韓大年數年の工夫をもて制し出したる法也

大年名天壽大年は字俗名  
中川長四郎といふ

なまぐさき香をさる(原本題名なし)

ものになまぐさき香のうつりたるを菊あるはよもぎをもてあらへば其香たちまちさるなり□のうちになまぐさき香のあるも菊をかむべし、玄耶いへり



織錦舍隨筆卷之下

伊勢物語新義のおほよそ

此物語はむかしより業平朝臣の事を世にいひつたへたることのあるを、其まことそらことをもとはす書あつめたるものにて、むかし男といへるはやがて業平朝臣の事をさしていへるなり、もとの事をもとまさでしるせるものなれば時世つかさくらゐなどのたがひて打あはぬ事もこれかれあれど、ことさらにもとめてつくりなしたるものにはあらず、かゝるたぐひの文はかりそめの筆のすさみにて、人のもてあそび草のためにしるせるものなれば正しき記録などに思ひくらべてあげつらひいはんはなかなかをこなり、さて大和物語は昔物語などに此物語に載りたるとして夫につきていはれたるはうけがたし、かの眞名木は其本は古き本とみゆれど眞名になしたるはいと後の人のわざとこそおほゆれ

いせと名づけたるは

此物語は伊勢の御の書たれば伊勢物語といふよし古き説に見えたるを其誤なるよしは契沖法師が臆斷師の古意などにはくはしく見えたるにて事きれたり、又袋草紙に泉式部が本には伊勢の事初の條にありとあるによりて初條の事をもて題とせるならんといふ説はいとやすらかに聞ゆれど師のいはれたるごとく業平朝臣のいとわかゝりし程の初冠の事を後にしるしてその年たけたる後の伊勢の事を始にのすべきならねば泉式部が本によりて此事をさだめいはんも猶たしかならず又眞名本に伊勢國を妹背國と書たるによりて東萬侶ぬしのいせは妹背といふ意なりといはれしもわろし、そは古き詞にいせいもせをいせといへる例もなくいもを略していとのみいへる事もなしもを略しては、もとのみいふこそ古語の例なれ、眞名本にしか書るは後の世の人のみだりにさる文字をうめたるなり又東萬侶ぬしの説に袋草子に有密事之故爲構僻事之由號伊勢物語諺伊勢は僻と云故也とあるによりて、ひが事をいせといふよしを考られたる事童子問古意などにはしく見えたり其説に忠房朝臣堀川院後度百首池の歌に、いせならばひかごとぞとも思はまし大和なるてふみまさるの池西行法師山家集にいせ人はひかことしけりさゝくりのさゝにはならず柴に伊勢人はひかことしけりつしまよなどの歌を引て、ふるくひがことをこそなれ鴨長明抄夫木に、りかひ名ゆけはいつみのゝはらいせといひならはせる證に擧てことわられたるは論なし、たゞ何をもてひがことをいせとはいふ



にか其ことわりわかちがたきをとかんとて齋王のをりざれ給ひし事をおもひてひがことのより所としてことありげにいひなされたるは、あまりに求すぎたる説にて、いたく強言なり、又古意に昔いせ人は心いとわろくて親子兄弟の物をかすめとりし事今昔物語にありて、それをより所にしていはれ、又伊勢や日向の物語などいふ事のあるを引れたるなどもうきたる事にてよしもなし春海今考るにこはいと。えと昔かよへば、いせをえせとよりなして、ひがごとをいせとはいへるなり、えせの假字定めがたし、をこの伊勢とかよはせいへるにつきて衣の假字なる事をもしれりすべてひがみたる事をえせといへるは、えせすいりやう、えせはかせ、えせ歌などいへる詞いと多し、かく音のかよふ詞をとりて用ふる事は大和物語の歌に、しのづかのうまや／＼とまちわびしきみはむなくなりぞしにける、とあるもうと。いと音かよへば今や／＼をうまや／＼といふによせてたるをなど同じ類とすべし、此たぐひ猶外にもあるべし、考ていふべきなり、かくかく心得る時はやすらかにして事もなし、さて此物語をえせ物語とするはあらはにしらるまじき男女のみそか事をしるしたるよりの名にて別に心あるにあらず、しかるをわざと事のたがへるさまにつくりなして、その心をしらせんとて名づけたる物なりなどいふ説はことわりあるやうに聞ゆれどかへりて後の世人の心なり、いにしへ人はいか

でかさまではおもひめぐらすべき

家集辨

橘千蔭年頃の歌ども數おなくつもりたるを、こたびみづからえらみ、みづから序作りてうけらが花と名づけて、ことさらに板にゑりて世に傳へぬ、このごろ吉井清來りてかたらく、わが師の家集世に廣まりけるをある歌人の見て難しいへらく、むかしより家集といひて傳はりたるはその人あらずなりたる後に書あつめたるにこそあれ、吾歌をわが世のうちにえらみあつめん事あるべからず又みづからの集にみづから序つくりて載せん事こそいにしへにためしもおほえね、又わが歌をみづから板にゑりて世に廣むといふことは聞もおよばぬ事なり、こはあながちなる名をもとめんとてのわざにや、いといと得がたしといへり、いでこのそしりのがるまじきことわりにて世にもかたり傳へもていであざけりいはん人のおほくいで來なましかば、わが師のいみじきおもてぶせにや侍らん君はいかにおもひ給ふぞといふ、おのれこたへけらくさるは物のことわりよくわきまへたらん人はうたがふまじきを、しかなんいふは翁が名高かるをねたみおもふあまりにいふ事なるべければ、すてゝとひ給ふ事なかれといへばいなくみづから家集を板にゑり侍る事はい



まだ世にためしもあらねば、かならず人のうたがひおひぬべきわざなり、ねがはくは吾師の爲に其ことわりあかしたまへさらではいとやすからぬわざなりとてかひさへいへば、さらばとて先にしへの家集ども廣く考へ見るにおよそ古の家集に四つの品あり、其一つには人萬呂赤人家持卿菅原のおとよなどのたぐひは、はやくより人のもてあそびたるものにて後の撰集にもこれより歌をとり出られたれど、まことは後の世にいつはり作れるにて其人の歌ならざるが多し其二つには業平朝臣友則興風などのたぐひは歌は其人の歌なれど後よりものに出たるを拾ひて書あつめたるものなればまことの家集とはいひがたし其三つには高明公齋宮女御などの御堂關白四條大納言などのたぐひは其時人の手にかきあつめたるにて、はしがきの詞を書あらためてよみ給へり聞え給へりかき給へりなどあがめ詞をもてしるせり、こは品高ききはの人へのみかゝるはありと見えたり貫之躬恒などのたぐひは其はしがきの詞もみづからかけるまゝにて、みづからあつめおけるなりとはみゆれど題しらずといふ事の所々にあなるは猶人の手にあつめたるなるべし、其四つには伊勢中務順朝臣能宣朝臣などのたぐひはみづから書あつめたるものと見ゆ又みづから心ありて名づけたるたぐひもあり、そは師氏大納言はいやしき海人のさへづりによそへて海人のてこらと名

づけられ俊頼朝臣は散木集奇歌としも名づけられたり散木は用なきものゝたとへにて奇歌とは奇絶などいふから文の字心にあらで大和ことの葉にあやしのしづがやあやしの山がつなどいふあやしの詞なり俊恵法師の禁葉といへるはかの古今集の序に歌とのみおもひて其さましらぬなるべしとあるに本づきたるにて京極中納言の拾遺愚草とつけられたるはみづからへりくだりての詞なり、かく四つの品あるが中に、はじめの二つの品は後の人のつくれるなれば引出ていふべくもあらず、されば家集のためしとなすべきは後の二つの品にてそは人の手になれると、みづからあつめおけるとの二くさなり其二くさのうち人の手になれるはまれにてみづからあつめたるぞおほからん右京大夫家集のはじめに家の集などいひて歌よむ人こそかきとむることなれ、これはゆめくさにはあらずといへどもこは家集はかならずみづからかきとむるならひのものなればかくいへるなるべし又頼阿が家集に周利といふ人の西行上人自筆の山家集をつたへもてりといふ事見えたり、さるは上人もみづからあつめてみづからかけるにこそ又古人の家集に花の歌よめる中に月の歌よめる中にもいひ百首の内に五十首の内にもいひて多きがなかり一首二首をひろひいでゝ載たる事常にありこは家集にのせんとてみづからの歌をみづからえらみたるにこそ



あらめ後の人のあつめかゝむものならば家集は撰集のたぐひにてもあらねば百五十首のうちよりわづかに一首二首をとりいでて残れるをすてん事はいかでかあるべき、かゝれば家集はむねとみづから書あつむるものと見ゆるをある人の其人あらずなりたる後に書あつめたるものなりとさだめいへるはなにゝよりていへるにかいといぶかし、おそらくはいにしへの家集のありさまいかなるものともよく考へぬにぞあるらめ又吾家集にみづから序を作る事は安法法師能宣朝臣曾根好忠など皆しかり安法法師が序にはいひあつめたる言の葉さまゝにつけておほかれどたゞ一つ二つおほゆるをかきあつめたるなりとしるし、能宣朝臣はなまじひにしほめる花の詞をあつめてといひ、好忠は與謝の海に老の波かきかぞへ来る蟹のしわざと人も見よとかける其人々はいにしへに名高き歌人なれば其家集どもをば歌よむほどの人はたれもよきまではあるまじき事なるをかのある歌人はいかですしもありつらん又板にゑりつくる事は後の世にいで來れるわざなればいにしへに例なきことはもとより論なし、もし印板といふものはいにしへの世にもあらましかば古の人もなかこれを用ひずしもあらんざるを印板といふものなき世の人の板にゑらぬを占めしにして印板いで來れる世の人の板にもものするをとがむるは琴柱にかはつくるたぐひにて、ものことは

りにくらきにやあらん、またわが歌をみづから板にゑりつくるをひがわざなりとせばわが歌を人にかゝするもわろしといはんか、かの京極中納言の拾遺愚草を大炊助親行にあつらへかゝせられたる事もあるにはあらずや書うつして傳ふるも板にゑりて傳ふるもなにのことなるけぢめかあるべき、かゝる事はたよりよきかたにこそしたがふべけれ、たとへは書籍といふものいにしへは巻物なりしを冊などいふもの出來てよりは冊子のたよりよきに従ふがごとし、もし書うつすがいにしへなれば印板を用ふべからずといはゞ冊子をもやめて巻物とのみなすべきやいかでさるよしあらん又名をもとむる事はもろこしにても大和にてもこゝろざしある人は誰もさるならひにて其骨はいまだ土の下にくちざらんほどにはやく其名の世にうせゆきなん事はいと口をしき事に古の人もいへりけり、いにしへの歌にますらをは名をしたつべしともいひ、聖のをしへにも名を後の世にのこす事を親にかうあるをはりなりとも見えたれば名をもとむとてとがむるはいと心得ず、むかしの歌人の秀歌をよみ得ん事をいのちにかへて神にいのりよき人にほめられたる我歌を錦の袋に入れて寶としもたるなどのたぐひの事おほくものに見えたるも皆ふかく歌に執するにて其ふかく執するは皆名のためにこそありけれ、かゝれば今の世にても歌にふかからん人の吾歌の今の世



にも廣まり後の世にも傳はらん事をおもふはとがあるまじきにや、よみとよむ歌を心ともせずしてはふらしやらん事は此道執する人の本意にはあらざるべし、さて世をのがれ山にかくれなどして塵にそまぬ心より名の人にしられん事をいとふを高きみさを也とするためしもあれど、それは歌人などのうへにあづかりたる事ならねば引いでいふべくもあらずかし、そもくおのがおもふにはすべてある人の難しいへる事はうけがたくこそありけれといへば、清よるこびてさりけりく、かくてこそ世の人のあなづりをもふせぎつべけれとて此事をしるさん事をもとむればやがて筆とりて物にかきつく

享和のみとせさつき吉井清がもとめによりてしるす

春 海

宇合稱呼考

藤原の宇合を續日本紀の舊點にノキアヒとよみ、水鏡にウカフとよみたり水鏡印本に宇合と字に書てウカフと點あり、作者のかくよみたるか又印行の時後人のつけたるかつまびらかならず 加茂翁の萬葉考にはこれを改てウマカヒとよまれたり、しかるを或人は猶たゞしからずとてかの常の字音のまゝにウカフとよむをよしといへり今くはしく考るに

ウマカヒとよむを正しとすべし此宇合を又馬養とも書たり名の文字をさまざまに書事は古の常なれば更にうたがふべき事にもあらず續日本紀卷七靈龜二年八月癸亥正六位下藤原朝臣馬養爲副使遣唐の同月己巳授正六位下藤原朝臣馬養從五位下、卷八養老三年正月壬寅授云々正五位下藤原朝臣馬養並正五位上同年七月庚子常陸國守正五位上藤原朝臣宇合管安房上總下總三國又同五年正月壬子授云云正五位下藤原朝臣馬養並正六位上、卷九神龜元年四月丙申以式部卿正四位上、卷九藤原朝臣宇合爲持節大將軍とありて此後は皆宇合とのみ書たり、かく兩様に名を書たれば別人のやうに見ゆれど位階を賜はりしついでをもて見れば同人なる事明らかかりしかる上に國史の例にて凡五位以上の位階を賜はりし事はかならず載せ又五位以上の人の卒したるは必記す事なり是を同性別人とせば馬養の方に卒をしるせし文もなく又宇合の方に正六位下を始て載べきやうもなし、ますく別人ならぬ事あきらかなり、近き頃水戸にて撰ばれたる常陸國志に藤原馬養訓宇合とあるは此記中に兩様に書たるが同人なる事を詳にせし事は得たれどたゞ馬養訓宇合とのみあるは常の字音のまゝにウカフとよむ事とせるならんか、さらば猶あやまれり、さてノキアヒとよみたるは後人のみだりにせし點にていとことわりもなき事なればいふにもたらず、ウカフといふべから



ぬよしは馬はマとのみ略しいふ事は古語の常なれどウとのみいへる事はなき事也又紀守に牛養猪  
 養犬養鳥養などいふ名はありこれ皆養をばカヒとこそよむべけれカフとはいふべからず、カフと  
 いひては詞もおりぬねば名のとなくともなしがたし、こをウマカヒとよまるゝゆゑは字をウマと  
 用ひたるは古の字音の用さまにかゝる類あり、字は上聲の字なればウ、と引たる音なりよりて下  
 の字をマと轉用しものなり、ウマをマと轉用せしは紀中に改大倭爲大養徳といふ事見え和名抄に  
 安藝國賀茂郡養訓也方とあるなどウと引たるをマと用たるおなじ例なり、かつ古は字音の引くこ  
 ろをば吾國のことばの通ふ例にならひて用しことありと見えたり、こは例多くありことしげけれ  
 ば今こゝにいはずウとマと吾國の詞のかよふことはオハシマスをおハサウスといひタマハルを  
 タウヘルといふ類にてしるべし又合をカヒと用たるは合は入聲の字なれば韻を波比不閉保に廣く  
 用る事古の常なり國郡の名などにその例多くあり合をカヒといへる類をいはば和名抄に播磨國揖  
 保伊比薩摩國給黎岐比とある是なり揖も給も入聲の字にてイフをイヒ、キフをキヒと用たるなり、  
 さて合もカフをカヒと用たること明らかし、かく古の字音の用さまをくはしく考へみればウマカ  
 ヒとよまるゝ事なにのうたがふべき事もあらざるなりいかでたゞしからずとはいひけるならん

紀中馬養といふ名の人多し文忌寸馬養小野朝臣馬養佐伯宿禰馬養粟田朝臣馬養などみなウマカ  
 ヒとよむべきなり

寛政三年卯月一日

春海しるす

舟路のすさみ

四月十八日橋ぬしにいざなはれて香取うな上のあたりとひ見んとていでたつ、あひともなふ人す  
 べて三人すさひとりをぐしたり十九日鎌がやの宿をたちて木おろしよりこきくだりて其夜神崎に  
 舟をとどむ

かまがやの野にて鹿のむれ行を見て

眞秋原またうらわかし行鹿のむねわくばかりいつかなりけん

舟のうちにて

風をいたみ波立さはく雨の夜によるべもしらぬとねの川ふね

廿日神崎より佐原の永澤躬國がもとにいたりこゝに三日やどれり

躬國かもとにて題をわかちて、くひな



おのづからるせきをもるゝ澤水の聲にこたへて鳴くひなかな  
さうひ

春のいろは思ひ忘れし夏蔭に錦を見る花その花

としへてあへる

年月におもひわたりし心をはまつなみたこそしらせそめぬれ

馬にのりたる人ほとゝぎすを聞く

郭公鳴音たどりて有明の月毛の駒にまかせ來にけり

みくにがもとにてよもすがら人々と物語りして

もろともに家路わすれてかたる夜は草の枕と何かおもはん

廿三日みくにがもとをいでゝをみかはより舟にのりてその夜銚子の浦につきぬ寺井節之がもとに  
やどりこゝに六日七日ありてこゝかしこゆきかひす

飯沼の岡にて海つらを見て

うながみや沖つやしほち雲消て浦わの千舟朝ひらきせり

雪とちり雲とみだれてよせ來つゝ磯もとゆする沖つ白波

節之がもとにて題を分ちて、夏獵

立まよふをしかの角のつかのまの命あらそふみかり野のはら

なでしこの花の咲初たるを

かずくも咲そめしより常夏のにははん花は朝かけにみん

寺井田護が家にて

夏かりのさちある宿とみゆる哉いく薬をも世々に傳へて

こは薬をあきなふ家なればかくいへり

寶満寺にて帯を

かりそめにとけし花田の帯もうし結ひもあへぬ契りとおもへば

信太政慶がもとを問けるに歌よめとありければよめる

松かげにねはふかつらのむへしこそ千世のしめたる宿には有けれ

こは庭に大きなる松ありてそのもとに郁子のはひかゝりたればかくいへり



節之かもとを明日いてたゝんとするに伊能美之が許より  
故里とおもへば同じ武藏野の草葉の露をあはれともみよ  
返し

今はとて直わかるともむさし野の草のゆかりを忘れましやは

この美之は江戸の人にて今は香取にすめるが此ころ海上に來りぬしかはかくいひおこせしな  
り

廿九日節之がもとより舟よそひて日くるゝころ鹿島にいたりぬ五月一日鹿島よりこぎいでゝ二日  
木おろしにつくこゝよりくがぢをかへれり

鹿島の御社にて

あられふるかしまが崎にいひ杉いは出そめしは神の御世かも

木おろしにてほとゝぎすの鳴をきゝて

故里やなれも戀しきほとゝぎすかへれどおのが名にたてゝなく

寶曆六年六月廿二日葛飾の別業にて會しける時の當座のうた

立春霞

枝直

いづる日の影もくもらぬあさみどり春のたつ名は霞みなりけり  
此句をのぞかはや

田若菜

常樹

つくばねのすそ輪の田に春たちて雪まの若菜けふやつむらん  
水なごころを似つかり

柳隔水

公庸

落たきちながるゝ河しなかりせばよりて見てまし青柳のいと  
此下句は人のものなり

濱歸雁

常樹

秋ならでこぬみの濱の春の日にしはしやすらへかへるかり金  
此句なくはよからんひすぐしたり

松上藤

枝直

萬葉になみ木さいひ人の名に並松はあれど此歌にはいかしかりてもなたらかにいふべき事なごがなからん  
なみ松の枝よりえだにはふ藤は幾千世しめて花のさくらん

路卯花

維寧

わくらははにとめくる宿のうの花をこのもかのもとに道まどふなり  
ふさいてたり

聞郭公

常樹



峯かしこたてくるはた人のものなりにあふる松はちとせのこゝちして山ほとゝぎす一聲ぞきく

水郷 橘

秀倉

たはなを井しをよむはたし古今集の一首により萬葉なごにはさる事なし今はあまりにいひふりてつなく聞ゆなほむかしならてもありなん  
舟とめてむかしとはゝやかのみゆる入江の里にほふたち花

夏草 滋

公庸

野べみれば夏草高く成にけりわけ行人や道たどるらし

五月 雨

千蔭

なべて世のものおもふ人の上までも空にしらるゝさみだれの頃

晚涼 納

常樹

ゆふつくるかげろふ庭の涼しきに月までいでゝゆかはゆかなん此句なほあるべし

外山 月

枝直

宿ちかきとやまの松をしるしにてまたれし方に月は出にけり

風告 秋

春道

いとはやも秋はたちぬと世此句なくもかなにつけてけさしも袖にかよふ秋風

秋夕 露

枝直

萩の葉に秋風すさむ夕ぐれもこけの筵もごよりのことなりの露はくだけず

叢 端 虫

公庸

淺茅原こぼるゝ露を此ころのなみだにかりて虫アミあるべきをいかてのさいひけんのなくらん

河 邊 霧

常樹

秋さればすみだ川邊をすみぞめのゆふべのきりのたち聞くるしぞかくせる

嶺 紅 葉

公庸

此句ありては打はれてこいふべからず  
たえくに峯の朝ぎりうちはれて色そふ木々の黄葉をそみる

湊 千 鳥

公庸

みなと江におひてまつまのかぢ枕ねざめさむけくちどり鳴なり下よわし

網 代 木

秀倉

ものゝふの宇治の網代木夜を寒此下句既に有しにみいざよふ波ぞまつ氷ける

曉 時 雨

公庸



此三句用なし下さいこさなり  
明くれの空かとみればおとづれてそとの楢にしぐれふるなり

庭上雪

千蔭

我宿の花もみぢもなき時はもよよりなりひかりとたのむ庭の白雪

歳暮戀

常樹

ふたゆかぬ年の終をうつせみの身もたな此歌にいふべき詞にあらずしらすいそぎくらしつ

且見戀

枝直

吹風にうき雲まよふ夕つゝの見えみえつすみ物なほあるへしおもへどや

忍逢戀

常樹

わすれても人にやつけむ人しれず袖かへてぬる夜はのうれしさ句ごもを上下なきにけはなたらかにもなるへきか

惜別戀

千蔭

あふ事のうれしかりしも時のまのあかぬわかれになほあるへしわすればてゝき

恨絶戀

常樹

いまよりはなにかわたらんあすか川かはるふちせは君がまにく

傳聞戀

春道

みしま江や玉江におふるたてるなるへしあしのほのほの聞しよりえこそ忘れぬ

立名戀

秀倉

あはずして名にやはたてる今更にわりなく此句をいひのべて終の句をのぞくべしわふるひとの心か

稀問戀

春道

わきも子が手にまきもたる白玉のたま〜にだもとふぞうれしき

寢覺戀

枝直

たのめてし心かはると見し夢のさめてうれしきかねはならでも有なんあかつきの空

山家煙

枝直

松の戸はたゞ松の戸なり後の世からの字によりて松の生たてる門をさすはいかぞや源氏にも誤れりさらば真木の戸杉の戸を何ぞかいはん  
松の戸もさする隣のありとしもふたすち三すぢたてる煙に  
此詞人ないひふりたり

田家鳥

常樹

ひたはへてもりし山田をけふ見れば人もいさはぬしきぞたつなる此詞いまだ聞なれず

霧中關

秀倉



東路の清見が關をこゆる日は浪のしらゆふたむけにぞかる

寄世祝

春道

君が代にあへるをたれかよろこびの聲ぞあまねき遠つ國まで

此あげつろひは加茂の大人の書くはへられたるなり此時の歌猶あまたありしがちりうせてこれのみのこれり

春海

天字讀法考

古事記上卷に天地初發之時於高天原成神名天之御中主神といへる下に訓高下天云阿麻下效此といひ又次生伊伎島亦名謂天比登都柱の下に訓天如天といひまた次生女島亦名謂天一根の下に訓天如天といひまた娶天知迦流美豆比賣の下に訓天如天とあり今考ふるに訓高下天云阿麻といへるは始に天地とある天の字はアメと讀べきことのあきらかなればそのことわりをいはで高天原の天字に始めて阿麻と云といふ事を注して讀法をしらせたるを、さて下效此といへるはこれより下の文の天之御中主を始めて天といふ字をそひたる神の名國の名物の名など皆アマと讀べき例をこゝにてことわれる也さて訓天如天とあるは天比登都柱天一根天知迦流美豆比賣の三つは他とはこと

にて是よりはアメと讀べき名なるが始に下效此とことわりたればこゝに讀法の別なるよしをいはでは是もアマノとよむべきに疑ひあればことさらに讀天如天といふ事を注せるを、さて訓天如天とのみいふことは訓天如天地之天といふべきを略して如天とのみいひてしらせたるなりかゝる文法は漢文の上に常にある事なればその字法にて書るものゝ注に某字如字などあるも此とおなじこゝろなり、アメといふは天の本語にてアマといふ字は音便なり、一言に天とのみいふ時はアマといふことはなきことなれば如天といひてアメとよむべき事をしらせたるなり、このほかに天神などあるは神の名にもあらず熟語にもあらねばアマとよむべからぬ事明らかなれば更に讀法を注せざる事始の天地と同じこれによれば神の名、國の名、物の名の天字のそひたるをば皆アマノと讀が古のとなへなる事しるし、さてこれに證おほくあり、神代紀に天吉葛此云阿麻能與佐圖羅といひまた天探女此云阿摩能佐愚謎といひまた天磐座此云阿麻能以籛矩羅といへるなどあるをみれば、此類皆アマノと唱ふる事押してしるべし、又延喜天曆の頃よりこなたの歌どもに、アマノカクヤマ、アマノイハフネ、アマノウキハシなどよめる歌多かれど、アメノといへる事は絶て見えす、しかればアマノといふことはいにしへよりさだまりたる唱へとおほゆ、又紀の訓點に天地



天神などある外はすべて皆アマノと訓あり、これもいにしへの讀法のつたはりしものなるべし、紀の訓は後人の讀の交りたる所もあれど大かたは古訓のつたはりしものにて古人も既に古語の證にも引り、これらは後よりみだりにあらたむべき事にあらず、かつより所となすべきなり、またアマノハコロモ、アマノハシタテ、アマノナカ、ハなどいへるは後にいひ出たる詞ながらおなじ語勢なるをもおもふべし、今くはしくその語格を考るにすべて神の名、國の名、物の名などの下詞長くして體の語なるには上にアマノとの詞をそへていふ事定りたる語勢と見えたり、すなはちアマノカクヤマ、アマノウキハシ、アマノイハフネ、アマノ某の神などいふ是れ、またノの詞をはぶく時はアマとはいはでアメといふ事と見ゆ、そはアメワカヒコをアマワカヒコとはいはず、又古の天皇の御名にアメトヨタカラ、アメナハラなどいふ類下の語體にてノの詞をそへぬは皆アメとのみいへり、又アマノタチカラヲノ神を日本紀竟宴歌にアメタチカラヲとよめり、これは詞のあるまゝに略してものなれば下體の詞にてノの詞をはぶく時はアマとはいはぬ格なる故にアメといひかへたるなり、此の格によりて上にいへる天比登都柱、天一根、天知迦流美豆比賣の歌も、アメと讀べきための注なればノの詞をそへずしてよむべきことをもしれ、またアマといひてノの詞をはぶけるは下多くは用の語なり、そは天照大神アマトフ、アマツ

タフ、アマサカル、アマカケル、アマキル、アマタラスなどいふ類是なり、また下體の語にても上にアマといひてノ詞をそへぬもあり、そは天雲天路などいふ是なり、これは下の詞みじかきまゝにノの詞をはぶきてもいはるゝと見ゆ又熟語にアメナニといふ時下に用の語あるはなし、そはアメトフ、アメツタフなどはいひがたければなり、アメキヨシ、アメタカシなどはいふべけれどさいふは熟語にはあらざるなり、およそアメといひアマといふたゞ語勢によりてかはるのみにて意にことなることはなし、されどさだまりたる例あればそれにたかひたるはあるまじきなり、しかるに中卷の歌に比佐迦多能阿米能迦具夜麻斗迦麻邇云々とあり、こはすべての例にもたがひ、かつこれのみにあめといふべきことわりも見えず、こはまたく米と末の文字の形似たれば誤りうつせしものにて是もそのもとはアマとありける事うたがふべくもあらず又かの萬葉集の中に天香山とあるも皆舊訓の如くアマノとよむを正しとすべきなり

舊説に如天とあるは如上の誤にて上とは訓高下天云阿麻とあるをさしていへるなりといへるはおだやかならずまづ三所までまさしく如天とあるを皆上の字の誤となさんこと強たるわざなり、かつ數章の後に如上とばかりいひては高下天云々の注をさしていふことゝは聞へがたし、そのうへ



かくいふ文字はなき事なり、また下效此とあるはすべてをさしていふ詞とおもはる高下天云々とあれば高天原といふ詞のみの注のやうにも聞ゆれど、これは高天原にのみかざる事にはあるべからず、かゝる注文の法は經傳などの注疏にあることなれば、その法にて書るものならんさてこれを如上と改めむとするゆゑは中卷の歌を證として天といふ字のそひしを皆アメとよみて高天原といへると且如天とある三所を如上と改てこれのみをアマとよまんとするなり今其説に従はゞ紀の自注にアマノイクハラ、アマノサクメなどあるをも此書にてはアメとよまではかなはぬやうなり、紀にてはアマノといひ此書にてはアメノとよまむ事いとことわりなし、またアマと讀むべき所にのみ注ありとせば天照大神とある下にもなどアマと唱ふべきよしを注せざるや、かつ紀をはじめていにしへにあまた例あるをすてゝたゞ一つある中卷の歌のみ證とせん事こゝろゆかぬ事なり、よりて舊説はあやまりたることしるれば今その説をあらため正してかく考へさだめつ

寛政の三とせの夏人々と古事記をよみ考へしついでにしるしぬ

歌に大和といふことを冠らせいふ事の考

わが國の歌を大和歌といふ事萬葉集には詩とならべいへる所にのみ倭歌倭詩など有て常はたゞ歌

とのみいひ(萬葉に長歌を賦といひ又短歌二を二絶など書る事もあり是はもと詩と同じものなれば心にまかせてかけるなり)續日本後紀三代實錄などにはかならず倭歌としるされたり、これより古今集をはじめて世々の撰集皆必和歌集といひさて下りての世には歌の詞にも大和歌やまこととの葉などよむ事常となりぬしかるを荷田在滿が説にわがくにの歌はたゞ歌とのみこそいふべけれ、そは漢の世にて漢詩といはず唐の世にて唐詩といはぬをもてなぞらふれば我國の人の口よりやまと歌といふはひがことなりといへり吾師も此説によりてひたふるに大和歌といふ事をきらひさけられたり、かくて近き頃古このめる人々たれも皆此説を守りてうたがふ人なし、げにも一わたりはことわりもさることのやうなれど今くはしく考るに必此説をよしともさだめがたきよしあり、先漢の世にて漢詩といはず唐の世にて唐詩といはざるはかしこにはこと國のこの葉などのたちまじれる事なかりしかばことのまざるべきやうなければ漢といひ唐といひて其もとわかちなさざるなり、もし我國にて大和歌から歌相ならびておこなはるゝたゞひの事あらましかばなかかしこにても其わかちをなさざらん今清國の人の書るものをみるに物ごとく滿漢といひてわかちをなせり見よまたく我國にて和漢といふにひとし、これこと國の事まじはりおこなはるゝ世に



てはいづこにてもさらではかなはぬことわりなり、さるをかならず漢の世にて漢詩といはず唐の世にて唐詩といはぬを例としてとおもへるはいたくなづめるわざになん、そもく天武天皇の御世に大津皇子はじめて詩賦を作り給へるよりほどなく其事世にさかりになりて詩をもて人の才を試みそれによりて及第などする事とさへなりておほやけわたくしもはらなす事となりしかば、これをばから歌といひわが國ぶりをば大和歌といはん事いとあたれる事なり（これは彼を尊みてもはらとなしかれをかたへとなして大和といひてわかつにはあらずたゞおのづからさらではまぎらはしきいきほひなればなり此詞一本にいとあたれることなりとある下に入り此にはまたいりたり此がたよく正しとす）さて古の詞に大和といふことを冠らせいふ類ひいとおほし琴笛錦舞のたぐひは神代よりあるものにてむねとわが國のものなれどから國のをもこゝにつたへて世にあまたあることゝなりしかば大和琴大和笛大和錦大和舞などいへり、又やまとなでしこ、やまとだましひ、やまとごゝろ、やまとさうなどいふ事あるもかしこのにまされじとていひたてたる事にあらずや、こはかれをたふとみてもはらとなしわれをかたへとなして大和といひてわかつにはあらず、たゞおのづからさらではまぎらはしきいきほひなればなり、かくくさぐさ大和といふ事を冠

らせいふ事あまたあるをひとり歌にのみ大和といふをとがめん事こそ心得ね、かならず大和と冠らせいふ事をひが事とせばすべて琴笛錦舞のたぐひをも皆大和といふ詞をのぞかん、いかでさるよしのあるべき、とまれ千とせにあまりていひなれたる事を今より改めんとするはをこなる業ならまし古キニ字イニナシ古きものをみるに源氏物語などには唐歌とならべいふ時にのみ大和歌といひて常はたゞ歌とのみいへり、こはもとよりことわりさる事にて論なし又大鏡などには唐歌とならべいはぬ時も大和歌といへる事もあり、こは一つの名となりしよりいふ事にて唐とならべいはでも大和琴大和錦などいふ類なり、これらはこのさまによりていづれをも學びてありぬべし、こゝにくしなこれをつむかたにおひてことあるべからず、又或人の説に、古今集の序に大和歌と書出したるはわろし、たゞ歌とのみいひいづべき事なりといへるはかへりてひがことなり、かの序は末に詩の文義をかりてことをのべさてかくの歌にもかくぞあるべきといへればかならず始には大和歌といふべきいきほひならずや（俊成三位の千載集序にやまとみこと歌と書たまへるはみことゝは御言のといふ意なるにやまた尊といふ意なるにや俊成口傳集に大和歌我秋津島の國戯れ遊なれば神の代より今に絶る事なしとあるによられたりとみゆ扱此口傳集に大和尊のとあるは大和尊歌はとありしを寫しあやまりし



なるべしさらではこの文義通じがたし）又かの在滿が歌論の書を名づくるに和歌といふことを  
きらひて國歌八論となづけたるはいみじきひがごとなり國歌などいはんはもろこし人などに對ひ  
てもものいはん時の詞なり、こは博士どもの詞に國語國字などいふを見て學びたるにや、そは今の  
世の博士どものくせにて常にもろこし人にむかひてもものいふやうなる口つきの多かるはわらふに  
たへる事なるを、いかでならひつべきことかは

寛政年後の七月十日あまり一日

## 美草の考

萬葉卷一額田王歌金野の美草刈葺云々、仙覺抄に此歌或はをはなかりふきとも、或はみくさかり  
ふきとも點之と見え、又元曆本にも、をはなとよめり又新勅撰にも此歌をのせてをはなかりふき  
と有、又今井似閑が代匠記の頭書に大嘗會式美草を仙覺點又水戸校本にははなと點せり、式等に  
よればさも有べしとゆみ、宣長が王緒琴に美草はをはなと訓べし貞觀儀式云々延喜式にも同く見  
ゆ、然れば必一種の草の名なり古へ薄を美草と書きならへるなるべしもし眞草の意ならんには式  
などに美草と美の字を假字に書きよしなしとあるは、またく似閑が説をとれるなりされど式な

どに美草と美字を假字に書きよしなしといへるはしからず、かゝる類の物の名などには假字書  
きなる類も有る事なり職員令に狹疊と有を義解に狹疊猶云疊とあるは狹は假字書きにてやまと詞  
にての發語也、又式に（此間欠字本のまゝ）などいふことも見ゆれば、みくさを美草と假字書に  
書べからずとはいひがたし、されば式的美草を必一種にてをばなの事なりとも定めがたし、考る  
に卷十にあきつ野の尾花刈ふき秋芽子の花をふかさぬ君かしりほに、卷八に波太須寸珠尾花さか  
ふき黒木もて作れる家は萬代までになどもありて、かり庵などふくには専ら尾花を用ひたる事と  
みゆればこの美草訓には彌久佐とよむべく其實は尾花の事なるべし、仙覺抄にも彌久佐といふ訓  
のかたをよしとして彌久佐は薄をいへる也といへる説よくかなひたり、しかれば乎波奈といふ訓  
もよしありといふべけれどはじめより乎波奈とよませんとて美草と書しにはあらず、さるべけれ  
ば猶文字のまゝに彌久佐とよむを正しとすべし、さて仙覽抄の一説にも水戸の本にも元曆の本に  
も乎波奈とあるは庵をふくには必尾花を用ふる事なれば其心をくみて乎波奈とはよめるものなり  
式などの頃より乎波奈を美草と書く事のありてそれによれるにはあらざるべし、さて式的美草は  
音にて訓べきにてうるはしき草といふ意にて廣く諸草をいふ事にもあらんか又はみくさと口に



いひなれたる名目にて常に唱へなれたるまゝに假字にしか書事にてもあらんか令に狹疊と書たるもいひなれたる名目なれば書る類なるべし、或人此式に見えたる美草を乎花なりといふを難じて大嘗會は十一月行はるゝ事なるに其頃薄は枯てあるまじければ美草を尾花とせん事いかがいひ又或人は尾花の枯たらん頃は何の草も皆枯てあるまじ、されば枯たる草の中にも尾花はきよらなるものなれば枯るゝ頃にもこれをと用ふる事も有べしといひ又或人は必枯ざらん草を用ひん事本ノマものならば冬まで枯ずしてのこらん草は山菅などなるべしともいひて、これをさまざまにいへるとかにかくに式に見えたる美草はいづれの草と定むべき證はなき事なり又卷八に草花と書て乎波奈と訓りと有は卷十にも草花を乎波奈とよめる所あり此草花と有につきて尾花は草の木にて専ら本ノマ、中ノ誤カ用ある草なれば草花とのみ書てそれと知らせたるものなりといふ説あれどいがとなり草の中に専らなる草なりとて草花とのみ書べき事はいかでかあらん又草の中にて尾花をのみ専らなるものといはんもことわりなし考るに卷八卷十に草花とあるは皆苧字の誤にて草字となれるなり文字の形いと近きにはあらずや又卷十に麻花と書たる所有も同じ類なるべきを思ふべし

莫囂圓隣考

萬葉卷一、幸手紀温泉之時類田王作歌、莫囂圓隣之大相工兄爪謁氣吾瀬子之射立爲兼五可新何本、此歌此集第一の難義にて文字のいたく誤れるなれば誰が説も皆そらにおしはかりいふにて、いづれをいづれとも定めがたければ一つをすてゝ一つをとるべきやうなし、かれ今諸家の説をことくく擧て其よしあしをいひ又おのがこの頃思ひ得たる説をも末にいふべしされど此歌の事にはしひごとは誰もまぬかれがたきわざになん

仙覺抄に訓を擧て眞名は載せず

ユフツキノアフキテトヒシワカセコカ

イタ、セルカネイツカアハナム

かくよみてさて抄にユフツキとは十三四日の夕の月なりイタ、セルカネといへるはイは發語の詞、よめる心は夕月の如くあふきてとひしわかせこが、立てやあらんいつかあはんとよそへよめるなり此は愚老が新點の歌のはじめの歌なり彼新點の歌百五十種侍るがなかに、これはくはしく釋を書くはへてける歌なり、くはしき旨を知らんとおもはん人は可爲披見彼釋也考るに仙覺抄が此歌の前釋今は傳らねば此文字をいかなる故にてしかよめるにかわかちがたけれ



ど其訓もいと調はねばよくよみ得たりとはおぼえず、くはしくは東方侶の辨あり下に擧ぐ契沖が代匠記に訓は仙覺がまゝにて釋していへらく、わがせこか妻をさしてのたまへり御供にいでたつ時いつのころかかへりなんやとわれをゆふ月にあふぎて見るとく思ひてとひし妹が今は歸るべき比と立まつらんにつか歸りてあひみなんとなり、いたゝすかのいは發語の詞なり、かねはかになり兼の字、此集音をも用たればいたゝせりけん<sup>本ノマ</sup>とよむがまさるべし、此歌の書やう難義にて心得有し、しひて第一の句を案ずるに莫は禁止の辭にて、なかれ、なれたゝなしともよめり、囂は左傳杜預注喧嘩也といへり堯の時老人ありて日出而起日入而息といひ又陶淵明が詩に日入群動息と作りされば陰氣に應じてくるれば靜になる心にて莫囂を夕とよめるか、圓隣とは十日過るころは月もやう／＼まどかに見ゆれば七八日はそれにちかずけばかくは書るにや、此集に女の歌に妾の字をわれとよめる、をとこの歌には書べからず、夕月ならでは圓隣とも書まじ、第二の句は書やうよみやうひたつらこゝろえず、新の字あふとよめるもまたいまだしからず一考るに此説仙覺が訓を守りてしひて釋したるにて、すべていとおさなし妻をわかせ子といふ事も例なく莫囂を夕とよむよしを釋したるもことにことわりなし圓隣を七八日の頃の月也といへるは仙覺

が十三四日の夕の月也といへるよりおもひよりたるにていみじきしごとなり

東方侶の僻案抄に仙覺が訓のまゝを擧て論じていはく、かくよみてより諸家の本皆此よみをつけて此訓の是非をいへる説も見えず、かの注釋抄仙覺に云ゆふつきとは十三四日の夕の月也此已下の説上に引出たれはこゝに略すとありしかれば此集の歌仙覺新點百五十二首の釋、別にかけりとしられたれども予いまだ彼釋を見ざれば可不を辨へがたし右の文字の上につきて右の訓點をつけられたるはさるゆるこそありつらめ、たとひ證訓訓義ありとても第一句より第二句のつゞきかくよみては歌といふものにてはなし夕月のあふぎてとひしとはつゞかぬ詞なり此句つゞくつゞかぬさかひは歌をしる人にあらざればいはれず後しる人わきまへしるべし、予が僻案の訓は此歌の文字相違あれば一定なしがたきによりて異字につきて異訓をもなしていまだ一訓に決せず本もし正本正字の古本を見らる事あらば其時一訓にきはむべし一考るに此説此論にいへるごとく此歌は文字も訓も考へあらためたる上ならではとくべきやうなし、

僻案抄に文字をも古本によりてあらためて考へよめる訓歌ありとて二つを擧だり其一つには、奠フク器國隣四字ノヤマヤツ一本大相七兄瓜湯二字キワカセコ射立爲兼五何新何木モカモト、ユフクレは夕暮也、ヤマヤツは



山谷也、イユキはイは發語の詞也ユキは行也、ワカは我之なり、セコは夫君をさす詞、古本の傍注に奉天武天皇歌也とあれば天武天皇をさしていふ、額田王は天武天皇の夫人なればわかせこかとはいへり、天武天皇皇子にてまします時此行幸の供奉し給へるなるべし本ノマより額田王都に留りて天皇へ奉れる歌と見えたり、イタタセリケンとはイは發語の詞タムセリケンは立せ給ふらんとおしはかりおもひやり給ふ意也、イツカシカモトとは古語に此句あり日本紀に見えたり、それは巖櫃之本なり、此句は巖石之本の義にてきびしき岩ほのもとなどに立やすらひ給ふらんとおもひやるをいふ、歌の意は山路はさらでだに越がたきにまして夕ぐれのみ山谷陰などの旅行はいとくろしかるべければ、はげしき岩ほのもとにもつかれて立やすらひ給ふらんと、いたはりてよみて奉れる歌と見えたり、此歌の文字をかくよむより所は左にしるしぬ、莫置圓隣之これを一古本に莫置國隣之とかきてナ、クリノと片かなを付たり、しかれば圓隣は國隣をあやまれるか國隣の二字はくれとよむべし、國はくとよむ例多し、隣はあはれとよむ字なれば下の一言をとりてレとよむべし、音も隣なれば音をかりては上をとり、訓をかりては下をとりていづれにてもレとよむべし、莫置の二字をユフとよむは一古本に莫を奠に作を見し也又古葉略要集に此歌の文字二字草に

して置を器に作りたり、よりて莫置は奠器をあやまれりとしりぬ、奠器なればユフと訓べし本朝故實神祭の具には必本綿あり木綿の義訓に奠器と書たるを夕の訓に用ふるは借訓なり、仙覺のユフとよめるも若此意か、故に奠器國隣之の字につきてユフクレノとよむ也、大相七兄これをヤマヤツとよむは大相は大なるすがたなれば山の義訓にかけるか、七兄は七歳の兄は八歳なればヤツの義にかけるか、これによりてヤツは谷の古語なれば山谷とす、瓜調氣をイユキとよむは一古本に瓜を瓜に作るを見てイとよむなり、瓜なればウリなりウリの約言はイなればなり、調氣をユキとよむは古葉略要集には調を湯に作りたり、よりて瓜湯氣の三字につきてイユキとよむなり、吾瀬子より下は音訓常用る字なればワカセコカイタ、セリケンイツカシカモトとよむには疑有べからねどしひていふにおよばず、今引く古葉略要集は見る人すくなかるべし此書はこの廿とせあまりのさき春日若宮神主大中臣祐宗朝臣やつかりがもともものまなびに來りしことあり、その比此集の事におよびて彼家に傳へし古葉略要集を祐宗朝臣もち來りて見せけりし時此集の文字のたがひども校合せしなり、古葉略要集に彼家に有べし

今考に莫置を古本によりて奠器と改めてユフとよめるは幣を奠器ともいふべければことわり有



り、憐をあはれとよむ字なれば下の一音をとりてレとよむべしとあるはいかゞ、レンの音なればレの假字也とはいふべし、訓は下をとるといふ定りは無きこと也、入をりといひ、おもひをもひといふなどの類あまたあれど、それは略語といふものにて下をとるといふにはあらず、あはれといふ詞をレとのみいふ事いかであらん、大相をヤマとせるは大きなすがたなれば山の義訓也とあれば猶しひごとなるべし、七兄をヤツとよめるはよし、されど七兄は七歳の兄は八歳なれば八の義にかけるかとあるは猶むつかし、八の兄は數は七の數より多ければ七兄は八也とすべし、かゝる類は万葉の葉ホノマ、三説カにあること也、たゞし山谷の意とせるはいかゞ谷をヤともヤツともいへど古歌には見えず、瓜をイとよむ事はウリの反イなれど猶いかゞ、湯氣をユキとよめるは氣を幾の音に用たる事日本紀には見ゆれど万葉には例なし、いたゞせりけん云々を岩ほの本につかれてやすらひ給ふらんといふ意と釋したるはいかゞ、せりけんにてはいかゞでさる意とはなるべき、いたゞすらんかなといひてこそさる意とはなるべけれ、さてイタタセリケンとはに契沖のよめる訓なり、イツカシカモトとよめるは東方侶のはじめてよみいでられしにて、これはうごくまじき訓なり、たゞしイツカシを巖石の事と釋したるは、いはとかしは玉かしはなどいふよりの事なるべけれどいかゞなり

れどいかゞなり

又僻按抄に今一つの考を載て、ユフキ三ツリノッラカキクレテこれより下は文字奠器國一本隣之大相虎瓜謁氣と訓も上に同じ 莫囂圓隣之これをユフキリノとよむは前にしるせる奠囂國隣を國隣としてよむ也奠器は前にいふが如し國隣として本ノモカをキリとよむはクニの約言キ也隣はとなりの下のりをとればなり凡皇國語にラリルレロの五音を上にいふことなし此五音假字を訓に書ときは皆下の音をとり用るならひなれば隣の字をリとよみ憐の字をレとよむなり、大相七兄瓜謁氣これをフラカキクレテとよむは前に大相七兄の字をヤマとよめどもソラともよむべし大相の義訓は山よりも天の訓其義まさるべきか、七兄瓜をカキとよむは古一本に七の字無き本もあり又七兄の二字を克と一字にかける古本をも見つれば克は虎の字が轉寫して七兄の二字になれるか、もし虎の字なれば虎瓜の二字はカキとよむべし義訓の借訓なり、謁氣の二字をクレとよむは謁氣は靄と通じ用て陰晦也といふ字注あれば謁氣はクラシともクレテともよむべし、下の句は前に前じ、上の句は訓義なれども意は前の歌にことならず、天武天皇に奉り給ふ歌にて湯の山の夕暮の旅行をいたはり山氣にかゝるべき事などおもひやり給ふ意なるべし、此前に僻案訓猶一つあれども上の句の文字いづれを正字とも決しがたければあまりにく



だくしくいはんもいかゞなればもらし、先二訓のみをかきつけぬ、かさねて異本異字を見る事  
あらば其時又いふべし、仙覺の新點と予が僻訓との是非は文字正しき古本を見る人辨へ給ふべ  
し」今考るに國隣をキリとよむはクニの約言キ也とあるは、紀に乾字を賦とよめる類なりとおも  
はれたるなるべし、されど集中にさる例見えねばいかゞなり、又隣はとなりの下のりをとるとい  
ひ、ラリルレロの詞の下に音をとり用ふるならひえなども皆ひが事也、さる例は無き事也、又大  
相をそらとよむも山とよむもともに物遠き訓にてうきたる事なり、又虎瓜をカキとよまむと有は  
集中に追馬をイソカの假字とし、喚鶏をツ、の假字とせる類なりとの事か、されどもツとツ、とは馬  
に鶏に限りたる詞にて動くまじければよし瓜をカキとよまん事は虎にかぎるべからず猫にて犬に  
てもおなじ事なるべければ、これは似たる事にはあれど猶うきたる訓なるべし、謂氣をクラシ、  
クレテなどは前後の詞によりてしかもよまじきにもあらず、又東萬侶の祕めて人にいはずりし  
説也とて考に載られて莫囂國一本隣之大相固兄國湯一本氣以下は上のごとし  
かくあり今略解もこれによれり

今考に本居宣長がいへらくキノクニノヤマコエテユケとよむ事いたく心得ず莫囂國隣をキノクニ  
と訓べき説もいとしひて聞ゆ、又紀の國へのみゆきに紀のくにの山越てゆけといふ事もあるまじ  
き事といへり、これはさることなり、又春海さきにおもへるは大相のみにてヤマとよまんはあ  
まりに物遠ければ大相土の三字にてヤマと訓んかとおもひ、又見作湯氣にてミツ、ユケならんか  
ともおもひつれど今思ふに猶しからじ、

本居宣長が考へよみたるは、カマヤ莫囂國一マノ霜シモ木キ兄エテ氏ウケ湯氣ウケガセ吾瀬子ウケガセ之射立ウケガセ爲兼ウケガセ五可ウケガセ新何本ウケガセ莫囂  
をカマと訓ゆゑは古へに人の物を制してあかまといへること多く見ゆ、それを今の世の俗意には  
やかましといへり然ればカマと計いひても囂きを制する詞なりけん、かれ莫囂とは書るなり、さ  
てかま山といふは神名帳に紀伊國名草郡籙山神社諸陵式同郡籙山墓見ゆ、神社も御墓もともに古  
の熊野路ちかき所に今もあり○國隣は山は隣トナリの國の堺なる物なればかくも書べし○霜を大相の二  
字に誤れり此幸は書紀を考るに十月中旬にて十一月までも彼國に留坐る趣なれば霜おくころ○  
木兄キエ氏ウケの木を七に氏を瓜に誤れり○吾瀬子ウケガセは天智天皇を指奉る此時皇太子にて供奉し給へること  
其趣見えたり書紀を考べし○爲兼ウケガセはスカネと訓べし幸の御供し給ひて此度いつかしが本に立給ふ  
べき事よとよみ給へるなり、セリケンと訓ては往時の事なれば物遠し○いつかしが本は即籙山神



社の嚴櫃之本なり、一首の意は此女王も太子に従ひて行給へるにて竈山に詣給はんとする日の朝など霜の深くおけるにつきてよみ給へるさまなり、かくては竈山に霜ふかくて嚴櫃が本に立給ひ霜のかたかるべければ吾背子がやすく立給ふべきためにしばし霜の消むをまちてゆけかしとなり」此考は寛政の七とせ宣長かもとよりあらたに考へ得たりいかゞあらんとて干蔭とおのがもとに見せにおこせたり、其ふしはともかうもこたへやらでやみたりしを今考へ見るにいとあたしからぬ事多し、莫囂をカマとよめる事いとしひたる業へ、かまびすしきを制止してあなかまとはいへどかまとのみはいかでいふべき、そはいかにといふに、あなといふは制止する意あるにこそあれ今の上にあなかまといふ詞は後の物語ぶみなどにのみ見えたる詞にて、ふるきものには見えず、またたどかまとのみいへる例は何の書にもなき事へ、俗言にやかましといふを同じ類ひえとして引たれど俗言のやかましといふもやといふに制止の意はこもれるなり、やは人もよびかけていふ詞にて、あなといふに同じ、國隣を山は隣の國の堺なるものなればといへるもたがへり、すべて國の堺は高き山大なる河などをもて堺を分たるものにて山のみにはあらず國堺をやまとよまば河をもよむべきにや、霜消てゆけば事もなきやうなれど深く味ひ見るに、これは古人の語氣にあ

らずたゞ四の句を六言となしたるはさる事なれど猶七言によまるべきをや、上に擧たる諸家の説ども皆讀かたきにくるしみて物遠き訓を思ひよりてあながちにことわりもなきよみざまをしてとかんとするは皆いたく強ごとなり、此歌は誤字あるによりてよみがたきにこそあれ此歌にかぎりにいたくむつかしき書ざまなりしにはあらざるべし、もし文字あやまらざらん本いできなましかば、かならずやすらかによまるべきにてこそあるべけれ、かれ今やすらかによまるべきよみざまをもて諸本の中につきてよしとおもふ文字を拾ひ、誤ならんとおもふ文字六つを改めて一字を補出てこゝろみに釋す、

奠器マサニ二字ト一本ト圖リ隣リ豆ミ相サ嘉カ兒コ衣ヒ湯ユ本ト氣ケ吾ワ瀨ガ子セ之コ射イ立リ爲ス兼カ五ネ百ズ可カ新シ何ガ本モト

圖は集中の假字に見えねど紀には止と津と兩音に用ひたり、此集は假字を用ふる事廣ければたま〜此字を用ひたりとせんもしひたるわざともいふべからず圓の字を一本國とあり又圓などもかけり今皆圖の誤とす○豆は草の手によりてまがひて之となりたりと見ゆれば豆の誤とす○美は畫のそこなはれて下の大のみのこれるにやとおぼゆ、すべて古書に畫多き文字の消たるがわづかにかたへの残りたるを其残りたる畫のみをうつしおく事ある事これ其たぐひえとして大は美の



滅畫とす○嘉はこれも畫のそなはれて上の上のこのれるにやとおぼゆれば土又七などあるを  
嘉の滅畫とす○兒は訓によりて胡の假字とす此字は集中に多く見えたる字にて兒を一本兕とある  
などことに形の近ければ兒の誤とす○衣は形の似たるより瓜となれるにやとおぼゆれば衣の誤と  
す○奠器は東萬侶山不とよまれたり又奴左ともよまるべければ今は奴左と訓めりこれはむづかし  
き訓にもあらずかし○圖隣豆は執てえ○美相嘉は美は發語にて相嘉は坂之紀の國にゆく山路をい  
ふ○兒衣湯氣は越往けえ○吾瀬子は宣長かいへる如く天智のいまだ太子にておはせし時に此行幸  
の御供なるを指すなるべし○射立爲兼は入立せ給ふらんといふえ集中に紀路にいたりたつまつち山  
などもあり○五百可新何本はあまたの櫃が本之其坂に櫃などたちならびてあらんあたりはことに  
かしこき坂路なるべければそこに入りたゝせ給ふらん時に手向し給へとえ、末句舊訓なれば嚴櫃  
とせるもさる事ながら上にいりたゝすと有れば猶五百櫃なるべく覺ゆ○一首の意は、ぬさをもた  
らして御坂をこえたまへかのゆつかしが本にいりたゝせ給はゞ其ぬさそにて手向とし給へと  
え、さて宣長は此女王も天智とともに行幸に従ひてゆき給へるならんといへれどさにはあらず女  
王は天智とともに行幸に従ひて行給はで都にのこりゐてよみたまへる御歌なるべし

萬葉第一  
三山歌考

高山は畝備を、しと耳梨と相あらそひきといふを舊説皆高山を女神とし畝備と耳梨を男神とせ  
り、今詳に考ふるにさにては語勢おだやかならず契沖が高山はといふは高山をばといふに同じと  
いへるもししごとなるべし、高山はとのみひて、をばといふ意に聞ゆべきよしなし、かつさる  
詞の例もなし、よし又をばといふ意を聞ゆるになしても下の語勢よくかなはず、此歌其争ひし古  
事のくはしく傳はらねば誰が考もおしはかりの説にて、ともかうもいひがちなる事なれど、しば  
らく試にいはゞこれは香山も畝備も耳梨もともに男神にて、あらそひし嬪は此三山の外に女神の  
有しなるべし、さて香山と畝備と嬪を争ひしが畝備のたけくをしき神なるまゝに耳梨と力をあ  
はせてたゝかひしなるべし、をしといふ詞さへ察アルカ本マ、ゆるにてもなければことより明らかならずか  
つ高山はといひいだしたるは専ら香山の上にはんとする語勢え、さて次は隔句にて香山は耳梨  
とともにうね火ををしき神とおもひかしくみて争ひしといふ意につゞくならん又短歌に高山と  
耳梨山とあひし時といへるも男女の逢ふ事にはあらで二神の寄あひてうねびとたゝかはんとはか  
りしをいふならん、さる事となせば阿菩大神の立て見にこしといふもよく聞ゆるやうえ、此歌よ



み給ひし時は此古語の世にしるき事なりつらんまゝにその婦の事はいはで相あらそふといふにて婦をあらそひしことをふくませ下にうつし本ノ節カそみもつまをといふにてその事を明せしへ、又播磨風土記に大和國畝火香山耳梨三山國鬪と書るを思ふに三山ともに相たゝかひしゆゑにかくは書しなり、舊説の如く香山を得てむために畝備耳梨の二山のたゝかひし事ならば別に書やうこそあらめ三山相鬪とは必かくまじき事なり、とてもかくても此三山のうちに男女をわかたんとするは風土記の文に合ねば従ひがたかるべし

同

紫のにほへる妹をとある歌の考

是は宣長が説甚おだやかなり、さて額田王をさして人妻とのたまひしは此時いまだ天武の夫人となり給はぬ時はしかのたまひしか誰妻とも定まらぬ人ながら我妻ならぬ人はつひには誰にても人の妻となるべきものなれば人妻ともいふべきか、しかいふ例ありや可考、天武紀今本に天皇初娶鏡王額田姫王生十市皇女とあるを水戸の古本には正しく鏡女王額田姫王とあれば女字の有事疑なし此女の字のなきにつきて異説といふはあしかりなん又集中に額田王鏡王女などあるをことごとくよせて其歌の訓なども考合せばまた思ひ得る事もあらんか未考

和學大概

和學といふ事にしへは別に一家の學ならで皆儒生のかね通じたる事也、弘仁承和の頃より世々に禁廷にて日本紀を講ぜられし事ありしに皆其時の宿儒博達の人に任ぜられし事にて別に和學を專業せし人有しといふ事を見えず中世堀川院の御時に大江匡房卿の和學得業生問答といへるもの有るを見れば和學といふ名目はさる頃よりやいひ始めし事ならん此匡房卿の比までは猶いにしへを失はざる事も有しを夫より後は干戈つねに動きて源平の亂うちつゞきたるより此かた和漢ともに學問の道みなすたれてこれを振興する人もなく只漸々におとろへ來りしを近世文明のころにいたりて一條禪閣絶倫の才學才カをばしゝかば古人の誤をもよく考正しその著述の書數十部に及べり、此公をこそ和學再興の人とは申べけれ、されど今よりみれば其學猶疎漏なる事ども多くいまだ全く和學の正しき筋をえ給ひしとはいひがたし、しかるに此百年あまりこなた治平久しく打つゞき萬の道日々にひらけ來りしまゝにおのづから英俊の士多く出來て和學の事大に聞けたり、その研究のいたれるはるかに古人にまされり今にしては和學の道遺憾あるまじくおもはる

我國の儒生はかならず我國の國史典故に通ぜずして叶はざる事なるを當世は學問の道草莽草字カにみあ



れば儒者皆曲藝の士の如くなりて、儒者の任はたゞ漢土の書に通ずるをおのれが業とのみ心得我國の事は其業の外の事のやうにおもひたるは學問の本意を失へるものなり、林春齋が諸生を教ふる五科のうち和學科をたてけるはこゝろある事なり、すべて儒生の業は經世治國の術なれば我國にありては古へよりの建國の大體と制度の沿革人情世態の變遷し來れる有さま萬の事をよくしらではいかでその學問の道のほどこすべきやうあらん、されば和學をばかならず要務となすべきなり凡和學に三科あり一人にて是をかねる事はいとかたき事也まづ尋常の人は其才のむきたらんかたいづれにても一科を専門の業とし餘の二科は其大體をかね通ずる事とすべし、是を強て盡くかねんとせば却て疎漏にして情細やかにいたりがたかるべし此三科をかね委しうせん事は其人によるべき、先第一に國史實錄の學を一科とす、次に律令典故の學を一科とす、次に古言を解釋するの學を一科とすさて國史實錄は古事記日本紀續日本紀日本後紀續日本後紀文德實錄三代實錄類聚國史日本紀略扶桑略記等を正史と定め(姓氏錄大職冠等の家傳の類皆正史に屬すべし) かたはら諸家の家記(李部王記九曆台記玉漏玉藥等の類百餘部あり)又水鏡大鏡今鏡世繼(今榮花物語と云此書は實錄也作物語の類にあらず) 増鏡續世繼愚管抄百鍊抄東鑑園大曆等の類又今昔物語宇治拾遺著聞集

十訓抄江談古事談續古事談の類(此種類の書猶あまたあり) みな史學に屬すべしさて古の類の書を讀て古今國郡山川制度品物の移り變り王臣の興廢貴賤の好尚等世に隨ひて異なるを詳にせん事を學ぶべし、しかれども古今典例の詳なるよしをしらねば史を讀て通じがたき事あり此ゆゑに律令典故の學を研究せずば有べからず先我國の律令式は其書全く唐の律令に式を學びうつしたる物にて此學をなす時は唐代の制度の書を參校してその詳なるよしをしるべし令をよまんには唐六典杜氏通典新舊唐土の諸志を以て相照すべし 唐の令式は今亡びて傳はらず さて又かれをうつさずして我國の風俗にしたがひて立たる筋の事あり、さる類は國史につきてよく我いにしへのさまを考へしりて後辨すべき事也令條の今の世に行はるゝ義解の本は養老の時の令にて今は倉庫醫疾の二篇亡たり此二篇の缺を補ひしるべきものは政事要略令集解等の書に其事散見せし事多く又其文をも引用せり後世に出たる官職秘抄百寮訓要などの類の書も皆此令をよむ助けとなすべく且世にしたがひし官位などの變改ある事をばこれらの書にて考べし律のいにしへは十二篇ありしものなりしを今はわづかに名例衛禁職制賊盜の四篇のみ残り、よりに今その全き事は知がたき事なれども後世明法家の學者の録しおける書に法曹至要裁判至要金玉掌中抄等の書あり、是みな律條全く存したる時に其



肝要の事を抄録せしものなれば其大概をばしらるべし又三代格政事要略等の書によりても律條のしらるべき事あり、さて唐律は今全篇存したれば是また比較に備べし後世鎌倉にて撰せられし貞永式目も全く律に本づきたる書なれば律學をなすもの、讀考べきものとす、式は今延喜式全く存したれば(弘仁貞觀の式は今亡びて傳はず世に弘仁式の闕本とて少々あれども疑はしきものなり格も三代の全書は亡びて類聚三代格の闕本のみ今のこれり)古の制度を詳に見るにたれり、此餘儀式新儀式侍中群要等の書存したれば詳に考る事を得べし、さて貞觀儀式と延喜式は事體や、異なる事も有、それより西宮記北山抄江家次第等皆その時世に隨て沿革あり、又公事節會の時の座席及宮殿等の制を考るに雲圖抄禁秘抄禁腋秘大槐秘抄拾芥抄等あり、地理の書は諸國の風土記みな亡びて只豊後出雲の二書のみ存したれば詳にしがたき事多し只今の郡郷の名は和名類聚抄にあげたれば其古名のみは考るべし、又器物調度の類を考べきは延喜式江家次第等の書によりてもしらるべき、類聚雜要吉部秘訓等の書には其圖式も多く出たれば詳に考得べし、裝束服玩の類は衣服令延喜式をはじめ雅亮假名裝束抄飾抄などより以下世々裝束の書甚多し且世に隨ひて變改一樣ならず、後世に及ては古の名目を誤り心得たる類も多ければ是又廣く古今を詳にすべきなり、さてこの國史實

録律令典故の學をなすにも吾國の古言に通せざればかなはざる事あり、先史學の始とすべき古事記の一書は全く和語を以て録せしものなれば古言をしらではいかでか通すべき、又日本紀は漢文を以てししたる書にはあれどそのもとは古事記の如く和語を以て録したる書をとりにて強て漢文となし、ものなれば其義理の漢文に改めがたき所にいたりては古言のまゝに和語をのせたるも多し、又漢字を以て譯したれど猶いにしへの語を失はざらんがために某々の字は此に何々といふなどの自注も多くあり(日本紀の注は作者の自注もあり又世々の私記も訓などの混入したるもあり、又後人の加へしと見ゆるもあり有識の人は自その分ちを知べし)且古事記日本紀の二書に古の歌を載たる事凡二百餘首あり此類みな古言をしらでは讀べからず、又延喜式に載たる祝詞歴史に出たる宣命の類みな吾國の古文也、其他官職衣服品物の瑣碎たるまでも皆古言の残りし事多し、よりにて我國の書を學ぶには古言をしらずしては有べからず此古言をしらんとするには古事記日本紀萬葉集祝詞宣命等をよく精細によむにあらすしてはしりがたし、しかのみならず後世の歌集日記物語の類をも廣く讀て古今を照らして廣く押ときは其義おのづから明なる物也さて古言に通じたる上にては古人の人情世態も格別に明らかにしらるゝ事あり、こゝにくらき時は徒に國史等をよむとも誤解常



に多くして其事實をとり失事有べし、されば是まで一科の專業の學とはなすなり我國の古書今も傳はれるものいとあまたあれど和學をこのむ人世に少きまゝに印行になりたる物いと少し、かくの如くにて歳月を経ば漸次に失ひ行て百年の後は多く亡ぬべし、いとなげかしき事なり、志ありて力あらむ人の是を刊行しおかば永代國の寶ともいふべし、其印行になき書いまことごとく舉るにたへずたゞ肝要なるもの一二をこゝに舉ぐ

類聚國史もとは二百卷有しもの也今は六拾餘卷存す

日本紀略原數詳ならず今二十卷残り

扶桑略記もとは三十卷ありしが今は十卷残り或人いふ梅尾の舊藏に此書三十卷の全本ありといへりいまだ其詳なる事をしらす

本朝世記もとの數詳ならず今四十卷ばかり有といふいまだ其書を見ず

日本後紀今存したる本は偽書なりといふ説あり今其書を見るに後人の偽作とも定めがたし古の日本後紀にはあらざるべけれど古人の古書を抄録せし物なる事疑なし類聚國史などの誤字にて讀にくき所など此書にて明らかなる事あればかならず傳ふべき書也

新國史日本史の引書目に載たり水戸には殘本の存したるもの有としらる世にたえてなき書なればその眞偽を詳にせず

以上皆正史にて必有用の書也ことに宇多醍醐の時世は記録いとまれなるを此日本紀略扶桑略記等の幸に存するによりて略時世を考へしらるゝ事あり此外にもろくの家傳雜記の類印行せし本マなき物いと多し又家記の類は李部王記に九曆等の書を始として百餘部あれど一も印行のものなし

令集解 律四篇 類聚三代格 貞觀儀式 新儀式 内裡式

内裡儀式 西宮抄 北山抄 政事要略 もと百三十卷ありしものなり今四十卷ばかり有

侍中群要 裁判至要 金玉掌中抄

以上みな古の典故を考べき書にてかならず失ふべからざる書なり此外朝野群載類聚雜要吉部祕訓等の類又雅亮裝束抄裝束飾抄の類の書一も印行のものなし、此外に古歌集古日記古物語等のいにしへを考るに益あるもの印行にならざる物數十部あり、此正史典故にあづかりて必闕べからざる書の印行本なきは昭代の闕典とやいはむ

火之夜藝速男神



古事記傳五五十四葉火之夜藝速男神、夜字は迦の誤ならむか云々○火之ヒノ炫カ毘古神、炫は迦賀と訓べ

し靈異記に炫カを加ヤケリ也計利と訓り字書にも耀光也とも火光也とも明也とも注せり然るを舊事紀に

によりて延嘉(佳の誤か)か燒字に改つるは非なり舊事紀は信じがたし火々燒彦とある

此紀諸本みな炫と作り又師は炫と用ひて本能氏理と訓れき此もいかゞ○火之ヒノ迦具カクツチノ土神迦具はカヒヤク赫と云

意其は迦賀とも迦藝とも迦具とも迦宜とも活て同言なり云々、さて右の三ノ名ヒノ之火之は皆肥能と

訓べき例也本能と訓は誤也凡て火と本と云は木を許といふと同格にて、木末木陰木立などの如く下に言を

聯ぬる時、火影ホカケ火中ホナカ火氣ホカキ火處ホトコロなど云中ツラに云を夾ても木葉木本木芽などの如く焰火氣など云、し

かるに此は其類にあらず火之と姑く切るゝが如にて下の言へ直に聯なるにあらねば、本と訓例には非ず、右

の格の外にたゞ火とのみあるをも本と訓は誤なり、又某火と下に付時も肥と訓例にて本と訓は誤なり、此等

の格をしらずして妄に本と云を古言と

世人のおもへる故に委く辨へおくなり

此説ども精く考へいひて言加ふべくもあらぬやうなれど猶疑ふべきよし有、今試にいはいはむまづ火

を保といふは木を古といふと同格なりとあるは甚當れる事と聞ゆれど、其火を保といひ木を古と

いふ語例を引合せたるに猶おもひ遣せる事ありて當らず、中に之を夾みて云に木葉木本木芽など

ある焰ホノホ火氣ホカキなど云と同じ格なるにのみよりて保の迦具などいひて之をそへて訓むは其類に非ざ

ればひが言也といふはしからず、古諺に木コ晚マシケ木ミ晚マシケ闇ヤミなどいふ事もありて此は保乃迦具保乃須會

利リなどいふ事にて、保乃迦具といふは火のかゞやくといふ義にて古の久禮といふは木のくらまる

義なれば全く同格なるをばなどかおもはざりけん、古の久禮といふ語あるからは保乃迦具とよま

んを誤也とはいひがたし、又火之と姑く切るゝが如くにて直に下へ聯なるにあらねば保乃とは訓

べからずして聯なるいふニ字併カ詞の體と用との異なるのみ也、木葉木芽は下へ聯なる詞體なり保乃迦具

保乃須會利は下へ聯なる詞用なり、さて體用とも之といふ詞を夾たるも、はさまざまも有と見え

て古書に正しく其證あり、神代紀訓註に火關降此云褒能須○曾院スルカ里、姓氏錄に富乃須佐利命など有を

しひて紀の能字姓氏錄の乃字は後人の誤にてそへたるならんとおもへるはいたくなづめり、我臆

説を立むとてそれに背けるは古書の文字を妄に誤字也としてしりぞけん事いと心得ず、さて火須

勢理命と有をば保須世利と訓べしといひ、此記には火之と之のそひたる名には火之某と皆之字あ

れば之字なきは皆直に火某と訓べしといへるはこれはさもあるべしさてこの火之某とも火某とも

あるは其義に深き差別あるにはあらず

大養徳國



この假字國史に所々に見ゆればかならず脱字にはあらざる事、是はたゞ養字をヤマの假字に用ひたるものとおもはる、養をヤの假字に用たる事は多くヤマの假字に用ひたる事はいまだ見あたらねど古の假字の用ひざまにはかゝる類あり、藤原宇合を馬養とも書たればウマカヒとよむべき事明なり、これは字は上聲の字にてウ、と引べき音なれば字をウマの假字に用ひたるものと見ゆ是をしばらくウの引聲をマとなしたる例とせんか、又申をカウともカハウとも、筑をツカともツカとも、色をシキともシカともつかひたる類は通音なれば論なき事なれど通音にもあらで早サウをサハ果カクをカホ郡クシをクリなどつかひたる事もありこれはいにしへの音便にてかく唱へたる事の有しと見ゆる也さて養をヤマとつかひたるも其類となすべきか猶例を廣く考へていふべからむかし、又考るに假字はことほりよき文字を入れんとて養徳の字を用たるとみゆる、奈良の朝のころは専ら唐ざまに文字をなす事のありつれば是もさる類なるべし、所の名などにもさる類みゆまた考ふるにウマとマと音便にて通ふ事我國の詞には有、タマハリをタウハリ、オハシマスをおハサフスなどもいへり又今の人伊勢の國の山田といふ地名をヤウタといへりこれらも音便のかよふ例となすべし

大分青馬マシノコマ

略解云大分青馬は只眞白の意也と、冠辭考にくはしくいはれたり、按るに大分青馬ひたをのこまとよまんか、ひたは神代紀に純男を江家にてひたをとて訓る意にてひたを大分とも書べし、和名抄豊後郡名大分伊多保と有もとおひたなるを、ひを延て保伊となるをもておほいたと唱へしならん、卷十六佐青サテ有公などいへる如くあをを略きてをとのみいふはつねなり

春海考るに和名の大分をおホイタとよめるはおホキタを音便にてイタといへる、キタは段の意にて分をもキタと訓るゑ

フハへの假字

枕草子そはへたる小舎人はらは、萬葉十三伊蘇婆比座與と有、伊は發語にて蘇婆比はそはへと同じ語なるべし此詞今の俗言にもいふ詞なり

まさか たゝか

萬葉十八さゆり花ゆりもあはむとおもへこそいまのまさかもうるはしみすれ、

宣長云、タ、カとマサカは大に異なり正香とかけるもタ、カと訓べしこれをマサカと訓よりまざれたり



春海考るにタ、カとマサカのカは助辭にて意なし、タ、マサと云詞に力をそへたる物なり、タ、は夢のタ、チタ、ニアフマテなどのタ、也マサはマサシニ知りて我ふたり寐し、又佛足石の歌にマサに見けんなどあるマサ也、タ、とマサは意甚近き詞なり、さて萬葉中の例を見るにタ、カはへたどりたる時いふ詞、マサカはまのあたりにいふ詞と見えたり、タ、カは其人のうはきの正説をいふ其人にあはん事をかねていふ時はタ、カといひてマサカといはず、まのあたり其人にあふ時はマサカといひてタ、カといはざる事と見ゆ、されどタ、とマサは意甚近くて同じやうなる詞なり、さる故にいにしへより正をタ、ともマサともよめる物なり、只タ、カ、マサカの詞ばかり用ひやう例異なるのみ之宣長が大に異えといへるは違へり、似て例異なる詞なりといふべし

多々良米

内膳式春菜料に多々良米賣花搗、衛門府風俗歌に多々良女の花と詠たり（延喜式内膳式の歌に石龍芦草也俗にタ、ラヒと云）新撰字鏡に莘を太々良女と注せり、因ておもふに式のタ、ラヒメはタ、ラメの誤なるべし其タ、ラメといへるは爛目の義也順抄に瞶タラメと註せり、瞶とは眼瞼のはれて眼涙出る病なりといへり凡て草に病の名をつけし事は舊例にあり（多々良女花眇眼を治す）龍膽草に溫病を治する效ある故に疫艸

といひ、敗醬に血眼を治するの能ある故に血眼艸といへり、されど何てふ名を索むるにつばらに釋せし書なし、但字鏡に莘の字に注せしかど莘は草のむらゝに生たる貌也、今案に俗にタ、ラヒといへる草あり、こは本草經に載る所の石龍芮なるべし（石龍芮綱目にあり）其主療をみるに明目の效あり、又我國の俗に突目といひて眼瞼の腫る病に此たゝらひの葉をとりて揉たゝらして再び熨し掛けて頂の後の風府といふ穴所へ張貼れば、其腫を理するえ、さればいにしへにタ、ラヒといへる草はまさしく今のタ、ラヒなるべし、さて漢藉に石龍芮味莘辛カとありこゝの俗にも田辛子などの唱へはそのかみ莘の字を借用するにや又漢藉に石龍芮を菜となしてくひし事詳に見えたり、我國の上古儉素を貴み給ひし御時にはかゝる種をも春菜のまうけとなしてくらひつべし内膳式すでに龍葵ユナズヒなどをも用ひたり

ふかすみ

順抄に石龍芮和名フカスミこの草彌生の比よりしてふけ田のうちにおひしげり其實のありさまはスミてふ樹の實にことならず、さればふけ田のすみといふ義なるべし、ふけは壘なり壘田天武紀にふけ田と訓すみは柘也今の俗に野菜山桑などもいへ抄に石龍芮一名地椹と見えたり、椹もまた桑の子の事



也、我御國のいにしへ此種に柘の稱をよみしも又この柘の字にすべいふならめ柘の義にや、されば清音なるべし今はなべてズミといへり是なん正しく今の横なまりにいへるたゝらひ也たゝらひのひはめの誤なり

つちはり

萬葉七わか宿におふるつちはり心ゆもおもはぬ人の衣にすらゆな、永年抄に今王孫といふ草のあれど葉も花も衣にするべきものならねばいにしへにいひける種とおもはれず其つちはりは野榛のいひなるべし、こは獨活をつちたら土梅の義也ぬたら野梅の義也といへるたぐひなるべし、凡ていにしへくさにしあるをつちてふことをかうふりたるその狀の似たる樹のありければ、これにむかへてかくはいへるなり、野といへるは是にてあらぬ物といふなめり、さて榛つに似つこらしき種をなんたづぬるに、今にありては詳ならず、また新撰字鏡に藥の字をツチハリと訓たり其義考る所なし

つかうまつる

これをつかふまつるとかくは誤なり、つかふつかへつかひなどいふ假字なれど、つかふまつるといひてはことわりをなさず、こはつかへまつるといふ詞を音便にてつかんまつるともいひ、又つかうまつるともいふなり、よりてかならず字の假字を用べきなり

たまうて たまうける

この假字行成卿の筆の歌合にをりてぞ見えてたまうてとあるにて、ことわりしられたり、たまふ、たまへ、たまひといふ假字なれど、たまふてとはいふべからず、是も上にいへるつかうまつると同じ類にて、たまひてといふを音便にてたまうてといへるなり、又たまうけるといふを物語などの今の本にたまうけるとかけるは誤なり、これもたまひけるを音便にてたまうけるといへるなり、此類行成卿歌合を證として字の假字を用ふべし、不の假字にては語のことわり聞えがたし、又おもひたまへといふを、おもふたまへともあるは、みづからの上にいふ詞なればことわりよし、此たまひ、たまふの格とはことなり

ねんころ ねもころ

物語文にねんごろといへるは、ねもころを音便にてねんごろと唱へいへるなり、さるを念比などいふ字を書て其字の義なりなどおもふはいふにもたらず、又古人の草の手のさまを見るに、もとんと今字體はなはだ近し、よりて後人の草の手をみたりへたるよりねんごろと書誤來りしならんともいへり、これはさることゝもおぼゆれど常にもいひなれたる詞にて物語文などにも多くある



詞なれば皆ねもころとのみ改むべうもなく、かつかく轉ずる事も詞の常なれば毛と牟とはもとよ  
り通音なれば音便となしてあらんかたおだやかなり

駿河植木

駿河の大城のうちに秋より冬かけて生ひしげり春より夏にいたりてちりはつる木ありといへり、  
かゝる類のものこと國にもありなんや書ひろく見たらん人に問ふべし

明阿法師墓

三井寺の子院淨光院にあり山岡氏の祖山岡道阿彌の墓の側にありて墓表に梅橋院子亮俊明居士と  
あり

をかめ湊

土佐の國土佐郡足代と云所に今は田になりてあり昔は入江ならんかとおもはるゝ所也催馬樂に朝  
倉やをめの湊と有は此所か、朝倉も同所のよし也土佐國人朝比奈某之木丸殿の神社あり其神に羽  
々神古事記傳に見ゆ

うつほ物語の次第

としかげ<sup>二</sup>藤原の君<sup>三</sup>たゞこそ<sup>四</sup>梅の花がさ<sup>五</sup>嵯峨院<sup>六</sup>まつりの使<sup>七</sup>吹上<sup>八</sup>吹上<sup>九</sup>菊の宴<sup>十</sup>きく  
の宴<sup>十一</sup>あてみや<sup>十二</sup>たつのむら鳥<sup>十三</sup>五藏びらき<sup>十四</sup>同<sup>十五</sup>同<sup>十六</sup>同<sup>十七</sup>同<sup>十八</sup>同<sup>十九</sup>國ゆつり<sup>二十</sup>同<sup>二十一</sup>同<sup>二十二</sup>同<sup>二十三</sup>  
三<sup>二十四</sup>同<sup>二十五</sup>同<sup>二十六</sup>同<sup>二十七</sup>同<sup>二十八</sup>同<sup>二十九</sup>同<sup>三十</sup>同<sup>三十一</sup>同<sup>三十二</sup>同<sup>三十三</sup>同<sup>三十四</sup>同<sup>三十五</sup>同<sup>三十六</sup>同<sup>三十七</sup>同<sup>三十八</sup>同<sup>三十九</sup>同<sup>四十</sup>同<sup>四十一</sup>同<sup>四十二</sup>同<sup>四十三</sup>同<sup>四十四</sup>同<sup>四十五</sup>同<sup>四十六</sup>同<sup>四十七</sup>同<sup>四十八</sup>同<sup>四十九</sup>同<sup>五十</sup>

これはある堂上の人の考拾ひし也誰とか其人を忘たり

木鮒

秩父の郡に、やみそといふ山あり、其谷あひなどの水もなき草むらに魚あり木ぶなといひて所の  
人はとりてくふとぞ、まのあたり見たるとて人のかたりける、されど水にすまぬものゝ尾ひれう  
ろこなどあらんことわりさらに有べうもおぼへず、こはいとおぼつかなき事ながら、そらごとは  
いはぬ人のかたりつれば、しばらくかいつくるなり

上林下若

東鑑に上林下若といふ事あり上林苑の意にて魚鳥の肉多き事、下若は酒の事なり、顔眞卿聯句、  
一宿同高會 幾人歸下若」一統志、浙江湖州府長興縣有若溪、南岸曰上若北岸曰下若工人取下箸  
水釀酒味極醇美」白樂天詩、勞將下若忘憂物吳興江城愛酒翁吳興記湖州吳興縣若溪南岸曰上若北



岸曰下若水美釀酒尤佳亦名曰上若長興縣即普吳興地」

みのゝ家つとの難

むかしたれかゝる櫻のたねをうゑてよし野を春の山となしけむ」たけありてすがたよろしけれど春の山となすといふことを心ゆかぬやうなり、春をむねとしめたる山なりといふ意なるべけれど、それを春の山となすとのみいひては俗意なるにやあらん、この歌にかゝるいひなしは見えず、おなじ類なる詞ながら春のものなどいはんはことわりも明らかにて、みやびたるなり、後の世にこの歌をめづる人の春の山となしけんといへるをおもしろく、めずらかなる事なりとおもへるはいかにぞや、明日もこん野路の玉川萩こえて色なる波に月やどりけり、「おもしろきけしきにいひつらねたれど、三の句いとみぎはの萩が枝をうちこえたる波をいふならめど詞いさゝかたはらず、二の句にていひきりたるもこゝろよからず、又いろなる波といふことえんなるにすぎていやしげえ、後の世の歌人此詞をうちやみまねびて、ともすれば色なる露あるは月もいろなるなどやうによめる歌の多きは、はらきたなきわざとやいはん、式子内親王、山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえゝかゝる雪の玉水」雪の玉水よからぬ詞なり、古きみやひ詞にくらぶればかゝるたぐ

ひの後の世にいひ出たる詞はいやしげにこそおぼゆれ、藤原家隆朝臣、谷河のうち出る波も聲たてつ鶯さけへはるの山風、「此歌この比のとりなしにて春海がよしとせぬ所なり、今こゝろみに此歌につきて此頃のくせある歌の古き歌に及ばぬよしをいはん、さて此歌は、谷風にとくるこほりのひまことに打出る波の春の初花、「花の香を風のたよりにたくへてぞ鶯さそふしるべにはやる」の歌を本歌にてよまれたれど、此歌は千載集に、攝政前右大臣の、さまゝの花をば宿にうつしうゑつ鹿の音さそへ野への秋風、「といふをとりてよまれたるやうにも見ゆ、されば時代の近ければおのづからに同じいひなしなるにも有べし、さて鹿の音さそへとよめるは、元輔朝臣の、秋の野の萩の錦を我やとの鹿の音ながら移してしがな、「といへる歌より出たるものゝ、今この二首の歌のおとりまさりをいひて新古今のころのくせある歌の、いにしへのおとれるをことわらん、谷川の歌は谷は鶯にもたよりあり波のこゑたつるも鶯にかけ合ありてはたらきたるとりなしなれど、春の山風に鶯をさそへといふ事は花の香を鶯をさそふしるべにやるといへることゝよく打あひたる事もあらぬを、谷といひ聲たつるといふ詞にて、もちあはせてはたらかせたるものにて實は詞よりおもひよりてとりつくるへる歌也、さまゝの花をばの花の歌は秋風に鹿の音さそへといふ



事はよく打あひたる事にて詞よりつくれる歌にはあらで心をよめる歌え、かゝれば谷川の歌にはまされるかたえ、されど鹿の音さそへなどいへるはおもしろきいなしなれど古きみやびころの大どかなる所はうせて、さかしだちたる口づきにて後の世のすがたえ、しかのねながらうつしてしがなといへるはまことにおほどかなるみやびかにていはんかたなくめでたし、されば又しかのねさそへといへるにはまされること遠し、餘寒、攝政、空の猶かすみもやらず風さえて雪けにくもる春のよの月」月はたらかずと或人のいひしはいかゞ、この歌は餘寒といふ題なれば月をかりてその餘寒の有さまをいへるなり、餘寒をむねとしてよむべき歌にて月かたはらなれば、はたらかしいはぬこそよくあらめ、さて月のかけ合のおのづからに有、前大僧正慈圓、天の原ふしの煙の春の色の霞になびくあけぼの、空」詞くだけていとわろき歌也、下の句めでたしといへるはいかゞ、けふりの霞になびくといふこともおかしからぬいひなしなり、家隆朝臣、梅の香に昔をとへば春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる、こひしき昔のことをかはらぬ梅が香にとへば、梅が香はこたへずして月ぞこたへがほなをこれをこたへはせずして其影の袖にうつるよとといはれたるは、いとくはしくとかれたるやうなれど、猶いかゞあらん、春海がおもふに、むかしをとへ

ばといへるは、梅が香の匂ふにつけてこの家をとひ来てこぞの事をおもひ出たる意なるべし、こたへぬかけといへるは、業平朝臣の歌に、月やあらぬといへるは昔の月かむかしの月にはあらぬかと、うたがひとひたる心のある句なれば、それをとへどこたへぬ月といふ事として、こたへぬ影とよまれるのみにて、とへばこたへぬとを、たゞ詞のかけ合によまれたるならむか、もしまことの梅にもとひ、月にもとふといふことゝるにてよまれたる物ならば、いとほかなる下手の手段といふべし、此歌はさは聞へぬやう也、寂蓮、葛城や高間の櫻咲にけり立田のおくにかゝる白雲、高間の櫻立田のおく二つのうちひとつは山といふ事ありたしといはれたれど、此歌は山といふことをいはぬをわざと一つのふしにしてよめるにはあらずや、攝政家にて詩歌を合せけるに水邊自秋涼といふことを百家朝臣この題のことをいはれて題自秋涼とは漢文にては涼自于秋と書事なれば、歌の題にさやうにかゝむは中々にいうならねば、かく書ならべりとあるはしひてたすけいはるゝ事にて受られず、これは詩歌の題なれば詩の題もかくありしなるべければ、歌のためにいうならんことをおもひてかくかけるにはあらず、すべて此ごろは文雅の事すたれにし世にて、人々は文字の上にとくとく、かくやうのことすらわきまへざりしなり、文字にて漢さま



にかくをいうならずとおもはゞかんなもてかゝむこそめやすけれ、すでにいにしへの人の家集どもにさる題おほく見えたり、からにも似つかず日本にもかなはぬ事をいう也とはいはん、慈圓大僧正、夏衣かたへ涼しくなりぬえ夜やふけぬらん行あひの空「ゆき合のそらといふこと」とことやうなる詞へ、この頃の人のかくやうにはじめていひ出たる詞はすべていやしげにこそ聞ゆれ、此詞などをみだりにつかはゞようせずばことわり聞えぬ事にもなりぬべし、鴨長明、秋風のいたりいたらぬ袖はあらしたゞ我からの露のゆふぐれ「いたりいたらぬ里はあらじといふをいひかへたるをおもしろき事におもひてよめるとは見ゆれど、袖はあらじといひては耳たつやうなり、袖には似つかはしからずといへるはさる事へ、露の夕ぐれといふ事この頃より常にいふ事なれどみやびかなら詞へ、式子内親王、それなから昔にもあらぬ秋風にいとゞながめをしづのをだまき」結句は昔を今になすよしもがな、の心をふくめたるには有べけれど、かくやうの事は上にいひてそれよりいひくだして、それをたとへとなしてこそ、ことわりよけれ、結句にかくいひとちめん事はことやうにてみやびかならず、古き歌には例なき事へ、式子内親王、ながめわひぬ秋より外の宿もかな野にも山にも月やすむらん」初句あいうえおの詞なく六言なるをめでたしといひて咎

めざるはいかに、攝政、深からぬ外山の庵のねざめたにさそな木のまの月はさびしき」深山の月といふ題を深山の事はいはで深からぬ外山のありさまをおもひやりたる心のみをいひて、さてその身は深山にありて月を見てしかおもへるころ明らかなり、かく題の心をまほにはいはでかたはらよりいひて題のころをしらせたるはおもしろきとりなしにて、此題詠の一の格なり、近き世の人のいたく題にまどはれてよむとはいとことへ、此歌とりなしはおもしろけれど一首の辭よからねばよき歌とはいひがたし、此歌を深山の月をおしはかりたることも、深山月といふ題にかくよみてはいかゞともいへるは、いたくおもひまどひたるわざへ、題もよくかなひて明らかにきこえる歌なるをや、寂蓮、月ぞ猶くもらぬ木の間を住吉の松をつくして秋風ぞ吹」松をつくして例のこのごろの口づきいやしげなり、長明、松島やしほくむあまの秋の月袖はものおもふならひのみかは」秋の袖秋の袂などいふ事此頃の辭にてよからぬ詞なり、攝政、雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月を見るかな」松にのこして例の此ごろのくせへ、おもしろきやうなるいひなしなれど、みやびかならず、行すゑは空もひとつの武藏野に草の原より出る月影」一首はめづらしきいひなしにてひとふしあれど、この句わろし、さはいへどかくいはではいひとりがた



かるべし、式子内親王、秋の色は籬にうとくなりゆけど手枕なるゝねやの月影」下の句辭手つゝに聞ゆるを下句めでたしといひしはいかが、定家朝臣、いづくにかこよひは宿をかり衣日もゆふぐれの峰の嵐に「辭つゞきめでたしといひたれど、あまりにいひかけの辭かさなりてうるさくきこゆ

## こと葉のしな

歌の詞に本の心をうしなひてもろこしの文字にちなみて辭を作りていひ出たる類ひあり、こはそのさま正しからぬ筋には見ゆれど、そもすでに古くいへるは一つの辭となり來れば今もまねばんなむなかるべし、又萬葉の訓を古く誤りとなへたと詞のこゝろいにしへとことに用ひ來れる類、別にひとつの詞といふべきあり、これもすでに古くいひなれたるはそれに從ひて有ねべし、學問の上にては其本意を正して誤たる後のひがことをば必ゆるしなくあらたむべき事なれど歌の詞にとり用ひんには、其詞だによく有、はやくいひなれたるを例となして從ひてあらんこそめやすべけれ以下本ノマ、ならめ、さはいへどよしあしのえらみは有べきえ、すべてさるたぐひの事花山一條の御時より上下カつかたなるはそれに從ひてあらまほしくぞおぼゆる、そは花山一條の御時より

上つがたなるはおのづからに詞のさまいやしければなり本をのみとりてうつろひ來りしいひなしをすてんとせば歌はよむべき詞せまくなりて、いひがたきことも多くいで來ぬべくや、もろこしの文字にちなみてわが國の詞の意にそむけるは、大伴の旅人卿の歌に、おほきひじり酒の名をひじりといひしなどあり、ひじりといふことは天皇の天津日嗣しろしめす事をさしてまうす詞にて、檜原の日知の宮などいはんより外はあだしことにいふべき詞ならず、もろこしのかしこき人をさしてひじりといはんことはあたらぬ事なりさるを旅人卿のしかよまれたるは其ころ漢文の上にて天皇をさしては聖といふ事常にて、其聖の字を訓てとなふる時天皇の御うへをまうす事なるにつきてひじりとよみたるが、ひさしくいひなれて聖の字のさだまりたる訓となり來ぬまゝに、やがて詞のこゝろをばとはすしばらく文字によりてかり用ひられたるえ、こは誤えといはゞ助けいふべきよしはなけれどかゝる類は詞をかりてうつろひていひなす例として有べきえ、さて後に法師をたふとみて、ひじとりいふも、うつろひていひな來れる詞なればさてありぬべし、又菅原のおとゞの母君の歌に、家の風とよまれたるあり、此家の風といふ事は我國の詞ながら唐の文字の上にて家の風家範などいふは風の字の意常とかはりて、我國の詞にて、いはゞ手ぶりと



か、ありさまとかいふべき意なりさて我國の詞にかぜといふ事は春風秋風などいふ風より外にことなる意にもちひたる事はさらになし、手ぶりなどいふ事をかぜといへることはたえてなき事と、さるをかく家の風とよまれたるはこれも我國の詞の心をばとはずしてよろこしの文字にちなみたるもの、是より世々の家の風といふことひとつの詞となれれば、今も家の風などよみいでむことはこともなし、されどこの詞あるにつきて手ぶりといふことをかぜともいふべしと心得て、あたし詞にみだりにつかはんはひがごとなるべし、風雅集の序に、あまの下のかぜをうけいにしへのかぜは残らずなど書給へるはこゝろゆかぬ事になむ、又は伊勢の御の歌に、玉すだれあくるもしらでとよめるより玉すだれといふこと常となる、これも我國のいにしへに玉もてすたれを作れる事はなき事なれども、もろこしの珠簾玉簾などいふ事のあるよりそをかりてこゝの詞となしたるいひなし、こは物をほめていふ詞に玉といふ事も常なれば必玉もて作れるをいふとて、ほめていへるなりとせんもかなひぬべし、伊勢の御の歌は長恨歌の繪をよめるなれば、かならずかしこに珠簾などいふをおもひよせたるものと見ゆ、此玉簾の事として見し玉だれのなどもよめり、又こは古歌に玉だれとあるを簾のこととおもひて誤りたるにもあるべし、されど是も詞の

わるからぬはずでに中比にしかよめる例のあるによりて、歌によりてはいひてもあらんか、又玉のうてなといふもはやくよりいへる詞にて、これももろこしの文字よりいひ來れるにて同じ類ひ、又玉のいらか玉のこの葉などいふも文字の上よりうつしたるいひなし、こはいと後の世の詞にて詞のさまもおとれり、されど歌によりていふまじきにもあらじかし、又貫之の歌に、うみ松とよめることあり、こはまさしくみるといふ詞のあるをおきて、かゝるもじのまゝにうみまつといへるはことやうなれど、そは海路にて子日の歌なればかへりてめづらかにこそ聞ゆれ、此歌より後うみ松とよめることと、これかれはやく時の歌にもみゆれど、今も歌によりてはみるとはいはで、うみ松といふかたゆゑあることも有ぬべし、又後の歌にかはらの松とよめる事ありこは瓦松といふは一種の苔の名なるを文字のまゝにいへるなり、これも全くうみ松の例なれば後のこととすつべき事にもあらず、そはかはらといひ松といふにて歌のおもむきをなす事あればなり、又龍の馬霜の花などいへるは全くからことばなれどさらにこともなく聞ゆるを、おりひめいしの竹などいへるはいと聞よからず、たなばたなどでいふみやびの詞のあるをおきて、さいひかへたりとて何のおかしきふしかあらん、たゞいやしげにこそ聞ゆれ、又大江の千里が歌に



鶯の谷より出るとよめるは、その事は毛詩に幽谷を出て喬木に遷るとあるをとりてよめるにて、鶯に鶯の字をあてゝかけることよりかしこの鶯の事になしてよめるへ、實は我國のうぐひすといふ鳥は深き谷などより出るものにはあらず野べちかきあたりの竹むら山かたつける里のやぶのうちなどに常にすむなり、かの野べちかく家居しをればといひ、竹ちかき夜床ねはせじなどいへるぞ、まことのうぐひすのありさまにはありける、されどこの千里の歌ありてより谷のふるすなどいひ、たゞちにたかきにうつるなどよむ事常となれり、かゝる事もすでにいひなれたる事になれば、からざまとて今あらたむべき事にはあらず、又忠岑が歌にちりにつけとやちりの身の、とよめるほまたく文字によりていへるへ、爾雅に塵は久世とあるによりて久しきにつけといふことへ、されど我國にてちりといふ詞に久しき詞はなき事へ、これはあまりにことさまなれどよみ人のすでにふるればことによりてまねぶまじきにもあらず、春をむかふるといふ事、からことめきたれど、おくりむかふなどもふるくいひけれ、よりむかふるとのみもいひなれたれば、今はあらたむべきにも詞ともおもほへず、又たつのあしたと惠慶法師の歌に見ゆるは、三會の曉の事にて龍華騎のことをたつとのみいへるは、あまりにことをはぶきたるいひなしなれど」又池のこゝ

ろといふことは池のなからの所をさしていふ事なり、これはもろこの語に湖心池心などあるよりいひならへるならむ、物の中らの所をこゝろといへるは、たなごゝろなどいふ詞もあれど池の心といふは、なほからもじよりうつれるやうにぞおもはるゝ、かゝるたぐひの事猶あまたあり、すべてはやくいひなれたることは例によりてまねばんになでふことかあらん、されど後の世にからことをうつせるにはいとことさまなる事も多ければ、こゝろしてよくえらぶべきへ、かの繪の事をいふとしてしろきを後になどよむ事近き世の歌に多くみゆこはいと心得ぬことなり、後素といふ文字は論語にいでたればいとけちかきことなれど古より世々の注釋にさまざまに此後素といふ事をときたれどたしかによる所ありてうごまじき説は見えす、もとより他書にも見えぬ事にて、たしかにはしりがたき事なるを、近き世の歌人其意をいかにとき得てか我國の詞となして歌にさへよみいるゝならん、いとかたはらいたきわざなり

詞の本の心とはことなることにうつろひていひなれたるは本、ふるさとといふ詞は萬葉などに見えたるは皆古き都をのみいへり、さるを古今の歌には故郷といふこと、から文字の心にもよめり、又源氏物語などにはむかしの人のすみかをも又我もとすめる家のことをも、むかしけさうし



たる人の家などをもいへり、こはいひく／＼てうつろひ來れるなれば、萬葉の例をのみとりて古今より後のいひなしを誤へとはすべからず、又おもひやるといふ詞は萬葉なるは遺悶などいふから文字の意にてこゝろをやるともありて想像といふ文字の心なるはなし、古今より後なるはみな想像の意にのみいへり、萬葉なるがしかりとて想像の意に用ふるを誤へとはいふべからず、こは二種の詞へ、又ながめといふ詞は源氏などより上なるは皆心に物をおもひて目をながうして（物をめてといふ詞の上に脱語あり今試に補はゞ「見る事にへいり夫より後なるは」かくやうの詞ありしなるや）物をめでゝ見る事にいひて月をながめ花をながむなどいへりこはおのづからうつろひ來しいひなしにて詞の意もさる事なればとがむべき事にもあらねど、たゞめづる意にのみいへて月をながむ花をながむなどいはんはこのましからぬやうへ、西行法師の歌にながむとて花にもいたくなれしかば、といへるはすこしおたしからぬやうにこそおぼゆれ、又よもぎむぐらなどいふは、たゞふるくは草の名にのみ、いへるを移ろひてよもぎむぐらとのみいひて、あれたる家の事にいひ習へり、こはそのもとは蓬葛満宅などいふ唐ことよりや出づらん、貫之の歌に春の來ることを八重葎にもさはらざりけりといへるは、其草の名をかりたるのみにて、たゞあれたる家

の事となしていへるなり、此歌を契沖法師がなんじてむぐらは萬の草のおなじくもえいでゝさはるといふばかりなるはやゝ春ふかくなりての事なるを是初春の心なればいかゞといへるはことわりあるやうなれど、そは歌の詞のいひなしといふ事をしらぬひがことえ、よもぎがもとむぐらの門などはいづこにてもいふべき詞なり、源氏蓬生の卷に霜月ばかりになりぬれば雪あられがちにて外にはゆきるまもあるを朝日夕日をふせぐよもぎむぐらのかげに深うもりてこしの白山おもひやらるゝ雪のうち云々、などいへるもあれたる宿の事を大かたによもぎむぐらのかげとはいへるなり、かゝるいひなしは古き歌にもなほ多くあり、またうつせみのといふ事は萬葉にうつせみともありて現の身をいふことえ、虚蟬など書る所あるもたゞかりたる文字にて、むしの蟬の事にいへるはさらになし、さるを古今の歌にはもはら蟬の事をしていひてそれよりして後うつせみのもぬけなどゝもいひて蟬脱の事にもいへり、考るにこははじめては萬葉の虚蟬のとあるなどをおもひて誤りてよりいひ出たるにもあらんかさ、れどはやく蟬の事にいひなれたればこは二種の詞となして、歌によりては古今よりこのかたのいひなしに従ひてあらんもとがむべからず、又古今の歌にやました風とよめる詞あり、こはそのもとは萬葉に山下風とかけるを文字のまゝによめる



よりいふ詞なるべし、萬葉なるはかならず山のあらしとよむべき事明らかなれど歌のうへにてはかへりてやました風といはんかたいうなれば、すつべき詞ともおぼえず、これもひとつの詞となして古今を本となしてありぬべし、又さゝかにといふ事は、古事記日本紀などの歌にては篠か根と心えむかた正しきやうえ、されど公望が私記に篠蟹といふ事とも見え、さてはやく人々しか心得たる事と見えて、古今の歌にはもはら蛛の事としていへり、今の歌にてはくもをさゝかにといはん事さらに論なかるべし、さゝかねといふこととなしていはん事はかへりてことやうなるべし、さて衣通姫の歌にくものおこなひとあるを、源氏に其詞をとりてくものふるまひといへり、これはおこなひとあるを誤りてよみたがへりたるにはあらず、かくとなへつたへたる事のいにしへ有しなり、さて日本紀などにおこなひとあれば衣通姫の歌はおこなひとあるかた正しきには論なく、ふるまひといふ詞はそのころの詞ならざる事もしるし、されど今この詞を歌によまむにはくものふるまひといはんかたいうなるやうなり、源氏を例としてしかいひてあらんもなむなかるべし、又ひぢかさ雨といふ事は萬葉にひさかたの雨とある歌を催馬樂にひちかさとうたひ誤れるなり、されどはやくより催馬樂の詞によりてひちかさといふ事を一つの詞となして、源氏などに

もしかいへり、これはその本は誤なれどもすでにひとつの詞となれる事古ければ今も催馬樂よりうけてよみいでんも難なからんか、歌のいひなしによりておもしろきふしも有ぬべき詞なればすつべからず、又すゑ摘花といふこと萬葉に見えたるは、うれつむ花とよむべきよし本居宣長はいへりことはことわりはさる事のやうなれど古今にも源氏にもすゑ摘花といひて詞もいふなれば今歌によみいれむには、すゑつむ花といひてありぬべし、うれつむ花は詞のさまいたくおとれり、又木がらしといふ事はふるき歌には秋のすゑにふく風をいへり、題詠のならひもはらとなりて冬ののみいふことゝなれりことはすでに天徳の歌合の判にも論見えたれば、はやくしか心得たる人も有なん、此詞などは後のならはしになつまで秋のうたによみいれんも、かへりて古意ありてをかしかりなん、又松の戸櫻戸などは古くいへるは皆その木もてつくれる板戸の事なり、さるを源氏に松の戸といへるは松の生立たるあたりより戸口をさしていへり、これは歌のとりなしにていへるにてかへりてをかきいひなし、古くより前にはぎの花あるあたりの戸を萩の戸といへる名はあれど、いにしへにたがへりてひがごとゝもいひがたし、これは二種の詞となして板戸の事となしても又おひ立たる木につきての名ともなして有べし、定家卿の櫻戸とよみ給へるも詞は萬葉の古



言にて心は源氏の松の戸を例にとりなしたまへるなれば、なんすべからず契沖が論は事をたゞさ  
んすに過たるやうなり又とほそは和名抄にも樞字をよみて戸びらとはことなる事しるし、されど  
古く戸びらの事をも大よそにとほそとよめる歌あり、こはいひ習ひ來てさほうつるへるなり、今  
もしかよまんになんなるべし、又萬葉に風流士とあるを古き訓にたはれをとよめり、こはみや  
びをとよまにかたおだやかなれど、たはれをといふ詞もはやくいひなれたる詞なればこそ古の人  
のさもよみつるならめ、されば今はれをといひてよくかなひたらんことにはさもいひつべし、  
萬葉なるがあたりぬ訓也とて此こと葉をばすつべからず 後にいひ出たるが、いみじき誤にてさ  
らにしたがひがたきは、あさもよしをあさもよひ、さくらをさくらあさなどいふはまねびがた  
きに論なし、また俊成卿の歌にまかちしけぬきとよみ給へるは詞もいとつたなくていたづらに萬  
葉をよみかへられたるゑ、また後の歌には必らずをすをこすといへることいみじきひがごとなる  
事證多し、又すくろのすゝきといふ事は堀川百首に基俊朝臣の歌に春山ををきのすくろとよまれ  
たるをうけたる誤なり、をきのをすくろは萬葉に春山の開乃乎爲黒にとあるを誤字なる事をもお  
もはで、をすくろとよみてあらぬ事をいひでたるゑ、こは爲黒は烏里の誤にてさきのをりとよ

まではかなはぬ歌ゑ、さてすくろといふ事物に見えたる詞ならねばさもよまんを一言説ともいふ  
べけれど、今はなき詞なるをや、又百首の一本にせきををすくろとあるも、開を關とありし本あ  
りてよみたがへたるにや、この一本にていよく萬葉をよみあやまれる事明らかゑ、さて百首は  
此一本にかたや本ならむ、せきとをきは、かんなのかたろいとちかし

上野の人町田清興の物語

吾妻郡にてまふしの事を土人いめといふとやともいへりしばにて四方をとりかこひて穴をあけて  
そこより鳥を射るなり

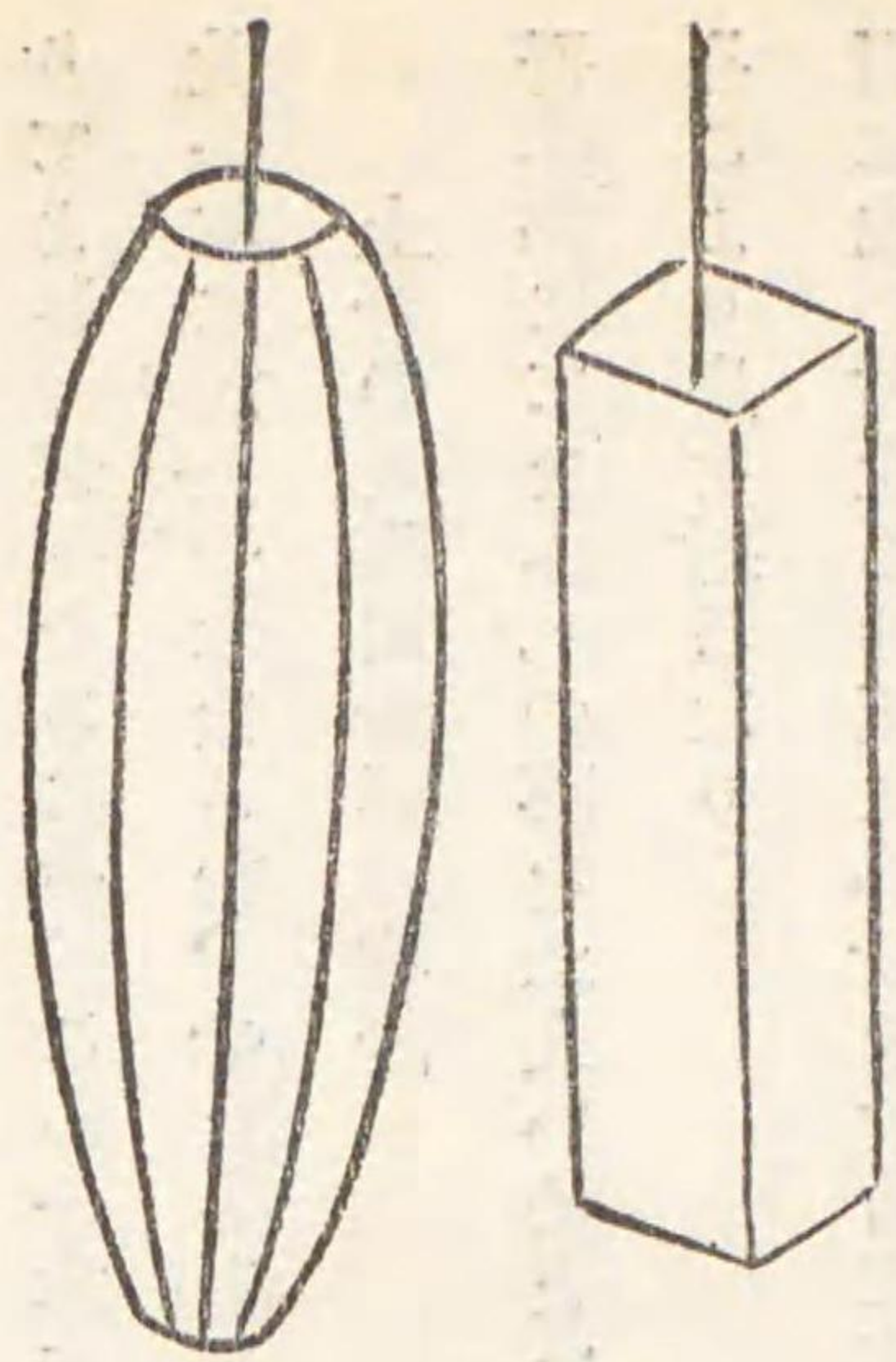
田に虫の付たる時田にかせきをもて出てまく事今にあり古語拾遺にある事なり  
はこむすめといふ事あり親の愛する娘をいふクロフといふ詞あり樹木の立茂りたる山をいふ萬葉  
四にカミツケクロホノネロと有これなるべし

地名の清水をきよみづとはよめども古語にきよ水をきよみづといへる詞はなし是は本たゞきよみ  
づといへる名のありしに清水の字をうめたるのみにて清水の義にはあらざるべし萬葉の御井の歌  
に清水とあるをきよみずとよめるはあやまりなり



金魚袋

寛政四年壬子五月七日三島自寛とともに住吉内記方へ行て賢聖障子を拜見す此度御吟味に付土佐將監方に杜如晦房玄齡馬周の三圖巨勢金岡の圖ありて献上す此三つは此度右の圖のまゝに寫せしよし其餘は此度新に圖を制してといへり、杜如晦金魚袋を佩ぶかたちして四角にて紐ながくさがれり、房玄齡は六角の金魚袋を佩ふ是は紐をみじかくしてつけたり



六角は右の如く上下ほそりて今京にて兒童のもてあそぶぶりくの形の如し二つとも紋なし、皆金泥にてぬれり負文龜は波の中の岩の上のりたる圖也甲は薄く赤きくまにて見たる時は黄なるやうに見ゆ圖はコンシヤウにぬりて有し龜の尾は常のみのかめの圖の如くなり豎一尺二三寸横一間ばかりのきぬなり賢聖障子の方は豎八尺許の

きぬ横は二尺ばかりもあらんか惣て三十二枚といへり

京都大通寺 尼寺 塔頭多聞院什物木村長門守書札

一筆令啓上候先以御疵痛如何和申候哉朝夕無心元存暮候御聞及も可被成候一圓不得寸暇以外之至奉存候城中之有様墓々敷體無御座兎角天下者家康と存候事に御座候昨夕も石川肥後守我等陣屋へ忍被參石川も我等同腹中に城中之詮議評判御母公之下知にて手前支配一圓承引無之候由尤に存候某事昨朝七つに下知不承嶋野へ罷出分際之働諸人驚目候兎角一日も早く打死と覺悟仕候貴所は昨今之籠城其上數ヶ所深手御負の間無油斷早々在所へ御引込御尤に存候誰とても嘲者有之間敷候我等儀者家康懇意の筋目故板倉伊賀方より度々内意申越候得共當君へ被附候所二心は士之非本意候聊面目も不存候得共人並に月日を送る無是非事に御座候然ば此香爐姉君へ御届可被下候扱此太刀は家康より我等十三之年元服爲祝儀給り候使者は本多平八口上家康之秘藏之大業物にて來國俊之由申來候我等數度之戰に此太刀にて一度も不覺を不得候依之大波と名付今日迄所持仕候得共貴所へ形見に進候隨分御秘藏可被成候一城之内に乍在一時も必閑に得御意候事も無之他人同然之様に殘念千萬之至に候嚙姉お照殿御恨可有候此段不私候宜御言分可被下候無是非事に候恐惶謹言

四月六日

木村長門守

猪飼野左馬介殿



御陣所

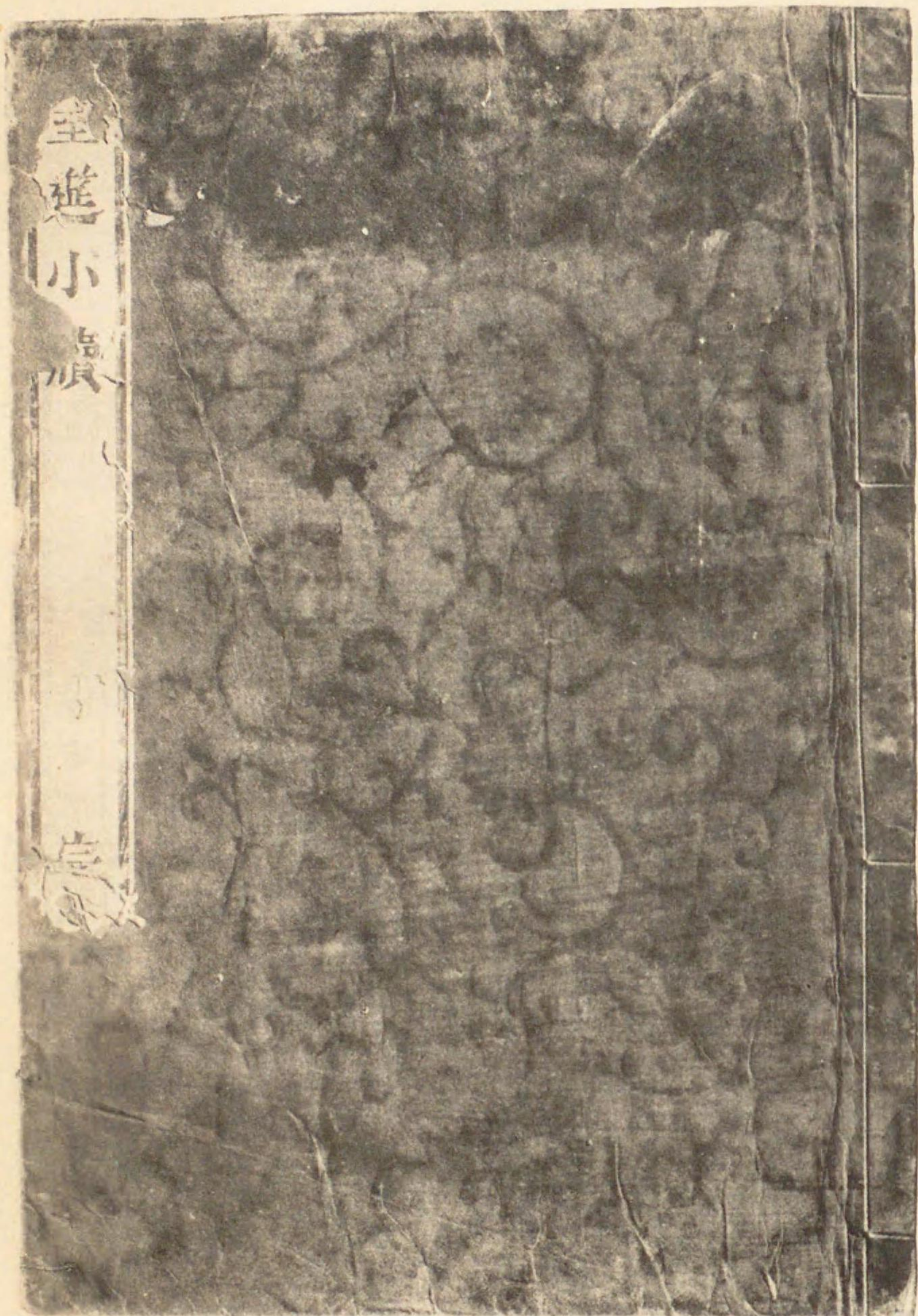
此織錦舎隨筆上下二卷は宮崎縣人五十嵐雅言がさるところよりかりいでたりとて見せられたるをいとまあるをり／＼筆をとりてつひにうつしをへぬ

明治十七年二月廿日

荻原嚴雄

右者以井上頼圀氏所藏本令寫畢之

織錦舎隨筆卷下終





「葦筵小牘」に就いて

花卉數種をあげて説述したもので、附録に花鑑が添へられ、井岡列、佐伯職孝の序跋がある。本書は文化年間の半紙判の刊本の小精廬藏本によつたのである。

著者小野職博は京都の本草家で、字を以文と云ひ、蘭山、衆芳軒、朽匏子等はその號である。本書の外に本草綱目記聞、本草啓蒙、廣參説、格物微、松軒愚筆、飲膳摘要外數種がある。文化七年正月歿、年八十二。

葦筵小牘叙

蘭山小野翁七十在京其嗣其孫及及門之士以其覽揆之辰開筵稱壽翁眈作草木十品考一編而報之明年應召來斯都今年八袞又其嗣其孫及及門之士開筵稱壽翁亦撰葦筵小牘將報之令予題其首翁以本草之學著名海内閱覽博物學世所知是編辨花草者凡若干種雖厪厪不過數頁世人所疑之物得之而判然豈可不珍惜哉昔者陸平泉九十有餘餘雜識之撰袁寓翁百歲有楓窻小牘之著此不啻亨其大年其書皆不朽于今是編亦當並傳於永久而已且翁年八十精明強健猶七十之時過此以往至九十歲若百歲無疑矣則每值其誕辰其嗣其孫及及門之士開筵稱壽翁更必有所撰著因不辭而書之以爲左券矣

文化五年歲在戊辰暮春之初

柳原拙者丹波元簡撰

丹波元簡

廉夫

武田信任書

甲斐

信任



臺筵小牘

文化戊辰余行年八袞其生辰則八月也而門生請以今月壽於是錄近來愚得十款及弁說三則以示諸同志且擬古希之例云

時三月二十有一日蘭山於衆芳軒日新樓書

石文氏

小野所知之地

愚得十款

諸葛菜一名諸葛草

即唐詩畫譜之紫羅欄花與鳶尾同名也

アラセイトウ

嘉興縣志云諸葛菜藕色狀似菜花

通雅云蕪菁與萊菔全別謂之諸葛菜亦有二種○南京一種諸葛菜春夏初紫花食葉不食根朱輔山

溪蠻叢話云獠獠產馬王菜味澀多刺即諸葛菜皆非蕪菁

方侗集云諸葛草其莢正紫二三月時花發滿庭縹繡可愛

馬鈴薯

ジャガタライモ 甲州イモ尾州

清大夫イモ信州 伊豆イモ江州

朝鮮イモ アカイモ共同上

松溪縣曰馬鈴薯葉依樹生掘取之形有小大略如鈴子色黑而圓味苦甘



溫牡丹一名冬牡丹

カンボタン

御製詩集溫牡丹行云女夷司花定花期春芳秋豔各有時鼠姑殿春風信遲一開万卉都收姿花師解奪女夷巧暖審溫棚培護好縮地燕北忽江南駐年凋後偏榮早臘鼓鳴未春草萌黃姚紫魏先吐英圖入歲朝百事吉玉梅為弟水仙兄韓湘頃刻雖輸疾敷華頗不殊殷七欄蜂欲探却無緣屏燕相看渾可匹簾旌嫩日照暄妍簷溝積素映輕烟玉局詩與石田畫蘇軾有冬牡丹詩匪今伊昔韻事傳異哉草木無情物旋轉猶然資剪拂擘苞彈蕊笑彼工易俗移風慙我拙

落葉松寄生

エブリコ

廣群芳譜落葉松條云松上寄生白脂厚五六寸光潔似玉微軟而堅有用之為靴底者

金瓜茄

即肇慶府志之黃茄與老茄一名

タマゴナスビ      ギンナスビ

キンナスビ

臺灣府志云金瓜茄葉幹同茄花連五瓣似鴨脚淡紫色結實酒鍾大似金瓜有外瓣初白後黃土人以供玩

仙草

イギス

漳州府志云仙草泉郡志曰搗爛絞汁和米粉煮之雖三伏成凍凍似石花而黑

洋菊

オホギク

御製詩集題洋菊四十四種序云律當西顛落璫自擅清華節到東籬溟澥誰傳逸格諧價初聞估舶國擬衆香簽名尙記甌籃園殊獨樂於是羅舍却席難誇舊宅凡材魯望廻帆欲遣叢書補註迺訂群芳別譜因標仙植嘉稱俸色賦形圖成妃白儷青之外擒詞抽秘句就餐英吸露之餘從茲素女奇粧都偏三三幽徑奚取封姨好事護持九九震辰

承露盤大可尺許

蜜蠟蓮大六七寸許



紅繖蓋大尺許

桂叢紫徑尺許

麝香盃大可七八寸

玉井蓮大五六寸

鶴翎素大可六七寸

賽姚黃大尺許

臘脂帶大尺許

勝芙蓉大可七八寸

顛紅翅徑尺

右摘錄四十四種中大花者

元寶草

ホトケノザ ホトケノツマレ

本草從新云元寶草辛寒補陰治吐血衄血生江浙田陰間一莖直上葉對節生如元寶向上或三四層或五六層

山籐

クマヤナギ 山勢州  
クマフデ 山勢州  
クマブチ 豫州 土州  
クロガネカヅラ 紀州

ユヤナギ

イボクヤナギ 城州 貴舟

タニフデ

タニトデ

タンフサギ

カナヅル 奥州

カナカヅラ 藥州

コマノツメ 江州

コムマノツメ 同上

トウヅラ 越後 奥州

トツラゴ 越後

ピナンカヅラ 勢州 内宮

リウキウハゼ 同上 花戸

鐵鞭 江戶

ムチカヅラ

盛京通志云山籐木類枝幹柔韌如籐故名土人取爲鞭桿

旌節花

錦葵亦有此名又有同名

マメフデ

マメブシ 豆州

マメヤナギ

マメバス 勢州 津



マメガラウツギ 同上 蕨野

ヤウラクザクラ

マメボンノキ 奥州南部

マメツト紀州

マンブシ信州

木フヂ 勢州内宮

フヂダイコ同上

クロウツギ

アヅキナ紀州

シトロ豆州

ズイノキ 奥州津輕

ツキデノキ 大和本草

ツキダシノキ勢州

シロツキデ勢州

ツイノ木同上

大ツキノ作州

廣羣芳譜云黄山志旌節花色黃幹似老藤一枝綴數十朶成串下垂行如旌節故名 與黎州圖經旌節花名同物異

弁説三則

側金盞花清人謂之報春花

フクジュサウ

フクヅクサウ

元日サウ

志賀ギク

富士ギク

マサク 奥州南部

アナムミモ加州ニテマンサクト云皆取ニ早春先開之義也

余往年以桂海花志所載側金盞花爲福壽草其文曰如小黃葵葉似槿歲暮開與梅同時或駁之曰黃葵即黃蜀葵也槿即木槿也皆非彷彿福壽草之花葉者而何以爲側金盞花耶答曰黃葵有二丈菊亦名大黃葵通其所言如小黃葵者乃似丈菊而小之謂也故事物紺珠云側金盞花一名長春菊 金盞草ニモ亦有此名 既有菊名則其非以黃蜀葵爲小黃葵也明矣槿葦同字 康熙字典故爾雅翼月令廣義函史雲南通志通雅皆以木槿作木葦唐類函引禮之葦葦作槿葦李東璧云葦者旱芹也紫葦黃葦皆以似芹而名之今福壽草之葉雖至細碎如胡蘿蔔葉不似芹葉而其開花未葉時宛如芹葉初出之狀故云葉似槿也此草生高山幽谷每歲暮從諸州致於花師花師上盆以爲獻歲之贄故又名元日草實開與梅同時者也至春苗高寸餘莖頂先開花大一寸餘晝開夜闔凡十餘日而褪其開必迎陽故斜側不直立而其色深黃光滑如紫金單葉者十餘瓣重葉者數十瓣皆裏抱如平盞狀是所以名側金盞花矣黃蜀葵花亦常傾側故有側金盞花之名大小雖殊亦可類推焉近來或以爲獻歲菊或以爲雪蓮花按臺灣府志云獻歲



菊立春始開其性尤殊凡菊則似是指菊之以早春開花者矣松漠草云雪蓮花產雪山葉似蒲則亦非福壽草之比也

楊桐

サカキ

マサカキ

楊桐一名青精一名烏飯樹中山謂之山米曰野麻姑生深山中樹類冬青而葉更長大滑澤經冬不凋又有長葉細葉圓葉鋸齒葉之數品夏月每葉間開數花皆向下如照水梅稍狹小故好事者去葉以供瓶花謂之夏梅與木天蓼同稱其色微黃彷彿九英梅而有光花後結圓實小於天竹子生青熟黑可以染紫色本邦神祠必植此木或為森林又折枝以供祠前猶浮屠氏以莽草供佛然故倭俗名此木為神名莽草為櫛中山傳信錄云有樹葉似冬青高丈餘花如棗子纍纍生如中國女貞子甘酸可食亦可染物作青蓮色名山米又名野麻姑當即青精也通雅云烏飯樹一名楊桐非沈括所謂南天燭也烏飯樹結子黑可啖南天燭結子赤或老則有高節古今詩話曰烏飯名楊桐似小冬青非揚櫨也據此文則李東璧引古今詩話揚桐以為南天燭者非是矣蓋楊桐烏飯青精原皆天竹之一名也故用天竹莖葉漬汁炊飯者曰青精飯青精乾石餽飯之法詳于本草綱目古昔朱靈芝真人常服之人稱

青精先生故高漉謂此飯為青精先生糲米飯糲亦可以染飯故有此三名耳

櫻 附花鑑花錦

サクラ

ハルツゲサ

モヨヒグサ

ヨシノグサ

ツマコヒグサ

アダナグサ

ユメミグサ

サラシグサ

フツカグサ

アケボノグサ

稻若水子曰黃蘗唐僧以索古賴為海棠蓋以是花為垂絲海棠之別而枝梗略堅故去垂絲二字以海棠呼之耳恐非有考其正名者也夫浮屠氏之說晨夕所講究當有過於人而博物自非其所學也况又皆少時渡海歸化故在彼中有識之者無幾也人見其為唐僧而每一聞其說信以為然過也徧歷見志傳所載真海棠即今南京海棠是也云々垂絲海棠今絲索古賴是也一家言曰本邦稱櫻花者先輩嘗曰海棠譜中所謂垂絲海棠即是以汝南圃史等書解金棠棣曰金棠棣花狀如垂絲海棠之說考之則垂絲海棠為今櫻花尤可證矣金棠棣即山吹是也唐山僧指絲櫻花以為垂絲海棠者誤也垂絲其花英軟



弱如絲，開放即垂下，非以枝條軟弱命名也。如絲櫻花，洛陽花木記有軟條海棠是也。江村氏曰：圭按日本稱佐屈羅曰櫻，其謬也久矣。櫻桃也是乃郁李之屬，而與佐屈羅迥別。後人不察，襲其謬，妄引王荆公宋景濂詩以證之，疎謬之甚也。王宋固不識佐屈羅，唯因倭人譯語傳聞其名，而漫寄題焉耳。佐屈羅即垂絲海棠也，而先輩以維登佐屈羅充垂絲海棠者，亦欠精審。所謂垂絲者，非柔枝長條之謂，以其垂英如絲故也。行厨集云：垂絲海棠吐絲而下，花似海棠，蓋指千葉重葉佐久羅而言也。洛陽花木記云：垂絲一名軟條，指維登佐久羅而言也。然則垂絲海棠佐久羅之總稱，而軟條海棠即維登佐久羅也。如此分別而自明矣。愚按此三說皆將退櫻名，而以垂絲海棠為正名焉。然今真垂絲海棠人間最多，而無人不識之者，固海棠之品，而非素久賴之屬也。古時真者未來，徒勞考檢，爾今也。文運日開，古絕無者今多有，古不詳者今反明，不須費辨，而真贗自明白者，不止此木一品。豈不亦愉快哉。故余戲賦曰：今多船上真花木，賣子軟條豈其然。又嘗裁垂絲海棠試之，不獨垂英如絲，其枝亦裊軟。故花木記云：垂絲海棠一名軟條，則其分垂絲海棠與軟條為二者，非欠詳悉者哉。夫櫻花之於櫻桃也，其名同而物別矣。而說之者往往混而不分，胡人亦然。李東璧言櫻桃乃櫻而非桃者，是併一物以為一者也。沈相如言櫻桃花似桃，差小而色嬌紅，一顯五六花如垂絲，然又引張茂卿紅粉風流無倫，此君之事者，並是櫻花而非櫻桃也。

若夫櫻桃，則花開不如垂絲，而其色白非可稱紅粉風流者矣。沙起雲詠長崎云：櫻桃如玉海棠妍，白註云有白櫻桃，是以櫻花為白櫻桃者也。又釋菑亭來于長崎詠櫻花題櫻桃花，日本風土記解櫻花和歌曰：素古賴其題曰櫻桃，又語音訓櫻桃為素古賴鳥米，群芳譜載王僧達細葉未開，露紅葩已發光及文同嫩葉藏輕絲，繁葩露淺紅，黃群芳譜載白居易慢牽欲傍櫻桃，泊借問誰家，花最紅是皆以櫻花為櫻桃者也。故所謂垂絲櫻桃者，即維登素久賴也。其賦櫻花者，白居易曰：一枝先發花中梅，櫻杏桃梨次第開。及小園新植紅櫻樹，司馬溫公曰：紅櫻零落，杏花開吳融曰：粉紅輕淺靚妝新。于若瀛曰：三月雨聲細櫻花疑杏花，貞元曰：朝對白櫻惜日斜。李卓吾曰：瓊瓏一樹玉雲香，彷彿垂絲蜀海棠。宋景濂詩載於蘿溪集。又有西湖王蘭谷詩：其餘不遑枚舉。又聞隅州有藏錢舜舉著色者，又沈約王維王荆公蕭愼江總元好問皆有山櫻之句。又陳樵垂絲海棠賦云：取蔓紅梨，借附山櫻，箋卉云山櫻木本，孟夏作花，結實瑣瑣如含桃。詩疏云：又有赤棣樹亦似白棣，葉如刺榆葉，而微圓子正赤如郁李，而小五月始熟。關西天水隴西多有之。據此文，則山櫻赤棣亦是櫻花矣。傳聞延寶中有問此花於船商者，何清甫者答曰：我國無此花。釋菑亭詩亦云：東來初見此花奇，應是閩中亦雖有之，而其花不美，不知為櫻花也。又陸放翁詩：五門收燈藥市近，小桃妖妍狂殺人。註云：蜀中入春惟小桃先開，似垂絲海棠，是正合沈相如言似桃，差小



如垂絲然老學菴筆記復詳其形狀盛京通志云小桃紅三物類紅梅枝亦輕軟初夏盛開廣群芳譜載小桃詩詞不少又洛陽花木記載小桃及垂絲櫻桃之名則當是蜀中謂櫻花為小桃盛京呼為小桃紅皆其方言也爾乃知閩中無櫻花佳種而蜀中則有妖妍狂殺人者皆因其地氣之寒煖不同而其開花亦有收燈初夏之異也蓋櫻花性喜寒故我東方最饒產之其品亦不為不多而直謂之為花猶洛陽之人重牡丹曰花不曰牡丹也亦足以為殿春之花魁矣雖如閩粵亦應有此木而熱壤非其性之所宜故其開花無有如我國美觀者故船商曰無此花也而世人據此言竟以為唐山不產此物所以無名家詩賦焉雖江村氏之博洽言王宋固不識在屈羅唯因倭人譯語博聞其名而漫寄題焉耳抑何不稽之甚耶宋既曰賞櫻日本盛於唐余亦嘗得舶上大黃以櫻枝穿乾者則不可言彼地不產此木也本草綱目載山嬰桃或書作山櫻桃李瀨湖所指者是山索古賴而櫻中下品者也其花單而不耐久遇風雨便落無可賞者然好事家賤重葉天治反以此品為雅觀其結實至小雖不足以比櫻桃而其核形相彷彿伊豆海島記云八丈島山中多大櫻樹其花皆單而開最早有正月末盛開者其實大如郁李土人鹽藏食之味甘酸而美則是櫻實之大而易混於櫻桃者所以諸書以一物為一也然櫻花是大本老者不啻數抱其賞在花而其種不止數十品櫻桃是小樹不數尺便結實老者不踰丈其實在實而其

種不過數品名同而物別不可不辨矣有食天本草者五十一卷傳言張介賓編集曰櫻花釋名山櫻一名蜀海棠一名絲海棠一名白雲木一名朱櫻一名樺木其混淆最甚而文亦杜撰莫可以信用焉則其書決非張氏之編也自明矣



附 録

花鑑

余五十餘年前師説に據て花の名を綴り狂吟廿一首となし忽忘にそなへ花鑑と名づけし草藁  
火後はからず反古中より取出せりいま此地の花其數最多くして名もめづらし故に此狂吟及  
び故學友敬齋述る所の花錦を録し以て古名を弘むる事しかり

山ざくらひとへにさきてしろたへのはなの數そふみよしの春  
咲にほふ花の中にもさきがけはひがんの八重にさかる熊谷  
枝たれてさく彼岸こそいとさくらくよりて白く大なる有明  
をそくさき葉までみるべき鹽竈はしは打よれる八重の小輪  
大輪のさかでさくらの色なくて五つはとのよむつは芝山  
えたどにひとへまはしはる桐がやつ八重のみさくをろうまとをしれ  
やへにさきちらでうつろふ江戸ざくらかさね富るは法輪寺なり

大原も寂光寺なるはたはこれほかにまれなる匂ひぞふかき  
伊勢さくらをはりにあらて早咲やむらさきの八重そこ白き花  
千重の菊すがた稀なる楊貴妃のふかくぞもゆる火ざくらの花  
はな白くひとへにさきて綠萼にうつるを人はあさきとぞ見し  
黄ざくらといふは茶色に大輪のやへにひらける花とこそきけ  
秋のゝにさけるとらの尾それならではごとにしげき上溝の花  
陸奥の南殿はふげんみやこにはたゞうはみそをさしてこそいへ  
中輪のうすむらさきのやへざくらこれを南殿といふ人もあり  
九重の御はしのはなはむかしよりよし野かまくらたがいにぞうゆ  
普賢象花のなかにもあるものを葉なくぞさける姥ざくらかな  
ひとへなるわか木の櫻む月より秋までたえずさくもめづらし  
千本よりかすもすくなき兒ざくらともに李の花にいとひとし  
彼岸伊勢よし野しは山殿ざくらきりがやつ江戸法輪とらの尾



ひと品を實うへにすればいろも香もかさねもなさへかはりこそすれ  
寶曆癸酉四月中澣

蘭山

葦筵 小讀

花 錦

くれなゐの	一重のはなは	小ざくらや
えだは柳の	いとざくら	はめるはもなき
うばざくら	八重さきがけば	くまがへよ
底の白きは	いせなれや	しほめる花の
五つむつ	垂つゝ薬は	ふたつ三つ
青芽まじれる	普賢こそ	陸奥國なる
南殿そよ	もゆるばかりの	緋ざくらと
薄げはひせる	楊貴妃は	ともに菊にや
たくへまし	大輪の花の	かすゝを
ひとへになして	いとくゝり	かこと譲れる
小手まりや	にほひ櫻は	をろそかに
しろき一重は	やまざくら	さらにしげきは

葦筵 小讀



よしのやま	睦月に咲て	秋までも
たえぬ若木は	いとけなく	季にくたる
兒ざくら	五葉づくりの	殿ざくら
猶おほいなる	しばやまは	六出にひらく
わしのおよ	みどりの夢に	をつるにぞ
淺黄とはみし	さかてとは	遠くみやれば
酔るなり	たれかはめでん	うはみぞは
かゝげし花の	穂をなせる	これぞ南殿や
いぬざくら	このかへ名とや	樺ざくら
はなびら細き	眞ざくらは	七重や八重の
えどざくら	華みしかにて	かさね富
ちらでうつるふ	いとめづらし	似て大なる
法の輪や	單もまじる	きりがやつ

すこしゆすれと	ましはらて	江戸にたくふは
櫻間なり	ほのくみゆる	有あけは
ひとへにさくそ	げにおほき	はまてみるへき
しほかまは	しは打よれる	花にこそ
立枝あらけき	虎の尾は	本末わくる
ひまもなし	直ならぬ枝	なかきくき
これそ府急よ	二三十	千重にかゝれる
提燈も	大出の茶色	黄ざくらや
夫と名をえし	そのたねも	うゆれはいつれ
變るとをしれ		

已上百三句三十三種

寶曆甲戌六月

敬齋主人述



跋

夫本草之學博矣蓋五方所產之品物有不可盡知者而群書所載之名稱有不可悉明者也大父深有慨焉嘉遜陋巷以教授為生枕籍本草四十年于茲矣矧探野以正草木之名時入山以覈金石之實惟願使療病明藥真質而蒼生躋壽域焉大父生來多病疴癯孱弱如將不勝衣是以食有度飲有量專以攝養為事及至耳順身漸微健舊疾漸祛至今髮白齒落未用靈鷲鷄鳴而起鈔讀斯樂惜寸陰如初學又性好靜而無親友所謂水清而無魚者乎先在京師門生壽古希百百法眼開筵於東山因書草木十名以示同志其冬十月蒙台命翌年三月到于東都茶賜月俸教授醫庠今既十年門生又請壽八秩故做例書考十條說三條以示之今也遠近從學者已盈千矣諸州之品物輻輳不為不多加之典籍及動植之物海舶載來者最夥故古所不可知者今乃明矣古所絕無者今乃多矣日新而又日新是所以名樓也蓋昇平日久文化方盛之所致也不亦可喜乎因記其略以為跋

文化五戊辰春三月二十一日

孫 佐伯 職 孝 謹 書

畝 蕙

雪 木 林 生

武田任誰也寫字



書臺筵小牘後

不如學

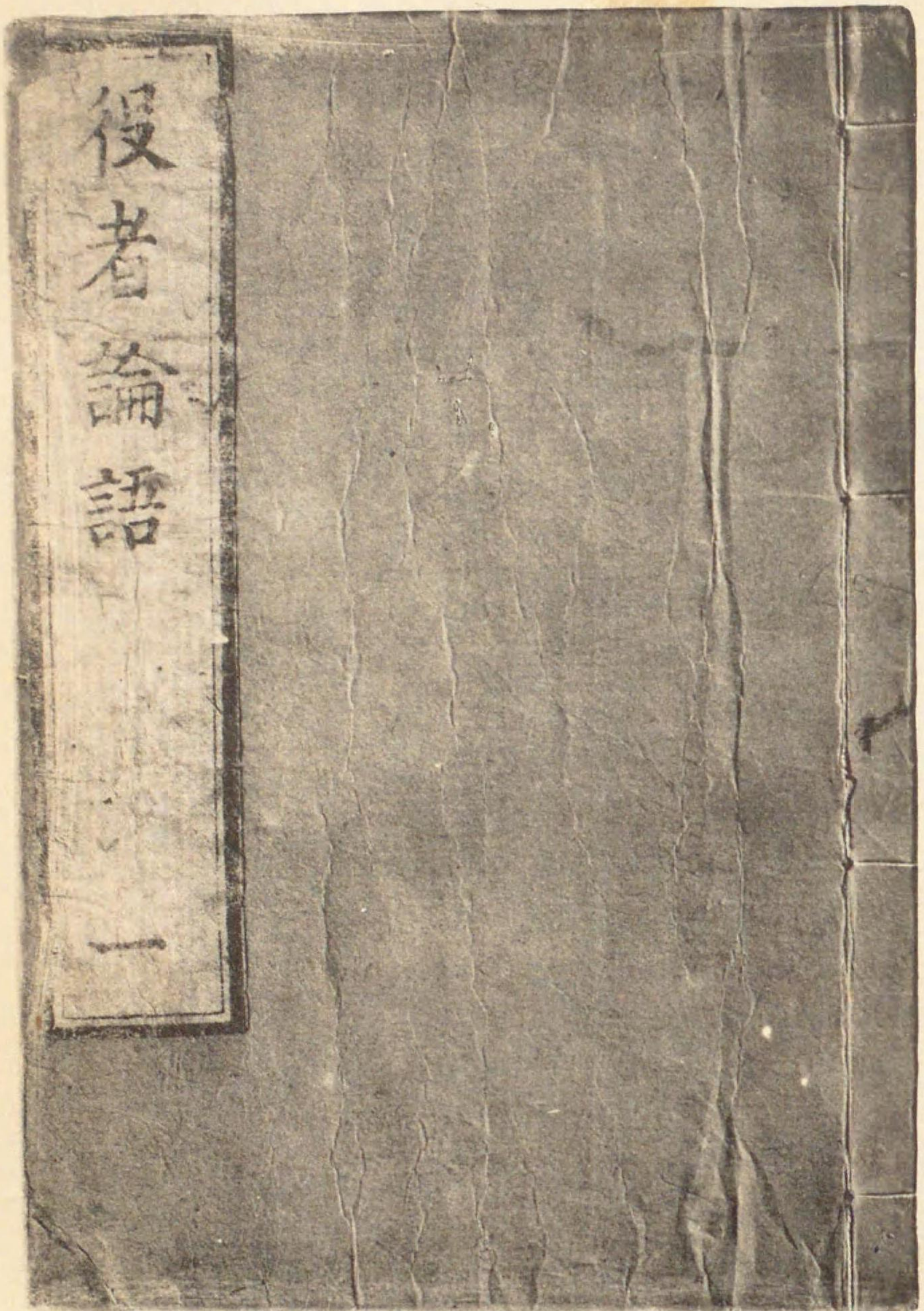
今茲戊辰 蘭山先生年八旬矣而記性不衰教學無倦燈下能讀蠅頭字猶其壯之年也云蓋 先生講明本草啓牖來學使起疵癘祛疠札者皆取資於此焉則其仁于天下後世亦厚矣宜天之報之以壽不啻踰臺望期而已歲三月及門之士相率具牛酒上堂爲壽 先生爲疏其所素蓄之說草木若干名以賜之乃相與謀餼諸梓題曰臺筵小牘將遞送門人散在各地者以共其惠夫 先生年益高業益勤受而讀之者若能有所欽羨激發以從事於斯則天又將報之以壽亦 先生之賜也

受業 井岡 列謹識

井列  
私印

元  
原氏

臺筵小牘終





「役者論語」に就いて

本書は八文舍自笑の編輯にかゝるもので、金子吉左衛門の「耳塵集」杉九兵衛の「舞臺百ヶ條」京屋彌五四郎の「あやめ草」富永平兵衛の「藝鑑」民屋四郎五郎の「續耳塵集」東三八の「賢外集」佐渡島長五郎の「佐渡島日記」の七部よりなり、當時三都の役者藝品定をも附加されてゐる、美濃半截四卷の小本で安永五年の刊本である。

役者論語

此書や、むかしより上手名人と稱せし役者のはなしどもを、古人書留め置し卷々なり

舞臺百箇條

元祖坂田藤十郎師匠杉九兵衛といふ花車形の書置る書也

藝鑑

富永平兵衛むかしの狂書置る言作者也

あやめ草

元祖よし澤あやめはなしとも福岡彌五四郎書とめたる書也

耳塵集

上手のはなしを金子吉左衛門書しるす

續耳塵集

民屋江音四郎五郎事書留し事也

賢外集

染川十郎兵衛聞覺し事をはなせしを東三八(狂言作者也)書置る賢外といふは十郎兵衛法名也

佐渡島日記

むかし今の藝者心得に成べき事を連智坊が書置なり連智は佐渡島長五郎法名也

右七部の書は優家の龜鑑なれども梓にちりばめ付録に當時三ヶ津役者藝品定を加入する而已

嘉永丙申晩秋



舞臺百箇條

杉九兵衛述

一今の立役のきつばをまはして、かたきをきめるは、かたち計にて心のきつばをまはさず、見物衆にほめらるゝ事をのみむねに持てまはすゆへ、かたきをきめるではなくて、見物衆へ廻すきつはになる、夫故敵役の身にこたへず、よはみの出し所がはづまぬのみなり、相手仕事なれば我は相手をたて、我も相手にたてらるゝ様にさへすれば、舞臺のおもてしつくりとなる故、自然と見物衆のあつと感ずる場へゆく也、相手にかまはず、我ひとりあてんとするを、孤自當といふ、孤はひとりよみ自はみづからとよむ耻べし

一精を出すといふは、ねても覺ても、仕内を工夫し稽古にあくまで、精を出して、扱舞臺へ出ては、やすらかにすべし、稽古に力一ツばい精出したるは、やすらかにしても、少しも間はぬけぬものなり、稽古工夫には心をつくさず、舞臺にて計精を出せば、きたなく、いやしく成て、見ざめする事うたがひなし、扱物稽古といふものは、初日より二日も前にすべき事也、初日

の前日はとくと休みて、きのふの惣けいこの事を、ほつゝ心におもひめぐらし、氣をやすめて、初日を始れば、初日よりおち付て、間のあく事なし、前日にアタフタと稽古し、夜をかけて物さはがしく、翌日を初日とすれば、わるい事もかなりがけにせねばならず、此ヶ條大切の事なり

一狂言の實は虚よりおこり、おかしき事は實よりせねば無理あてになる也

一狂言をするは、心一ぱいにするをほむべし

一藝者其一人となれば、至らぬ藝者をねみ、あしざまにいふ事は、たとへていはゞ、數百の蟻の蚯蚓をせゝるに似たり、甚あさましき事也、其長に至るものは、おのれが心をみがきて、其品に應ずる妙をあらはせり、甘柿の木に澁柿をつぎて、はやく實ののるをたのしまんとするゆへ、却て澁柿の悪名をとる、澁柿の木に甘柿を接合せ、生たつ時は本の味をうしなはず、萬物も實ばへより善悪しれがたければ、役者も物になれたる人にたより、接穂のごとく修行せば、名譽の名を得べし

一役々の情をかんがへみるに、けいせいは位高にして、心はしやれたるもの也、武士の女房は下



をあはれむ心有て、人おどけたる事をいふ時は、きつとするかたちよし、よつて武士の妻とみへる也、すべて藝者は相手の氣に應ずるを第一とす、音の合ぬ狂言は名人たりとも、心に叶はず、されば其人の氣によつて、せわしくしてしにくきあり、又藝のかわる仕内有、又よくおぼえてせわしきあり、延過るあり、あるひは拍子きゝにて氣のはる有、しそんじあつても取直しできる有、うれい事をする時武士の妻は、聲をあげてなくは見ぐるし、男も聲をあげてなくものにあらず、年より愚にかへるゆへ、思はず聲あげてなく事有、至てうれい事するに、こらへてなく有、おさへてなく有、おさへてなくは人目をはばかり、こらへてなくはみれんにみゆる也、又ぢかい切腹手負などいふ時は、一調子高し、これ<sup>と</sup>のほす故、前後いふ事さだかならず、次第<sup>く</sup>に聲もよはる也

一見物人なきとて、姿をいとはぬ事、其身のそん也、たとへば全盛するけいせいは、さのみすがたを粧ひなくとも、人目に立風、またはやらぬけいせいなりとも、衣裳はなやかに著る時は、おのづから人心迷ふ也、狂言の役の替りを、人に頼むたのまるゝ事も、人の役故そまつに勤めても、其身の誤りにならぬと心得るは、大きな違ひ也、萬一本役の人より、一ト所成とも勝

れたる仕内あらば、其身の會稽ならずや、おしひかな其一人に成るべき身をもつて、はじめ一ト足のふみちがひより、萬里の迷ひとなる也

○是より下の箇條は虫ばみて見えず惜むべし

舞臺百箇條終